東彼杵町文化財調査報告書第３集

白　井　川　遺　跡

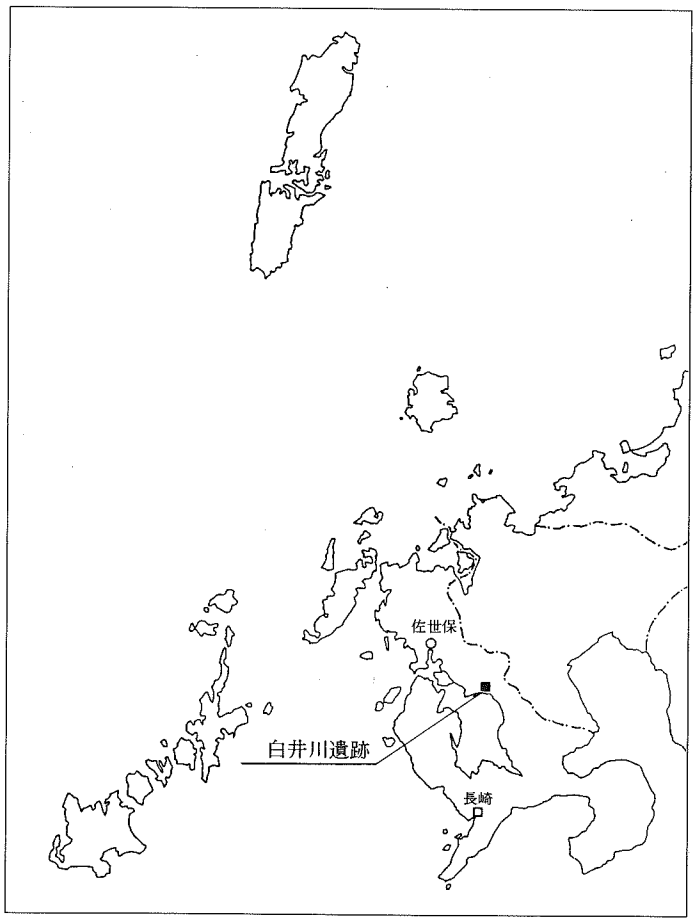
―彼杵中央地区圃場整備事業にかかる調査―

1989

長崎県東彼杵町教育委員会

東彼杵町文化財調査報告書第３集

白井川遺跡



長崎県東彼杵町教育委員会

大村湾上空南から

遺跡遠景・近景

発刊にあたって

このたび、彼杵中央地区県営圃場整備事業に伴う、埋蔵文化財の緊急発掘調査を蔵本郷字白井川一帯について実施いたしました。

ここに、その白井川遺跡調査報告書を県費補助により刊行することになりました。

当調査については、前回同じ圃場整備事業に伴う調査として、彼杵中学校北側に所在する岡遺跡の発掘調査を行いましたが、東側に位置する白井川地区において、同事業による水田の表土剝ぎの作業のおり、その表面に数多くの土器片と箱式石棺、中世の中国輸入陶磁器類が発見されました。そこで県文化課、県北振興局、町担当課と協議を行った結果、２本の排水路について緊急調査の必要が生じ、県文化課に本格的な調査をお願いした次第です。

本調査の結果、縄文式土器、石器、弥生式土器、古墳時代の土師器、須恵器など、縄文時代から中世にかけての複合された、大規模な遺跡であると同時に、広範囲に亘る時代であることが判明しました。

また、彼杵平野にはいくつかの古墳群が点在し、県史跡の前方後円墳の「ひさご塚」も位置していますが、今回の調査により、その古墳成立の背景に貴重な手がかりを与えてくれたことは喜ばしい限りです。

本報告書が今後の文化財研究、保護活用の一助となれば幸いと存じます。なお、今回の調査に当たり格別のご援助をいただきました県文化課の諸先生方をはじめ、ご協力いただいた地元の皆様、関係各位に対し、心より深く感謝申し上げます。

平成元年３月31日

東彼杵町教育長　喜々津　前　勝

例　　言

1．　本書は、東彼杵町教育委員会が実施した、彼杵中央地区圃場整備事業に伴う長崎県東彼杵町蔵本郷所在の、白井川遺跡の緊急発掘調査の報告書である。

2．　調査は、東彼杵町教育委員会が県北振興局と委託契約を結び調査主体となり、県文化課が調査を担当した。

3．　本調査は昭和62年10月５日～11月12日の間、安楽と川畑が担当した。その後工事中に石棺墓の発見があり、昭和63年５月９・10日安楽・村川が対応、また52号支線排水路の設計変更の調査は、昭和63年９月19日～９月26日まで行い田川・安楽・伴が対応した。

4．　本書の記録・編集は安楽が行い、縄文時代の石器を伴が執筆した。なお調査員の他に、木製品を県立美術博物館主任学芸員の立平進氏と日本はきもの博物館主任研究員の潮田鉄雄氏に玉稿をいただいた。

5．　調査時および整理後の遺物写真は安楽によるが、輸入陶磁器の遺物写真は藤田和裕、遺物の実測は、村川逸朗・伴耕一朗の協力を得た。

6．　出土遺物については、国から一括譲与を受け、町教育委員会の施設で保管している。

調査関係者

東彼杵町教育委員会	喜々津前勝	教育長	秋月清己	教育次長
	波戸口利勝	社会教育主事	山口　章	公民館主事
	山口弘子	事務吏員	開　正和	嘱託

長崎県北振興局耕地部土地改良課

長崎県教育庁文化課	田川　肇	調査係長
	安楽　勉	主任文化財保護主事（調査担当）
	川畑敏則	指導主事（現山手小学校教諭）（　〃　）
	村川逸朗	文化財保護主事（石棺墓調査）
	伴耕一朗	文化財調査員（52号支線排水路計画変更調査）

本 文 目 次

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　周辺の地理的、歴史的環境……3

Ⅲ　調　　査

1．調査の概要……8
2．土　層……10

Ⅳ　出土遺構、遺物

1．51号支線排水路出土縄文時代の遺物……14
2．弥生時代の遺構……31
(1)埋葬遺構
3．弥生時代の遺物……38
4．古墳時代の遺物……46
5．中世の遺構遺物……52

Ⅴ　ま と め……87

挿　図　目　次

第１図　遺跡周辺の地形図……2
第２図　遺跡周辺の地質図……3
第３図　東彼杵町遺跡分布図……5
第４図　グリッドおよび遺構配置図(1/300)……9
第５図　51号支線排水路土層実測図(1/60)……11
第６図　52号支線排水路11区土層実測図(1/3)……13
第７図　縄文後期の土器実測図(1/3)……15
第８図　縄文晩期の土器実測図　(1)(1/2)……17
第９図　縄文晩期の土器実測図　(2)(1/2)……18
第10図　縄文時代の石器　(1)(1/2)……20
第11図　縄文時代の石器　(2)(1/2)……21
第12図　縄文時代の石器　(3)(1/3)……24
第13図　縄文時代の石器　(4)(1/3)……25
第14図　縄文時代の石器　(5)(1/3)……26
第15図　縄文時代の石器　(6)(1/3)……27
第16図　縄文時代の石器　(7)(1/3)……28
第17図　石斧遺存状況……30
第18図　長幅比……30
第19図　厚さ……30
第20図　第１号石棺墓実測図(1/20)……31
第21図　第２号石棺墓実測図(1/20)……33
第22図　第３号石棺墓実測図(1/20)……33
第23図　第４号石棺墓実測図(1/20)……34
第24図　第５号石棺墓実測図(1/20)……35
第25図　第６号石棺墓実測図(1/20)……35
第26図　第７号石棺墓実測図(1/20)……36
第27図　第８号石棺墓実測図(1/20)……36
第28図　第20号石棺墓実測図(1/20)……37
第29図　第21号石棺墓実測図(1/20)……37
第30図　弥生式土器実測図　(1)(1/3)……39
第31図　弥生式土器実測図　(2)(1/3)……40
第32図　弥生式土器実測図　(3)(1/3)……42

第33図　弥生式土器実測図　(4)(1/3) ……43
第34図　弥生式土器実測図　(5)(1/3) ……45
第35図　方柱状片刃石器実測図(2/3) ……45
第36図　古墳時代の遺物実測図　(1)(1/3) ……47
第37図　古墳時代の遺物実測図　(2)(1/3) ……49
第38図　古墳時代の遺物実測図　(3)(1/2) ……50
第39図　カマド実測図　(1/3) ……50
第40図　土師質椀実測図(1/3) ……51
第41図　52水―11区遺物出土状況図(1/30) ……52
第42図　52水における土器の組成 ……53
第43図　白磁椀実測図　(1)(1/3) ……55
第44図　白磁椀実測図　(2)(1/3) ……56
第45図　白磁椀実測図　(3)(1/3) ……57
第46図　白磁椀実測図　(4)(1/3) ……59
第47図　白磁椀実測図　(5)(1/3) ……60
第48図　白磁皿実測図　(6)(1/3) ……61
第49図　同安窯系青磁実測図　(1)(1/3) ……63
第50図　同安窯系青磁皿実測図　(2)(1/3) ……64
第51図　龍泉窯系青磁実測図　(1)(1/3) ……65
第52図　龍泉窯系青磁実測図　(2)(1/3) ……66
第53図　陶器実測図(1/3) ……68
第54図　その他の輸入陶磁器(1/3) ……68
第55図　瓦器椀実測図　(1)(1/3) ……70
第56図　瓦器実測図　(2)(1/3) ……71
第57図　瓦質皿および土師質皿実測図　(1)(1/3) ……73
第58図　土師質皿実測図　(2)(1/3) ……74
第59図　白磁製人形頭部図(1/1) ……75
第60図　須恵質土器実測図(1/3) ……76
第61図　滑石製品実測図 ……78
第62図　石鍋実測図　(1)(1/3) ……79
第63図　石鍋実測図　(2)(1/3) ……81
第64図　木器、木製品実測図　(1)(1/3) ……84
第65図　木製品実測図　(2)(1/3) ……87

図 版 目 次

図版 1　遺跡遠景……89
図版 2　調査区近景……90
図版 3　調査風景……91
図版 4　調査区の土層①……92
図版 5　調査区の土層②……93
図版 6　遺物出土状況①……94
図版 7　51水―01区遺物出土状況②……95
図版 8　52水―11区遺物出土状況③……96
図版 9　箱式石棺墓検出土状況①……97
図版10　箱式石棺墓検出土状況②……98
図版11　縄文後期の土器……99
図版12　縄文晩期の土器……100
図版13　縄文晩期の石器①……101
図版14　縄文晩期の石器②……102
図版15　縄文晩期の石器③……103
図版16　弥生土器①……104
図版17　弥生土器②……105
図版18　弥生土器③……106
図版19　弥生土器④……107
図版20　古墳時代の土器……108
図版21　古墳時代およびその他の遺物……109
図版22　中国輸入陶磁器（白磁）①……110
図版23　中国輸入陶磁器（白磁）②……111
図版24　中国輸入陶磁器（白磁）③……112
図版25　中国輸入陶磁器（同安窯系）④……113
図版26　中国輸入陶磁器（龍泉窯系）および人形頭部⑤……114
図版27　その他の輸入陶磁器……115
図版28　中世瓦質および土師質椀……116
図版29　中世瓦質および土師質皿……117
図版30　中世須恵質土器……118
図版31　滑石製品……119
図版32　滑石製鍋……120

図版33　木器・木製品……121
図版34　木製品（下駄）……122

表　目　次

表１　東彼杵町遺跡地名表……7
表２　石器計測表……22
表３　石斧計測表……29

Ⅰ　調査に至る経緯

東彼杵町では、昭和58年度から県営圃場整備事業として彼杵中央地区が計画され、彼杵川流域の三根郷・法音寺郷・管無田郷に及ぶ受益面積82haの工事が着工された。この地区には前者に彼杵川古墳群と、上杉古墳群と呼ばれる円墳が点在していたが、設計変更により保存された。後者では範囲確認調査のあと、設計変更不可能な削平部分について本調査を実施して、寺院跡とみられる遺構や中世の輸入陶器などの遺物を発掘する成果を得[註1]た。

さらに圃場整備事業は、昭和62年～63年度の工事完成を予定にＪＲ彼杵駅北側の水田103haが追加採択された。この地区は水田ということもあり、県が先に実施した遺跡周知事業の際には空白地になっていた部分である。

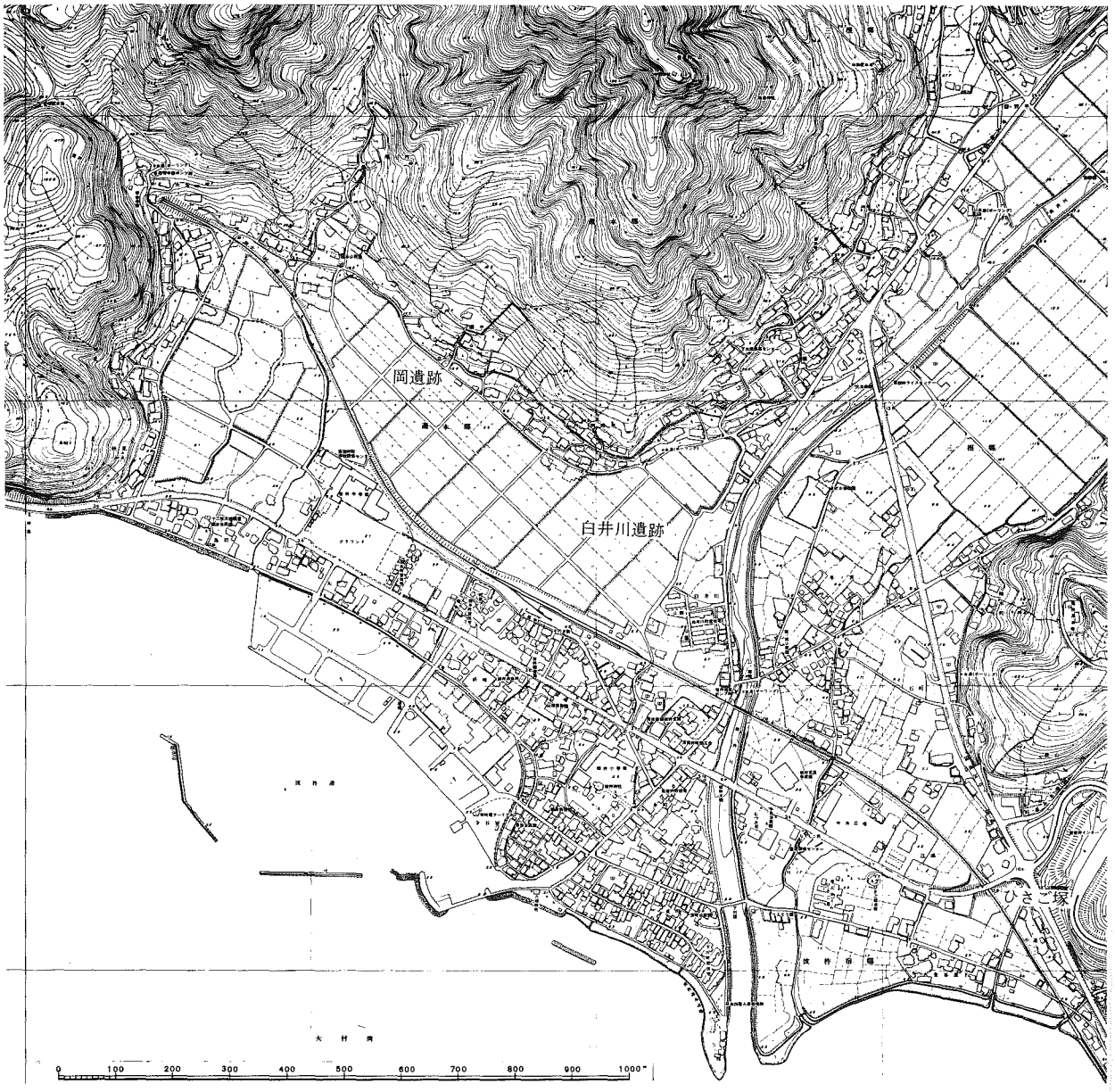
しかし地元在住の田崎一郎氏（故人）が水田石垣から発見された１個の青湿石製石塔の基礎部分が端緒となり、次々に石塔部分が発見され、中世の輸入陶磁器なども採集されたことから、試掘調査が昭和62年６月実施された。ほとんどの試掘坑から柱穴や遺物が出土したことから、農林側と地元と県文化課によって保存の協議が進められ、その結果、設計変更不可能な排水路と削平部分について昭和62年９月７日～10月１日まで本調査が実施され、中世集落遺構と遺物が数多く発見された。この調査は対象地が、約50,000㎡あり岡遺跡として登録され[註2]た。

この岡遺跡の調査が開始された頃、東側の水田地帯では表土剝ぎの作業が重機を使って行われていた。そんな中で地元の人から遺物を拾ったと届けられた中に、中世陶磁や弥生土器、須恵器、石斧などが混っていた。調査の合間をぬって現場に行ってみると、弥生から古墳時代にかけてと思われる土器片が数多く散乱していた。さらに、石棺の棺材らしいものが目につき、注意しながら観察すると、確かに箱式石棺墓が確認され、その数は８基に達した。

そこで、県耕地課と実際の担当部局である県北振興局耕地課、地元町及び町教育委員会と県文化課の間で、今後の遺跡の取扱いについての協議が持たれ、その結果、露出していた石棺８基と、51号・52号支線排路の部分500㎡について本調査を実施することで合意され、昭和62年10月５日～11月12日調査が実施された。又、昭和63年５月９・10日工事中に石棺の出土があり、箱式石棺１基と棺材の抜かれた１基について調査した。さらに51号支線排水路の設計変更が行われ、同年９月19日～９月26日にわたり調査を実施した。

尚、東彼杵町は、この機会に遺跡の全体像を把握しておきたい意向から町単独事業として、新たに51号排水路を挟んで900㎡の調査を実施し、弥生時代終末の住居址や箱式石棺墓などを検出し多くの成果を得た。この調査については、町単独事業の報告書として刊行予定である。

遺跡は九州横断自動車道俵坂トンネル工事の入口の地すべりによる排土を利用して、盛土工法により保護されている。



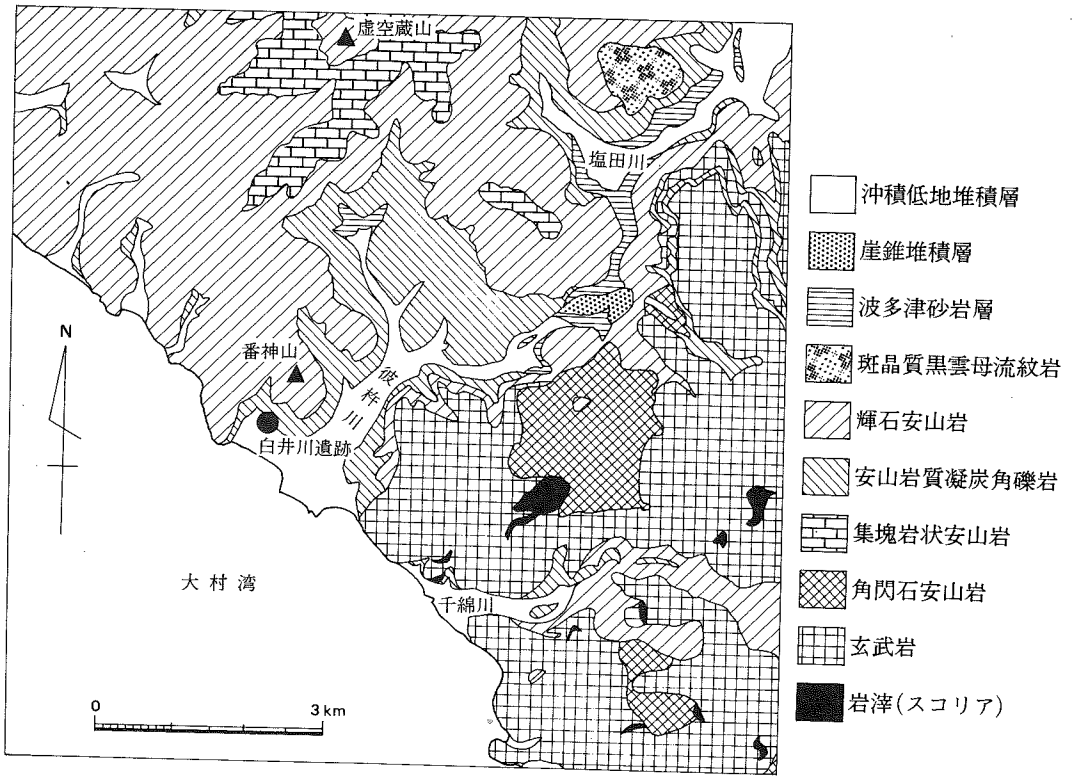
第１図　遺跡周辺の地形図

II　周辺の地理的・歴史的環境

県央東部に位置する東彼杵町は、約330km²の広さをもつ波静かな大村湾に面し、海岸線約13kmを一長辺とする略平行四辺形の町域をもち総面積は74.2km²である。町内の地形は全体に山地が多く、低平地に乏しい。後方は多良岳山系と虚空蔵山系に囲まれ、北は川棚、波佐見町、南は大村市、東を佐賀県嬉野町と境を接して、古来から海上・陸上交通の要衝としての役割を担ってきた地域である。

地形的には北東に聳える虚空蔵山（608.5m）が中起伏火山地として半経約4kmの円形の火山の座を保ち、著しく開析が進み、壮年期の山容を呈している。東南部は彼杵川を隔てて台地が発達し、大野原の高位溶岩台地や赤木の中位溶岩台地を形成し、これらを刻む谷に岩屋川内の峡谷や千綿峡谷が見られる。この台地周辺には多くの溜池が点在し、先土器時代の遺跡も周辺によく見られる。また地形を利用したお茶の栽培も盛んで、県内の茶生産高の半数以上を占め県内一のお茶どころとして知られる。

佐賀県境を分水嶺とする町内の河川は、すべて西の大村湾へ注ぎ込んでいる。中でも彼杵川は河足が6.8kmと一番長く、流域は彼杵川谷低平野と彼杵三角洲に区分され、前者は解析谷が形成され、



第2図　遺跡周辺の地質図[註3]

小規模な河岸段丘を伴い水田として利用されている。下流域には彼杵川古墳群、上杉古墳と呼ばれる円墳が、さらに平野部には前方後円墳の「ひさご塚」や岡遺跡および本遺跡が位置している。河口部はカスプ状の三角洲となり全体的に転石混りの礫・砂・泥からなる河川堆積物による埋積された沖積底地が発達し、畑地や水田の生産、および住居地としての生活の場所を提供している。

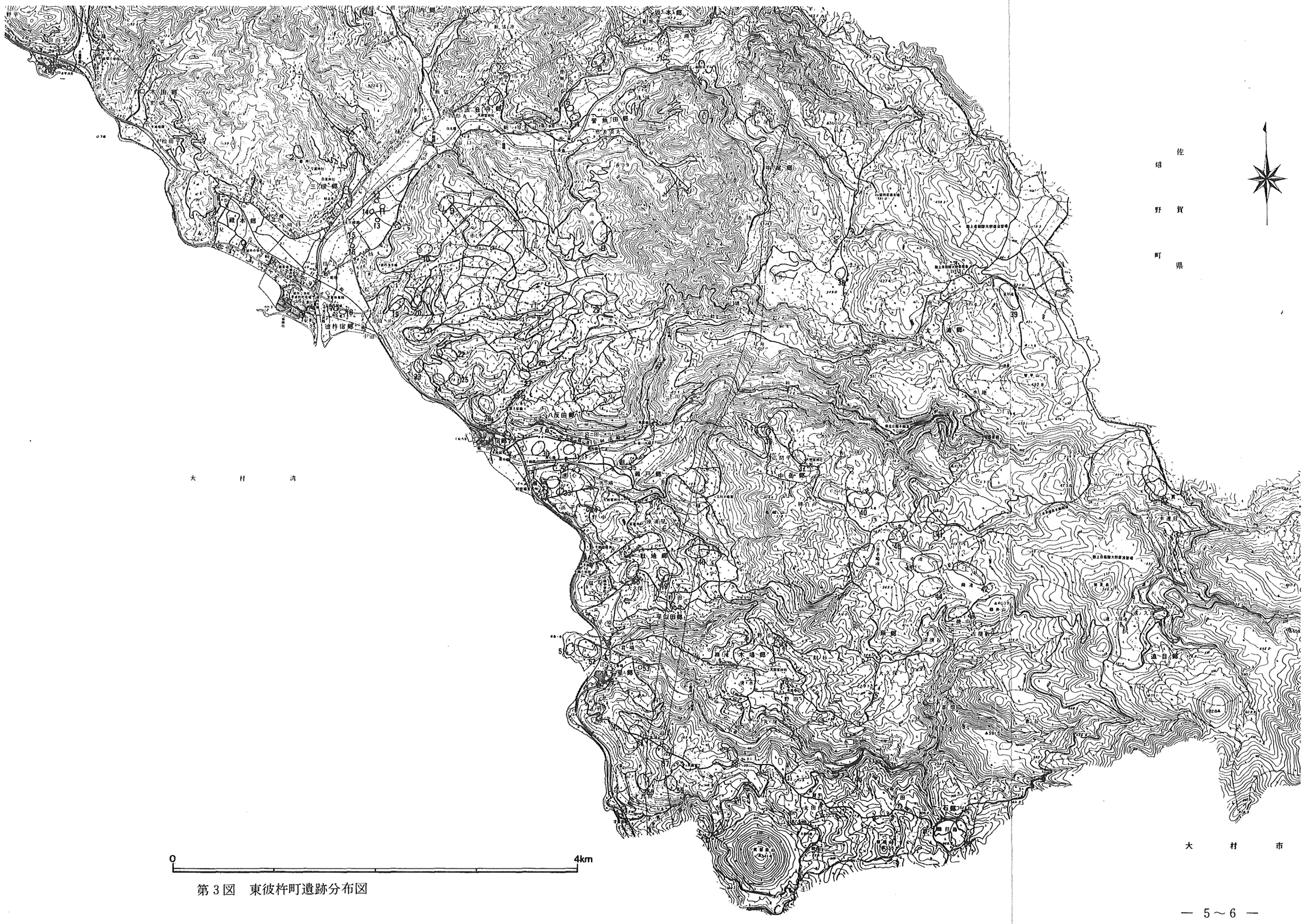
町内には現在70を越す遺跡が周知されている。特に台地状の地形では先土器時代から縄文時代の早期にかけての遺跡が多く見られる。昭和60年から62年にかけて実施された九州横断自動車道建設に係る調査では、町内で10個所の遺跡が対象[註4]となった。その中で里遺跡や松山A遺跡はナイフ形石器、台形石器、尖頭器など先土器時代の遺物が多く出土し、注目を集めた。縄文時代の遺跡は土器を伴う例が少ないが、石器を見る限り石鏃が出土し、供給基地としての性格の可能性も考えられている。縄文晩期の遺跡では、野中遺跡や宮田A遺跡[註5]で組織痕土器や扁平打製石斧の良好な資料が出土しており本遺跡のものと比較検討されなければならない。

弥生時代の遺跡は、本遺跡や宮田A遺跡から出土し、河川の下流域に営まれ大規模になっている。

古墳時代の墳墓は、先に述べた古墳群が現存するが、鉄道敷設の時、数個所の円墳が壊されたという話があり、水田が円状に残されている所もある。古墳は彼杵川流域だけに見られる。

歴史時代に入ると、中世山城や寺院の存在が中心になる。山城は4個所が知られ、この中で小薗城[註6]は九州横断自動車道建設に伴い調査されている。松岳城は先に調査された岡遺跡や本遺跡にかかわる山城でもある。中世寺院は大村藩「郷村記」に11寺が記載されている。本遺跡にかかわると思われるものに大安寺や千寿寺などがあげられるが、調査によってはっきりと確認されたものはない。ただこれらの寺院跡は、天正2年のキリシタンの打ちこわしに会い消滅してしまっている。しかし青温石製の石塔は破壊されながらも部分的に散在しており、寺院跡と思われる所に残っている場合が多い[註7]。

近世になると、彼杵は大村藩の統治下に置かれる。県境の俵坂峠を越え彼杵川沿いに下る旧長崎街道の県内最初の宿場町が彼杵であった。大村郷村記によると、本陣や脇本陣等が置かれ、賑っていたという。北へは平戸往還が分岐し、港は時津への就路があり、長崎への道も開けていた。その為、海産物や農産物の集散地として利用され、今も鯨肉を取り扱う問屋が残ることは往時の面影を伝えている。



第３図　東彼杵町遺跡分布図

表1　東彼杵町遺跡地名表

番号	名称	種別	時代	所在地	番号	名称	種別	時代	所在地
1	島田五輪塔群	石塔	中世	蔵本郷島田	38	太ノ原遺跡	散布地	先・縄	太ノ浦郷太ノ原
2	松岳城	山城	〃	三根郷	39	足形遺跡	〃	〃	遠目郷足形
3	川井川内遺跡	散布地	縄文	法音寺郷字川井川内	40	かのまる池遺跡	〃	〃	中岳郷かのまる池
4	菅無田B遺跡	〃	〃	菅無田郷菅無田	41	幸十遺跡	〃	縄文	〃 幸十山
5	菅無田A遺跡	〃	〃	〃 菅無田	42	蕪堤遺跡	〃	先・縄	蕪郷蕪堤
6	高吉遺跡	〃	先・縄	坂本郷高吉(こうき)	43	蕪郷遺跡	〃	〃	〃
7	重(かさね)の城	山城	中世	〃	44	倉谷遺跡	〃	縄文	〃 倉谷
8	平山池遺跡	散布地	縄文	菅無田郷平山	45	中池遺跡	〃	先・縄	中岳郷中池
9	牛ノ頭遺跡	散布地包含	〃	赤木牛ノ頭(うしのと)	46	四ツ池遺跡	〃	縄文	蕪郷大久保中岳郷四ツ池
10	赤木遺跡	散布地	〃	三根郷赤木	47	三井木場遺跡	〃	先・縄	中岳郷三井木場
11	彼杵川古墳群第4号墳	古墳	古墳	〃 上杉	48	八幡遺跡	〃	〃	駄地郷駄地
12	彼杵川古墳群第3号墳	〃	〃	〃 上杉	49	野田遺跡	〃	〃	〃
13	彼杵川古墳群第2号墳	〃	〃	〃 上杉	50	大久保遺跡	〃	〃	〃
14	彼杵川古墳群第1号墳	〃	〃	〃 上杉	51	串島古墳	古墳	古墳	里郷串の島
15	上杉古墳群1号	〃	〃	〃 上杉	52	串島遺跡・串島城	散布地	先・縄 中世	〃 串の島
16	上杉古墳群2号	〃	〃	〃 上杉	53	里郷積石塚	墳墓	平安	〃 平
17	ワレ権現塚古墳	〃	〃	彼杵宿郷古金谷	54	里遺跡	散布地	先・縄	〃
18	ひさご塚古墳	〃	〃	〃	55	千綿才貫田古墳群	古墳群	古墳	〃 才貫田
19	松山A遺跡	散布地	先・縄	〃 松山	56	鋒ノ久保	散布地	縄文	一ツ石郷鋒ノ久保
20	松山B遺跡	〃	〃	〃 松山	57	平見高野	〃	先・縄	〃 平野高野
21	名切E遺跡	〃	縄文	〃 名切	58	一ツ石台地遺跡	〃	縄文	〃 台地
22	名切C遺跡	〃	先・縄	〃 名切	59	太田代池遺跡	〃	〃	〃 太田代池
23	名切A遺跡	〃	〃	〃 名切	60	綿打池遺跡	〃	先・縄	〃 綿打池
24	名切B遺跡	〃	〃	〃 名切	61	久保遺跡	〃	縄文	遠目郷字下遠目久保
25	名切D遺跡	〃	〃	〃 名切	62	百貫遺跡	包蔵地	先土器	〃 大野原
26	外園遺跡	〃	縄文	千綿宿郷	63	法音寺五輪塔	石塔	中世	法音寺郷川井川内
27	平(ダイラ)A遺跡	包蔵地	先・縄	〃 県立女子農学園	64	ちょいのどう五輪塔	〃	〃	〃 川井川内
28	平B遺跡	散布地	〃	〃 県立女子農学園	65	安全寺五輪塔	〃	〃	蔵本郷大安
29	赤木池遺跡	〃	縄文	〃 赤木池	66	牛ノ頭五輪塔	〃	〃	千綿宿郷西宿
30	宮田A遺跡	〃	〃	〃 宮田	67	清心寺五輪塔	〃	〃	瀬戸郷清心
31	宮田B遺跡	〃	〃	〃 宮田	68	江の串五輪塔	〃	〃	里郷串の島
32	小薗城	城	中世	瀬戸郷小薗	69	尼寺五輪塔	〃	〃	〃 喜場
33	瀬戸古墳	古墳	古墳	〃 瀬戸	60	辻墓五輪塔	〃	〃	〃 大迫
34	野中キリシタン墓碑	墓碑	近世	〃	71	岡遺跡	包蔵地	〃	蔵本郷字岡
35	小峰城	城跡	中世	〃	72	鳥田遺跡	散布地	〃	〃 字島田
36	赤木台地遺跡	散布地	縄文	中岳郷広間平	73	白井川遺跡	包蔵地	縄・弥 古・中	〃 字白井川
37	三井木場遺跡	〃	〃	〃 三井木場					

Ⅲ 調　　査

1．調査の概要

広範囲に亘る圃場整備事業区は蔵本郷に位置するが、小字の関係で岡遺跡と白井川遺跡に分けられる。前者は標高４ｍ～14ｍの傾斜地を中心に調査を行い、中世の遺物が主体となった。

後者は、すでに表土層が剝がれ遺物と箱式石棺墓が点々と見られた。そのため、遺跡の範囲を正確に把握する必要から、事前に30cm四方の土層観察坑を約25ｍ間隔で設定した。幸い遺物包含層は黒色の土層で見分けるのは容易であった。

遺物包含層はほぼ全域に認められたため、遺跡の保存について協議が行われたが、地形が微高地だったこともあり、盛土による保存で合意が得られた。この盛土は膨大な量にのぼったが、折しも九州横断自動車道のトンネル入口において、地滑りが発生し、この排土が利用されたものである。

しかし、排水路部分については設計変更が不可避なため調査を実施することとなった。51号支線排水路は標高７ｍ前後の上流域と標高５ｍ前後の下流域である。上流域の方は51水－01～05区までを設定し、下流域は石棺墓などの遺構もあり東西120ｍ南北120ｍの範囲で10ｍのグリッドを組み、東から西へＡ－１・２・３…～Ｌ－１・２・３…の記号を付した。しかし、後に実施する町単独事業と区別するために排水路部分に限って51水－１～８区の記号で取りあげた。

この調査区では、縄文晩期から弥生終末および古墳時代にかけての遺物が得られた。

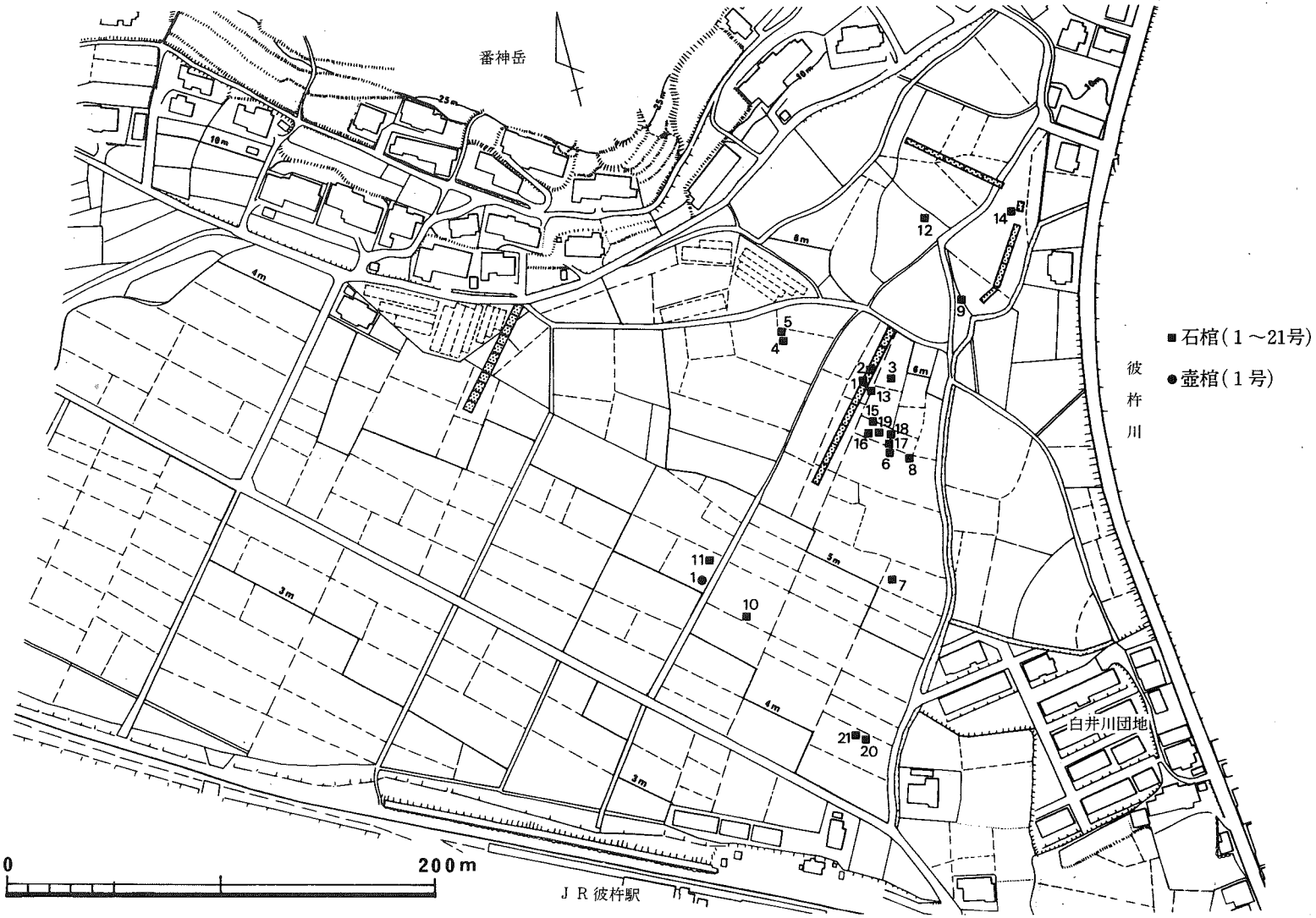
51号支線排水路から西へ160ｍのところに52号支線排水路が位置する。この排水路は、すでに仮排水路として１ｍ余り削平され、中世陶磁器などが散乱していた地区である。約40ｍの長さを調査し、中世の遺物が多量に出土した。この51・52号支線排水路の調査面積は500㎡であった。

昭和62年度の圃場整備事業にかかる遺跡の調査は終了し、工事は着工され、設計変更または工事中に遺構等が出土した場合は別途協議を行うことを確認した。

しかし、その後昭和63年５月工事中に石棺出土の報がもたらされた。出土地点は町営白井川住宅のすぐ西側で標高約4.5ｍの地点である。側板や石蓋はすでに抜きとられ土坑状になったものと、蓋石だけ抜き去られた石棺２基分である。

さらに同年９月には町有地取得に伴う、51号支線排水路の設計変更が提出された。この部分は、標高7.5ｍの圃場整備事業区の最奥部で、幅1.2ｍ、長さ60ｍの面積72㎡である。この区域は東西にトレンチを設定し10ｍに区切り東から51水－Ａ～Ｆ区までの記号を付した。ここでは大きな礫を配したと思われる遺構や、土器溜りの様相が観察された。

出土した箱式石棺については、町内発見の青温石石塔とともに町教育委員会の敷地内に移転復原している。



第4図　グリッドおよび遺構配置図(石棺・壺棺) 1／300

2．土　層（第5図・第6図）

調査区は大きく5地区に分けられるが、石棺の調査区については土層の記録はない。他の4地区についてはすべて表土層が剝ぎとられている。従ってここでは表土層以下の観察となる。

51号支線排水路B～F区

51－B区では、客土が表面に乗るがこれは新しいものである。その下は2層で黄褐色の埋め盤、水田造成時の基盤層である。3層は灰褐色粘砂層、小礫が混るが、下部になると拳大以上の礫も混るようになる。この区では中世頃と思われる配石が確認されている。東側では遺物は小破片が若干混る程度であるが、西側では攪乱層の下に4層の砂礫層が堆積する。4層からは弥生・古墳・中世の遺物が混在して出土、彼杵川の氾濫の影響を受けている。C区も基本的には砂利層が続き変わらないが、西側で砂利層を切り込んで6層の黒褐色粘質土層が見られる。この6層はD区まで6.3mの幅で落ち込んでおり、中には弥生終末の土器片が多量に出土して、土器溜りの様相を呈している。E・F区では砂礫層は見られず、5層の斑黒色粘質土層が厚く堆積する。この層はやや砂質混りのさらりとしたもので、中世の遺物をわずかに含む。7層は純礫層で遺物は含まれず最下の層である。

ここではB区の中程からC区にかけて旧河道あるいは、氾濫の影響を受けた痕跡が見られた。

51号支線排水路01～05区

この地区は南北にやや蛇行しながら設定した。すぐ東には現在使用されている水路が走る。表土面は削られているが標高7.2mを計る。

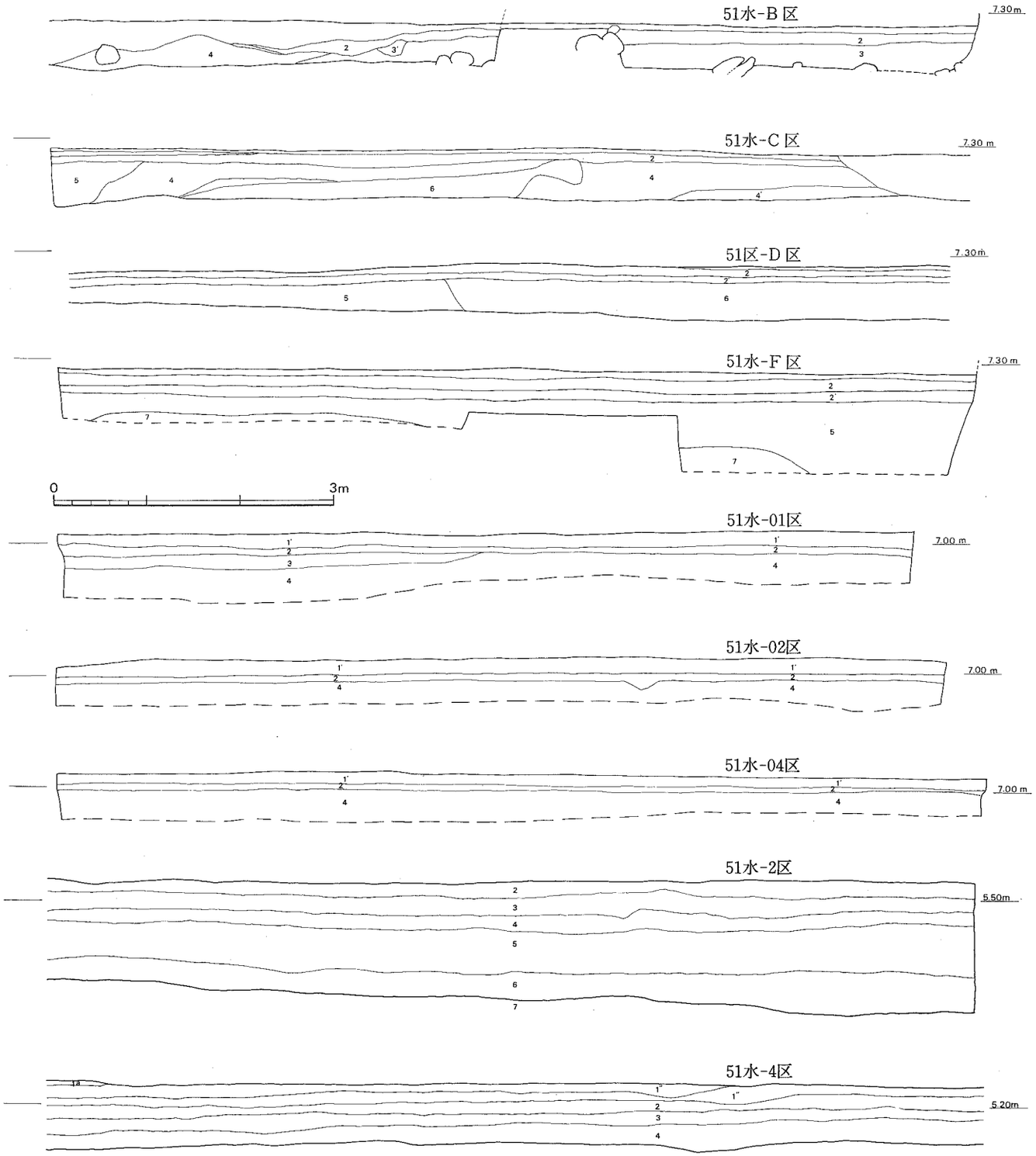
1'層は褐色土で本来表土層の下に埋められたものと思われ堅くしまる。2層は黄色の強い褐色の埋め盤でよくしまり堅い。3cm大ぐらいの礫が下に沈んでいる。3層は2層に近似しているが、褐色味が強く埋め土で、部分的に入る。4層は褐色砂礫土である。拳大から人頭大の礫がびっしりとつまりこの中に弥生～古墳時代にかけての土器が数多く見られる。

土器の表面はローリングされているものやそうでないもの様々であるが河川の氾濫の影響を受けている。

51号支線排水路1～8区

遺跡全体の中で最も土層の安定した地区である。標高は、1区の旧表土面が5.9m、さらに50m南に下った6区の旧表土面が5.6mの高さを示す。

2層は灰白色の砂質の層に黄色の粘質土が斑状に混る。弥生末～古墳時代の遺物が混る。水田の基盤層になる。3層は黄灰褐色の粘質土に小礫が混る。弥生時代の包含層。4層は暗褐色粘砂質土できめの細かい砂質土が混り、ややしまる。縄文時代晩期の包含層で、他の遺物は認められない。5層は暗褐色粘質土で約40cmの厚さ。上10cm程ぐらいまでは縄文晩期の遺物が出土する。また7区5層下部では渦巻文と沈線の組合せによる鐘崎式土器がひとかたまりに出土し



51水B ～D 区土層
表土層は剝がれ、2層から残る
2 黄褐色埋め盤
3 灰褐色粘砂土層
3′ 灰黒色土層(ブロックで入る)
4 砂礫層
5 斑黒色粘質土層
6 黒褐色粘質土層
7 礫層

51水01～05区土層
表土層は剝がれている
1′ 耕作土層
2 黄褐色埋め盤
3 褐色粘質土層
4 褐色砂礫土

51水 1 ～ 5 区土層
表土層は剝がれている
2 灰褐色粘質土層
3 黄灰褐色粘質土層
4 暗褐色粘質土層
5 暗褐色粘砂質土層
6 褐色粘質土層
7 礫層

第 5 図　51号支線排水路調査区土層実測図(1／60)

ている。6層は褐色粘質土で土質は4層とほぼ同じ無遺物層である。7層は最下層で人頭大の礫がつまる無遺物層である。8区から下方の標高4m付近では礫ばかりになる。3～4層は全域に認められ、安定した層である。

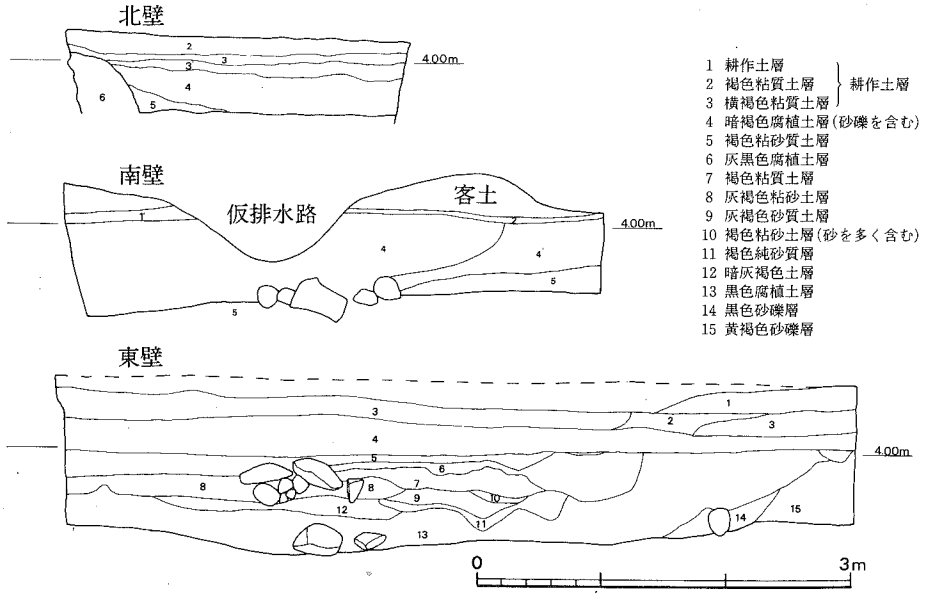
52号支線排水路11区

この区域は、すでに仮排水路として掘削されている部分である。1～11区を設定したが、良好な層位が得られたのは11区である。この区は泥炭質の層が主体になり、中世の輪入陶磁器や国内産の焼物が集中して出土し、層位は複雑である。ここでも表土層はすでに剝ぎ取られている。

北壁の1層は、褐色粘質土で表土層に続く床土である。2層はやや砂質がかった灰褐色粘土層で近世陶磁器などを含み、堅くしまり水田の基盤となる層である。3層は黄灰褐色砂質土で、さらりとした砂質の多い層である。4層は暗褐色腐植土層、植物質や木の実などの有機質を多く含み、遺物は中世が主体である。5層は暗褐色砂礫土層で砂利混りの層である。6層は北西から傾斜した地山層が現われている。5層も一連のもので礫が多く混る。

北壁はほぼ整層状態が観察されるが、東壁になると5層の褐色粘質土層以下13層までは腐植土層や粘質土層、砂質土層の堆積が不整合に繰り返され、14・15層は北壁の5・6層と同一である。

なお中世の遺物が特に集中するのは5層以下と、15層の地山層である黄褐色砂礫層は西から東への傾斜が認められ、排水路以東の区域に泥炭質の層は続いている。



第6図　52号支線排水路11区土層実測図

Ⅳ. 出土遺構・遺物

出土遺物は、縄文時代から中世に至るまで相当数に達している。縄文時代の遺物は、52号支線排水路の下流域で縄文中期、阿高式系の土器が数点表面採集されている。また晩期の遺物は土器・石器とも全域で採集された。特に石器は扁平打製石斧の出土と黒曜石剝片の出土が多くを占めた。全域から出土し圧到的に量の多いのが弥生終末にかかる土器である。小破片がほとんどを占め完形をとどめるものはない。弥生土器の上限は、亀の甲タイプの小破片が数点得られており、この時期に求められる。また、丹塗り土器片が数点あり中期ではないかと思われる。いずれにしても、前期から中期にかけての出土量は極端に少ない。古墳時代の遺物は土師器、須恵器の出土がある。主に51号排水路01～05区の河川の氾濫の影響を受けている部分からの出土が目立つ。中世の遺物も全域から表面採集の形で得られたものが多く、うすく広く分布している。しかし、52号排水路の地区では、国内産の土器とともに中国輸入陶磁器、石鍋などが濃密に出土している。この地区は泥炭層が残り、下駄や鋤先状木器、杭状木製品などが出土した。

以下年代順に遺物を概観する。

1．51号支線排水路出土縄文時代の遺物

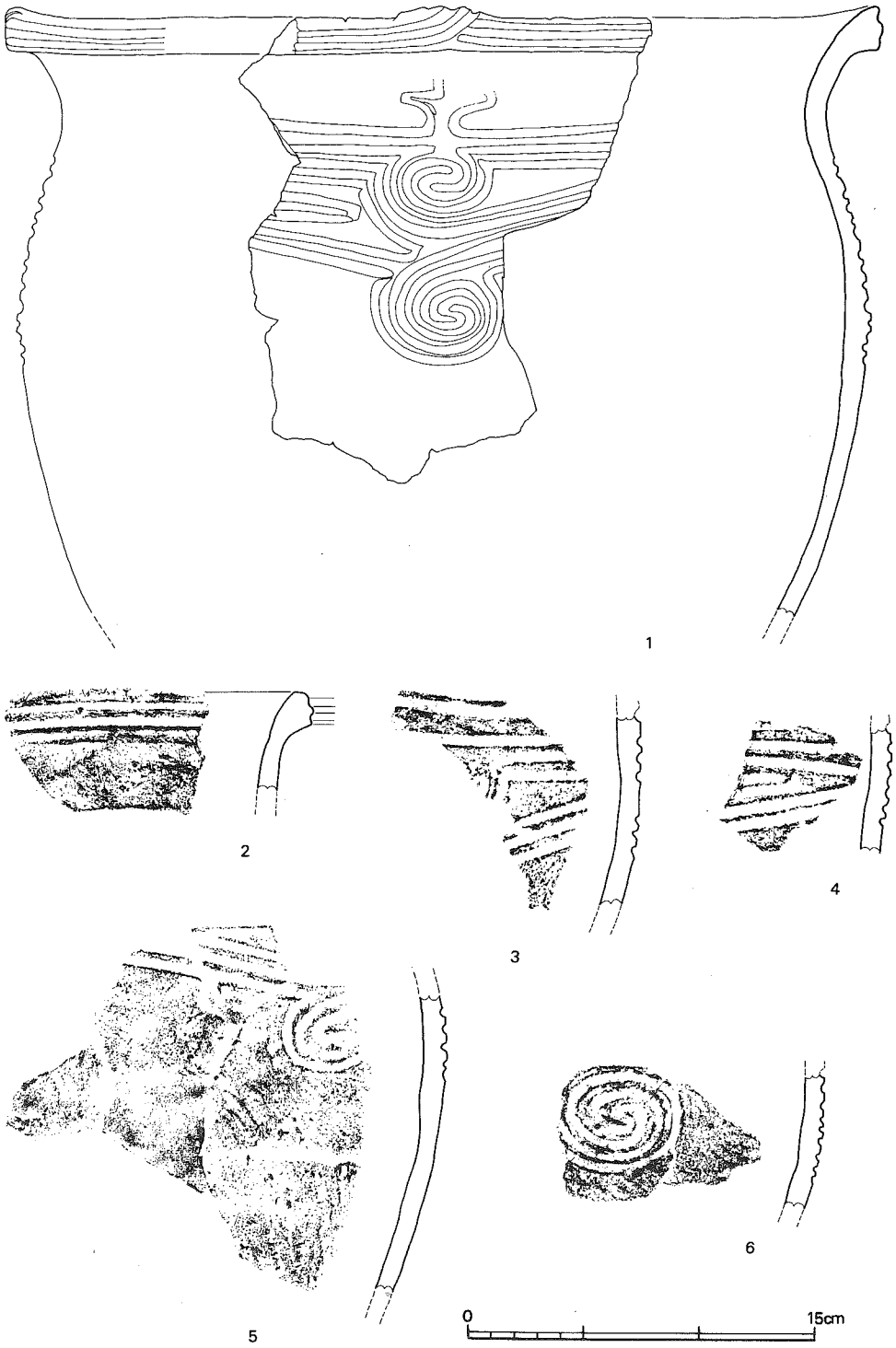
(1)縄文後期の土器（第７図１～６）

51水－７区５層からひとかたまりになって出土した。いずれも同一個体であるが、底部はない。形状はゆるい波状口縁をもつ鐘崎系統の土器である。口縁には２本の沈線が巡り、突起部で曲り、入り組み文を呈する。頸部はしまり、胴部はゆるくふくらみ、胴長である。文様帯は胴部上半に集中する。幅４㎜弱の施文具を使った沈線文で、突起部の下に縦に短い曲線文が２本あり、さらにこれを起点として主要文である入り組渦巻文が２段に配せられている。入り組渦巻文は口縁突起部には２段、低くなった部分に１つを組み合わせると考えられる。口径はややいびつで正確さに欠けるが、38㎝前後ではないかと推定される。胎土には石英や長石、角閃石の粒子を多く含み焼成は良い。内面は暗褐色、外面は茶褐色、一部暗褐色を呈している。磨消縄文の手法は用いられていない。時期については後期中葉頃と考えられる。渦巻文を２段に配する近似資料は福江市白浜貝塚[註8]、諫早市有喜貝塚[註9]出土の土器があげられる。

(2)縄文晩期の土器（第８図）

浅鉢　（７～11）

７～**11**は胎土が精製され研磨を受けた浅鉢である。**７**は口縁部が短く外反し、内面には段を有する。頸部はわずかに外に開き、それ以下は失われているが、おそらく胴部の接点で「く」状にくびれると思われる。胎土は良好で焼成やや甘い。**８**は頸部が短く屈曲し、口縁部は外に折れ玉縁状になる。胴部はわずかにふくらみをもち傾斜するが、あまり大形の浅鉢ではない。



第７図　縄文後期の土器実測図(1／3)

胎土はやや粗く焼成は甘い。9は大きく開く口縁部で、口唇部と口縁内面に1条の浅い沈線が巡る。よく研磨され、胎土焼成とも良好。10は屈曲する肩から胴部にかけて残るが、わずかに外反する口縁部が付くと考えられる。胎土は良好だが焼成がやや甘い。11は外反する口縁の端部を欠くが、胴部では屈曲し段をもつ。断面は褐色で内外面とも黒い黒色磨研の浅鉢である。

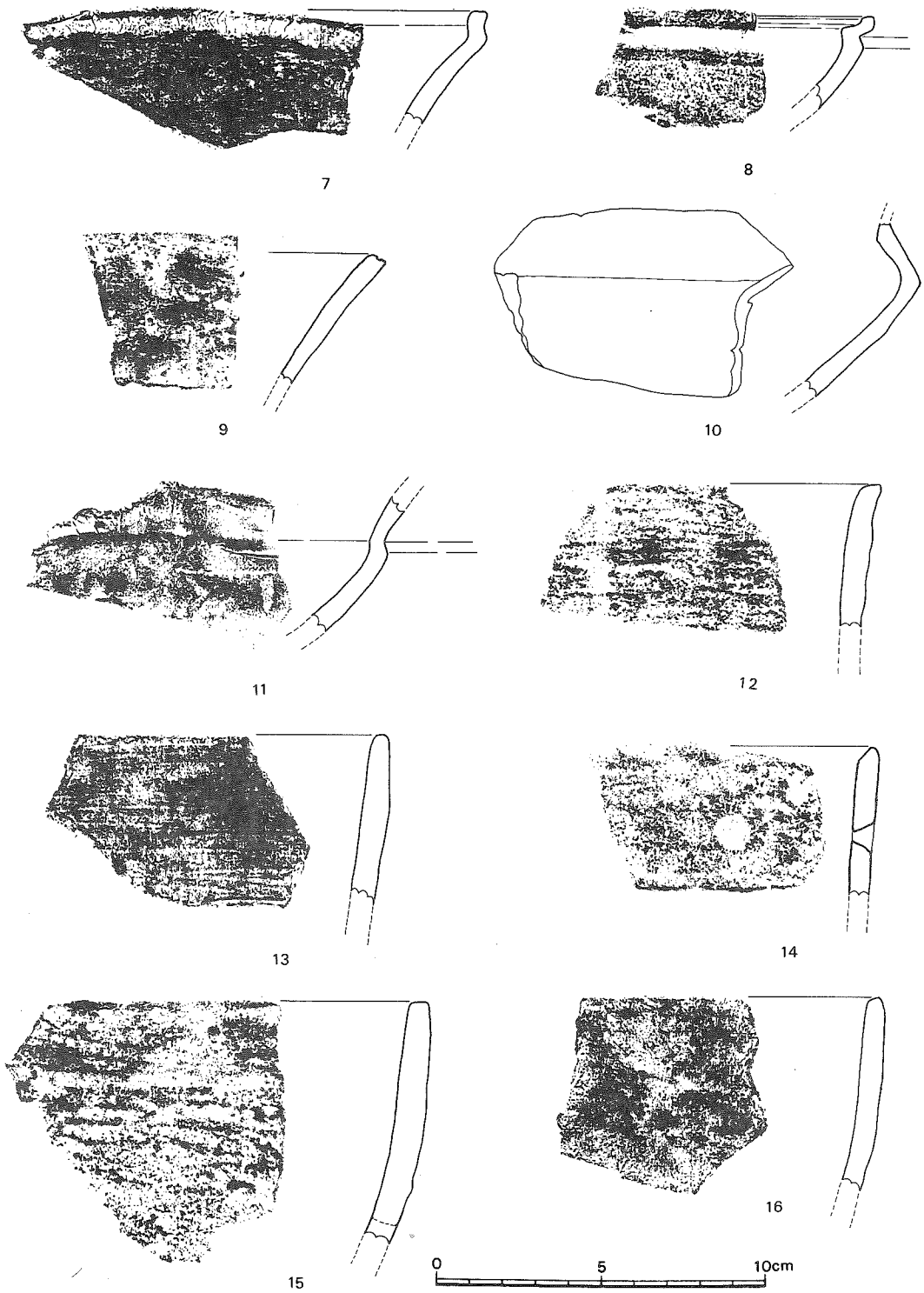
深鉢　(12～19)

12は口唇部は平坦でやや内行し、反り気味に直行している。内外面には貝殻条痕が施されているが磨耗のため不鮮明である。胎土には角閃石や片岩粉が混る。焼成は良行で暗褐色を呈する。13はわずかに内湾する口縁で端部は平坦な部分と丸くおさめられた部分がある。内面はヨコナデが行われ、外面は浅く細い数条の沈線が乱れながら施されている。胎土には白い砂粒や角閃石を含みしまっている。色調は内外とも黄褐色を呈する。14は口縁部内面が削られ端部が尖る。器形は頸部がしまり外反するものと思われ、口縁直下に外から穿孔が1個付けられている。破断面まで2.5cmあり補修孔か不明。胎土、焼成とも良好で色調は褐色。15は口唇部は平坦にナデられ、胴部にかけて内湾している。内面はヨコナデ外面は口縁下部2.5cmまではヨコナデが行われ、下半は板状工具による粗いナデが行われている。下部の破断面には穿孔が1個残される。胎土は良好だが焼成甘く、内面は黒色、外面は口縁が暗褐色、下半は黄褐色を呈する。16は器壁薄い口縁部破片で胎土には角閃石や白い砂粒を多く含み、焼成良好で黒色に近い褐色を呈する。器面は粗い板目調整である。17、18は胴部破片で胎土、焼成は良好。19は浅い沈線状のものが縦に入る。胎土には片岩を粉状にしたものが混る。滑石混入の土器とは明らかに区別されるが、晩期の土器より古い可能性もある。

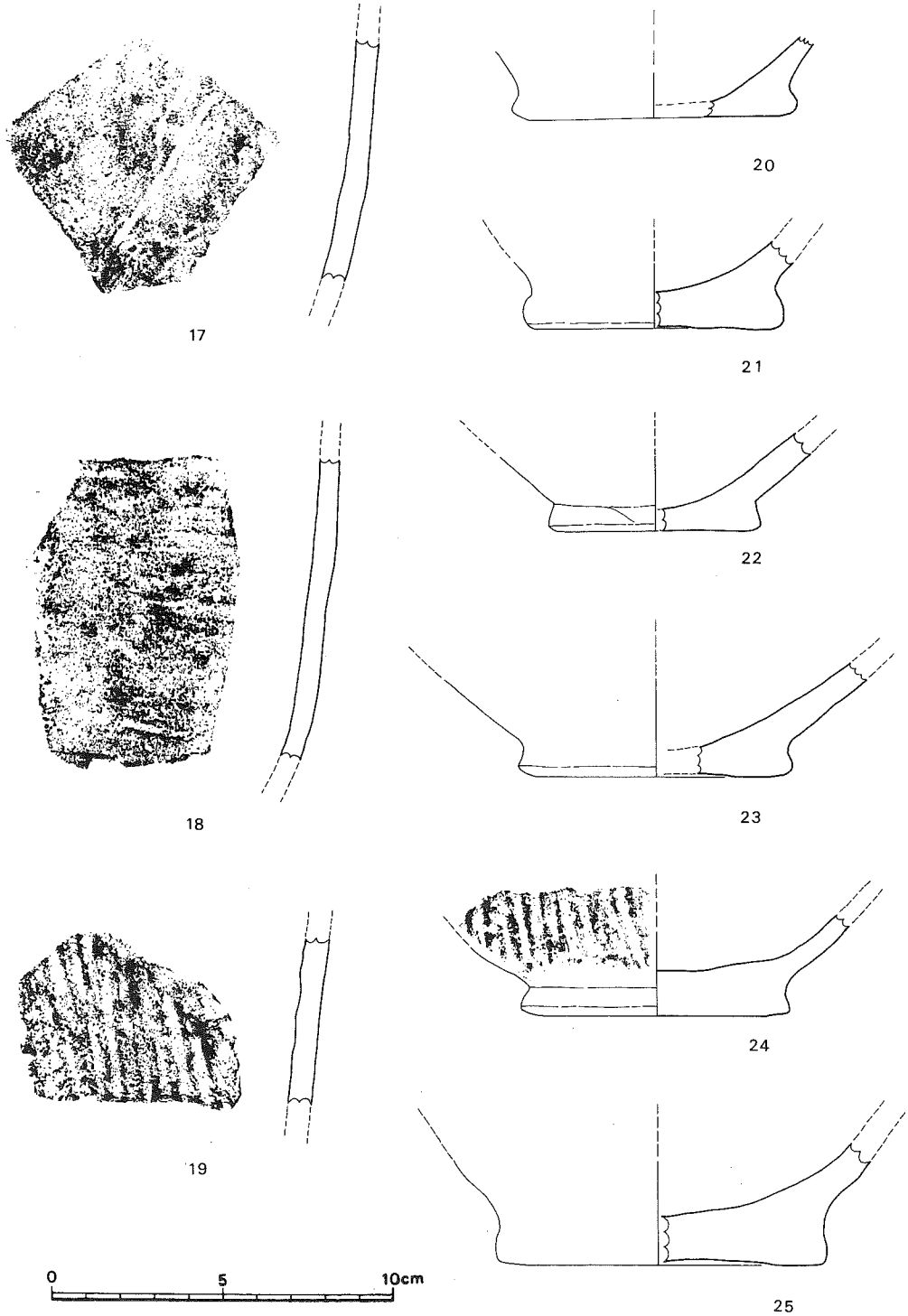
底部　(20～25)

すべて粗製の深鉢底部である。ただ22は高台部はやや外に開きヘラ整形が行われ、円盤状である。立ち上がり部から胴部は張り出しており、壺になる可能性もある。外面は赤褐色、内面は黒色、胎土、焼成とも良好。24は22に比べひと回り大きいが、胴部の張り出しと底部は類似しており壺の可能性もある。24は底部外面が平坦で高台部は短く、外につまみ出され立ち上がっている。外面は幅広の粗い条痕が施されている。内面には底まで外面と同じ条痕が付く。底径7.8cm、胎土、焼成とも良好である。25はわずかに上げ底になり内面は粗い条痕が施され、底径9.5cm。

大村湾沿岸における晩期土器の出土状況は、九州横断自動車道建設に伴う調査で類例を増している。宮田A遺跡や、野中遺跡がそうである。これらの遺跡との比較検討は、後の町単独事業の調査で晩期遺物の出土量が多く得られたこともあり、後日にゆずることにする。



第８図　縄文晩期土器実測図(1)(1／2)



第９図　縄文晩期土器実測図(2)(1／2)

石　器　（第10～16図）

表土から第５層にかけて多くの石器が出土した。土器も含めて最も多く出土したのは第４層で縄文時代後期から晩期にかけての層位と考えられる。出土石器中、石鏃３点、使用痕ある剥片12点、剥片29点、石核２点、石斧36点の計82点を選び図化記載した。石鏃や剥片、石核はすべて黒曜石製で石斧は34点が安山岩製である。また、各石器については、出土区、出土層位、大きさ、重量など一点ずつ計測し表を作成した。

石　鏃　（第10図　1・2・3）

1は灰青色の黒曜石製でパティナが全体に認められる。側縁は緩く外反し、二等辺三角形状を呈する。**2**は表裏に主要剥離面を大きく残し、表面には自然面も残る。灰黒色の黒曜石製で横長剥片を使用している。**3**は**1**と同じ黒曜石製で、全体に二次加工が粗雑である。

使用痕ある剥片　（第10図　4～15）

4～7は非常に使用頻度の高かったと考えられるもので、二側縁の表裏に著しい刃こぼれ状の痕跡が観察できる。**8～15**は片方の側縁が刃部として使用されている。**8・9・10**は表面の刃部と反対側縁（背部）の表面に大きく自然面を残す。**11**は石核時点の打面調整の状況を大きく残す剥片で、比較的に厚い。剥片下方の表面に自然面を残し、その部分の鋭角なエッジを使用している。**12・13**は若干の自然面を表面に残す。**14・15**は自然面は全くない。

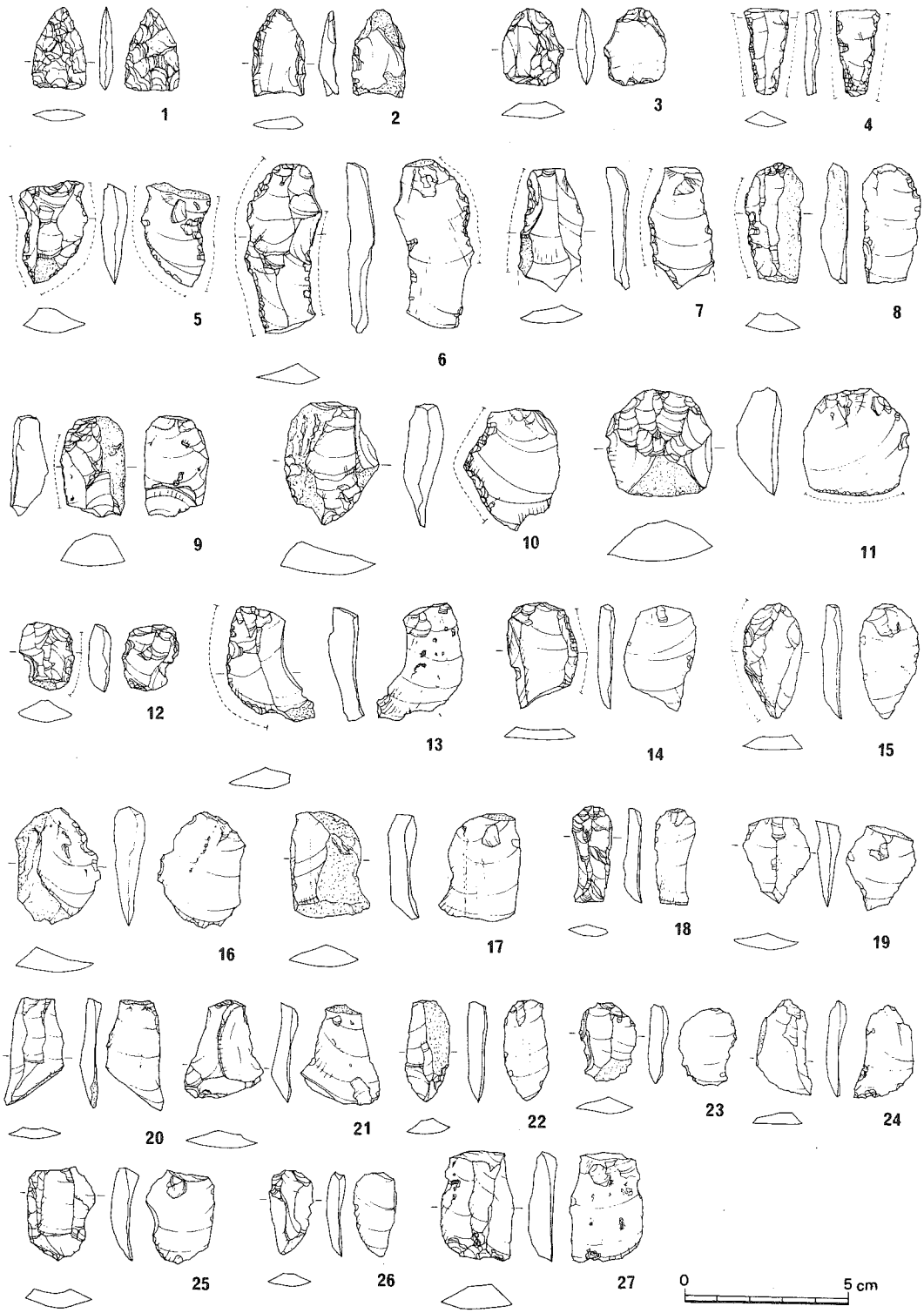
剥　片　（第10・11図　16～44）

剥片剥離時の打面部の状態において、自然打面**16～21・44**、平坦打面**22～32**、調整打面**33～40**とした。また、**41～43**は切断もしくは折れたものである。**39・40**は表面に大きく打面調整の痕跡が残る。**43**は上部は大きく折れて判然としないが、下方は表面に下から上に著しい潰れや剥落が認められ、楔形石器（ピエス・エスキーユ）の可能性が大である。**44**は漆黒色の黒曜石製の大形のもので44.4ｇを計る。

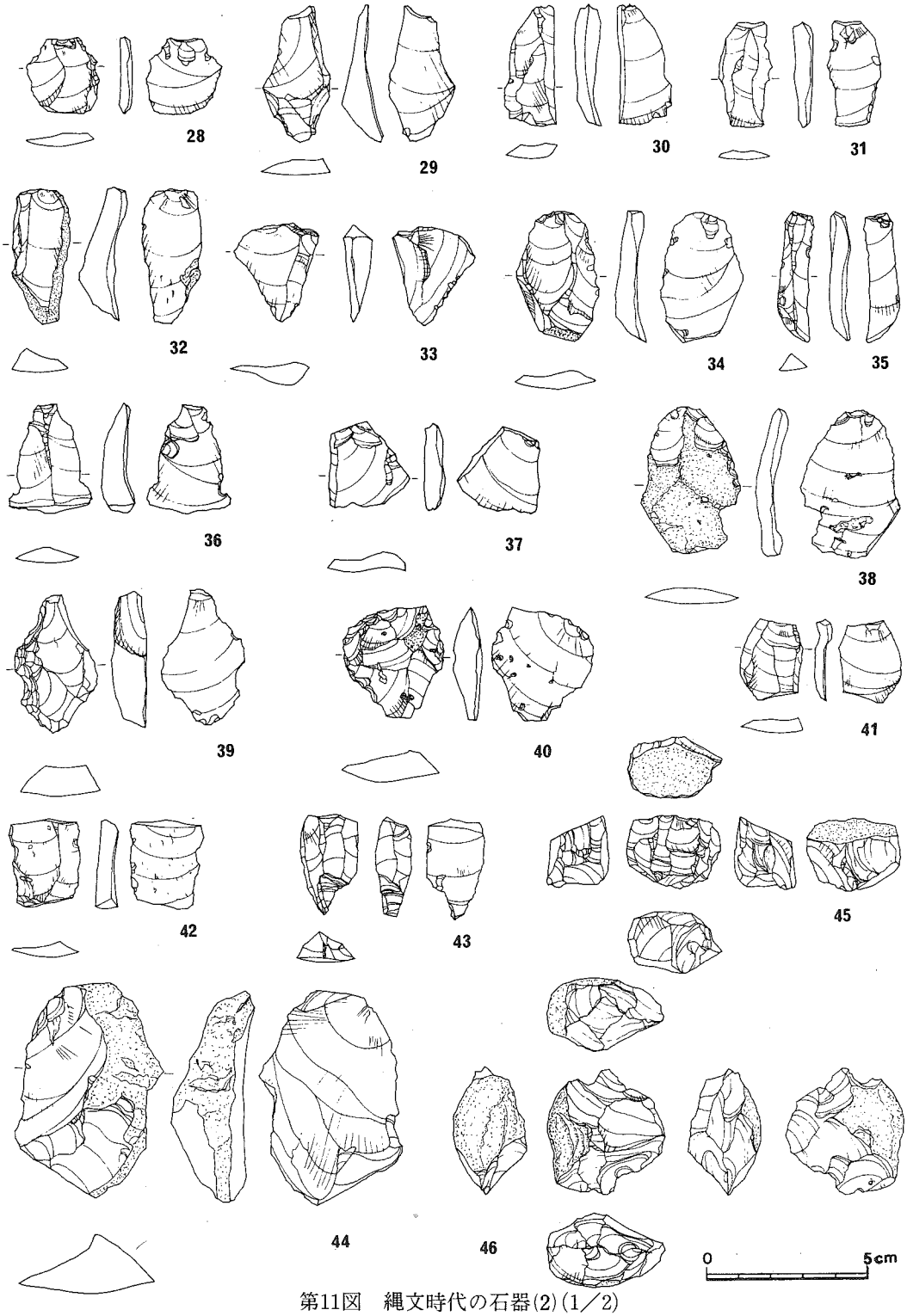
石　核　（第11図　45・46）

他にも数点の残核があるが、２点を図化記載した。**45**は小形の原石で、上部自然面より剥片剥離を行っている。**46**は表裏に多方向より剥片剥離を行ない、亀甲状に近い形態をなす。

本遺跡出土の黒曜石製石器（剥片石器類）を一見すると、４～５種類の黒曜石が使用されており、全体的に漆黒の黒曜石への依存率がかなり高い。しかし、漆黒で色調は酷似するものの中に乳白色の不純物が著しく混入するものと、全く混入しないものとがある。不純物の混入がないものは、滑らかで質がよく腰岳産（佐賀県伊万里市）と推定される。一方、使用頻度が高く不純物の混入するものは、剥片などにも顕著に認められるようにリングやフィッシャーに乱れを生じさせザラついた感じのところも見られる。この黒曜石については原産地など現段階では判然としていない。灰青色の黒曜石は針尾島産（長崎県佐世保市）と考えられ、灰白色のもの



第10図　縄文時代の石器(1)(1／2)



第11図　縄文時代の石器(2)(1／2)

（単位cm・g）

番号	出土区	層	石　質	器　種	長	幅	厚	重量	備　考
1	51－1	4	灰青色ob	石　鏃	2.5	1.6	0.5	1.4	基部の抉りなし
2	51－1	4	灰白色ob	〃	2.6	1.6	0.5	1.8	若干、基部に抉り
3	51－7	5	灰青色ob	〃	2.3	1.9	0.5	1.7	全体に粗雑な加工
4	51－4	4	漆黒A ob	使用痕ある剝片	2.6	1.3	0.5	1.3	上部は折れか切断
5	51－6	5	〃	〃	3.0	2.7	0.8	4.1	自然打面
6	51－4	4	漆黒B ob	〃	5.1	2.2	0.8	6.5	自然打面、縦長剝片
7	51－7	1	〃	〃	3.8	1.9	0.6	3.8	平坦打面、下部欠
8	51－5	4	〃	〃	3.6	1.8	0.7	4.3	調整打面、背自然面
9	51－5	4	〃	〃	3.1	1.9	1.1	6.2	自然打面、背自然面
10	51－1	4	漆黒A ob	〃	3.7	2.8	1.1	7.4	平坦打面、背自然面
11	51－5	4	〃	〃	3.2	3.2	1.3	12.3	調整剝片、やや厚い
12	51－7	2	〃	〃	2.0	1.6	0.6	2.2	部分的に加工痕あり
13	51－6	4	漆黒B ob	〃	3.2	2.2	0.9	4.2	自然打面
14	51－3	4	漆黒A ob	〃	2.8	2.1	0.5	2.4	平坦打面、下部欠損
15	51－4	3	〃	〃	3.5	1.8	0.6	2.0	自然打面
16	51－2	4	〃	剝　片	3.5	2.5	0.9	4.8	自然打面
17	51－2	1	〃	〃	3.2	2.3	0.9	4.9	自然打面
18	51－6	4	〃	〃	2.9	1.2	0.5	1.1	自然打面、小形縦長
19	51－4	3	〃	〃	2.6	2.0	0.6	2.0	自然打面パテナ多少
20	51－4	4	〃	〃	3.1	1.6	0.5	1.5	自然打面、薄い縦長
21	51－5	5	漆黒B ob	〃	3.0	2.3	0.6	3.1	自然打面
22	51－4	2	〃	〃	3.1	1.3	0.6	1.9	自然打面、小形縦長
23	51－5	4	漆黒A ob	〃	2.4	1.7	0.6	1.6	平坦打面、やや小形
24	51－1	4	〃	〃	2.8	1.5	0.5	1.7	平坦打面
25	51－7	5	〃	〃	2.7	2.0	0.6	1.8	平坦打面、自然面無
26	51－7	1	〃	〃	2.6	1.8	0.5	1.1	平坦打面、自然面無
27	51－2	1	漆黒B ob	〃	3.3	2.2	0.7	5.1	平坦打面、自然面無
28	51－7	3	漆黒A ob	〃	2.3	2.2	0.3	1.6	平坦打面、自然面無
29	51－7	1	〃	〃	4.1	2.0	1.0	3.3	平坦打面、縦長剝片
30	51－4	4	漆黒B ob	〃	3.8	1.5	0.8	3.3	平坦打面、縦長剝片
31	51－4	4	〃	〃	3.2	1.6	0.6	1.8	平坦打面、縦長剝片
32	51－2	4	〃	〃	4.2	1.8	1.1	5.4	平坦打面、縦長剝片
33	51－2	4	漆黒A ob	〃	3.0	2.5	0.9	3.1	調整打面、自然面無
34	51－4	4	漆黒B ob	〃	3.9	2.4	0.7	5.1	調整打面
35	51－5	3	漆黒A ob	〃	3.9	0.9	0.6	1.7	調整打面、細い縦長
36	51－4	3	〃	〃	3.4	2.6	0.8	3.4	調整打面、自然面無
37	51－2	4	〃	〃	2.6	2.5	0.7	2.8	調整打面、幅広剝片
38	51－5	4	漆黒B ob	〃	4.5	3.0	0.6	6.4	調整打面、自然面大
39	51－2	4	灰黒色ob	〃	4.3	2.5	1.1	9.6	調整剝片、上部折れ
40	51－2	4	漆黒B ob	〃	3.4	3.1	0.9	7.5	調整剝片
41	51－4	2	漆黒A ob	〃	2.5	1.9	0.4	1.6	平坦打面、下部折れ
42	51－1	4	漆黒B ob	〃	2.6	2.2	0.6	3.1	上下部折れ欠損
43	51－5	2	〃	〃	3.0	1.8	1.1	4.6	楔形石器の可能性大
44	51－4	4	漆黒A ob	〃	6.6	4.3	2.2	44.4	自然打面、大形剝片
45	51－2	4	〃	石　核	2.2	2.9	1.9	12.5	上部自然面から剝離
46	51－6	1	灰白色ob	〃	3.8	3.6	2.2	23.5	表裏に剝離し亀甲状

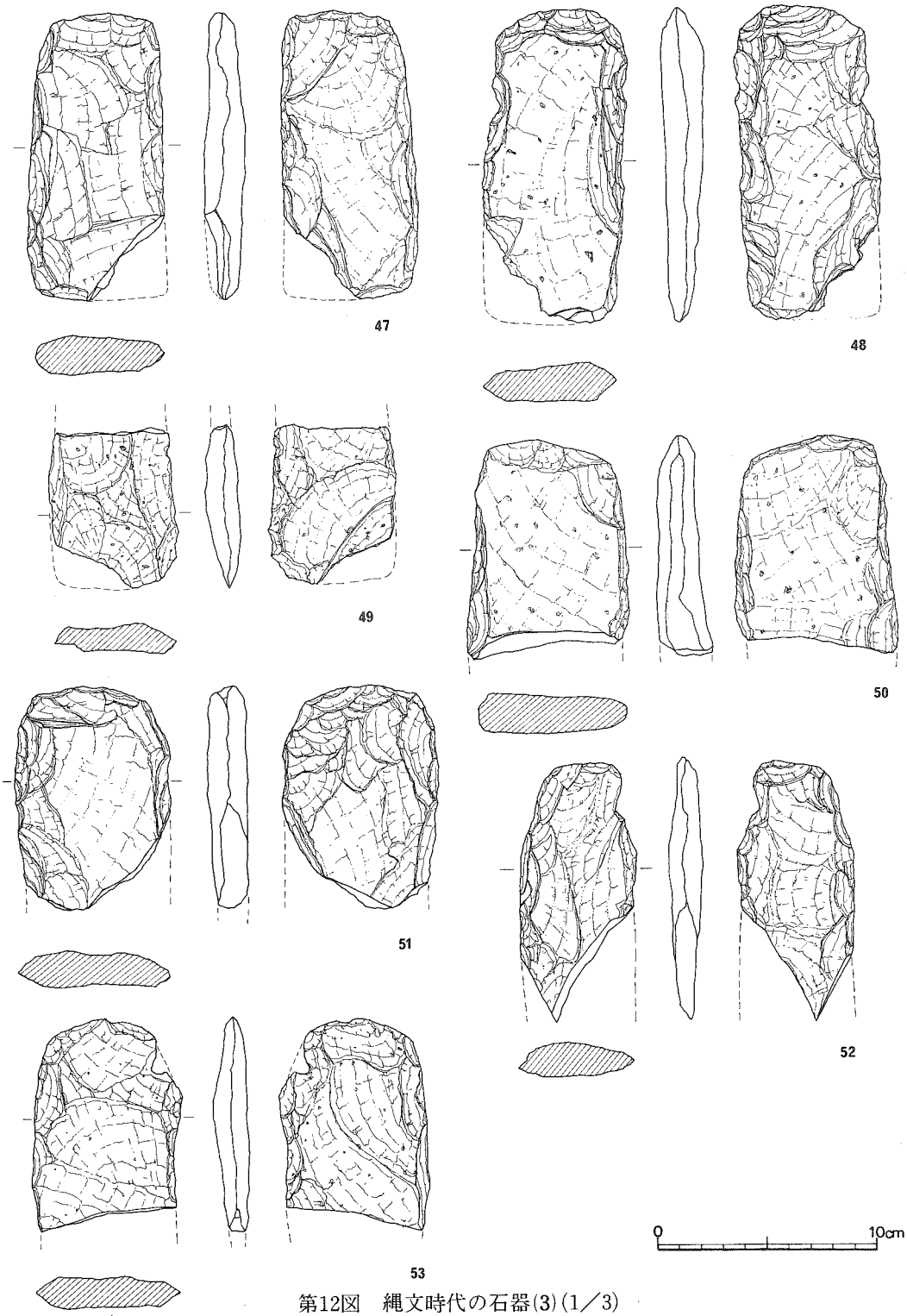
第２表　石器計測表〔漆黒A＝不純物混入なし、漆黒B＝不純物混入〕

は松尾川産（佐賀県嬉野町）と推定されるが未確認である。また、多少なりとも自然面を有したものが多く認められることから、黒曜石原石自体が全体に小形であったことが察せられる。なお不純物の混入の見られる漆黒の黒曜石においては手のひら大、745ｇを計る原石が１点出土している。

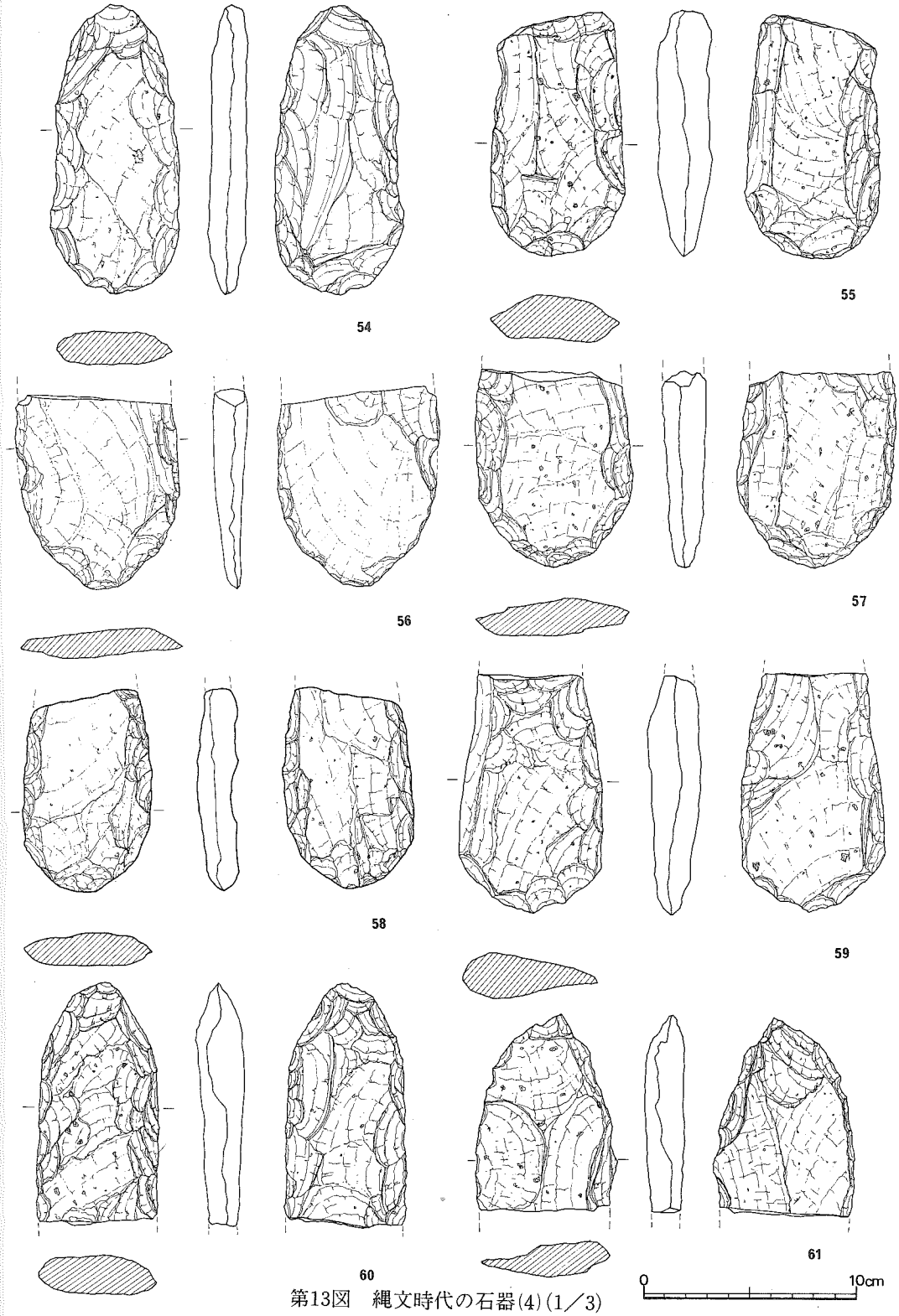
扁平打製石斧　（第12図～第16図47～82）

36点の石斧を図化記載した。その殆どは縄文時代晩期に属する、扁平打製石斧と考えられるもので、形態から短冊形・長楕円形・撥形・大形長方形とに分けた。

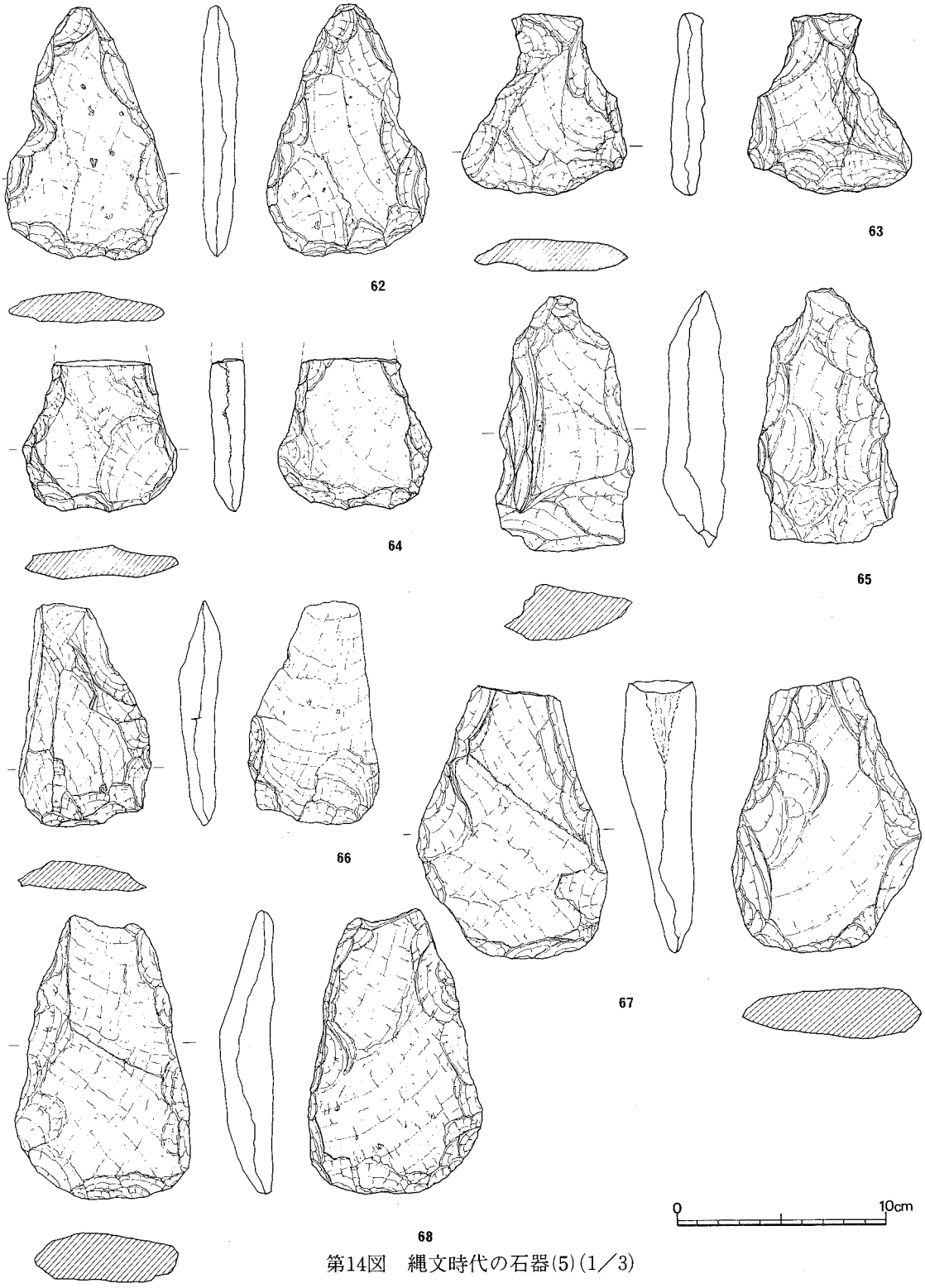
47～53は隅丸長方形を呈し、刃部と基部の大きさにあまり差がなく、所謂、短冊形と言われるものである。**47・48**は近似するもので、各測定値もほぼ同様の値をなす。しかも刃部の角ばった部分を２点とも欠損している。特に**47**においては側縁の二次加工も比較的に丁寧で明らかにこの器形を意識してつくられたものと考えられる。**49**は上半と刃部の角を**47・48**と同様に欠損している。**50**は下半を大きく欠損する。側縁に潰したような二次加工が見られ断面形が長方形に近い形を有する。**51**は下半を斜めに鈍く欠損する。短冊形の中においてはやや大形のものが予想される。**52**は唯一、凝灰岩として扱ったもので、ほかの安山岩には見られない鋭い欠損状況をなす。やや基部が狭くなり細身の形態をなす。**53**は二次加工が全体に粗雑である。**54～61**は細長い楕円形を呈すもので、基部・刃部とも丸く外湾する。全体的に若干刃部の方が幅広になる。**54**は非常に均整のとれた完形品で、側縁に丁寧な二次加工を施す。やや赤褐色を帯びた安山岩製である。**55**は一見、基部は端部を欠損しているようにもとれるが、これは剥片時からのものと考えられ、完形品として扱った。**56～58**は上半を大きく欠損する。**57**は器形の大きさに比べると、薄い感じである。**59**は基部を欠損する。図でもわかるように断面形が不均等で片側に厚くなる。**60**は刃部（下部）を欠損、基部になるに従い厚くなっていく。**61**は下半を大きく欠損、粗雑な二次加工を施す。**62～68**は基部が細く刃部に向かって広くなる「ハ」の字形をした、所謂、撥形を呈する。**62**は撥形と言うより、三角形状をなす。図化の際には尖った方を上にし基部としたが、逆に尖った部分を刃部として利用した可能性も考えられる。**63**は特徴のある器形をなすもので、一応、撥形の石斧の部類で扱ったが判然としない。**64**は上半を欠損する。器形は不明であるが**62**と同様もしくは近似した器形の可能性が考えられる。**65・66**は非常に粗雑な二次加工である。**67**は基部に向かって非常に厚くなる。基部は剥片時の切断面を残す。**68**は横から見ると「く」の字状を呈している。**69～80**は大形の隅丸長方形を呈したもので、中には側縁に若干のくびれを有するものも含む。**69**は部分的な剥落欠損は認められるが全体としては完形品である。**70・71**は両側縁中央がわずかに内湾する。**70**は剥片時からの切断面を残す。二次加工品は比較的に丁寧。**71**は512ｇを計る大形のもので長幅の比がおよそ３：２をなす。**72**は基部を欠損するがかなり大形のものが想定される。原寸値で長さ15cm弱を計り、本来は18～20cmほどの規模が考えられよう。**73～76**は上半を大きく欠損する。**73**は粗雑な二次加工を施



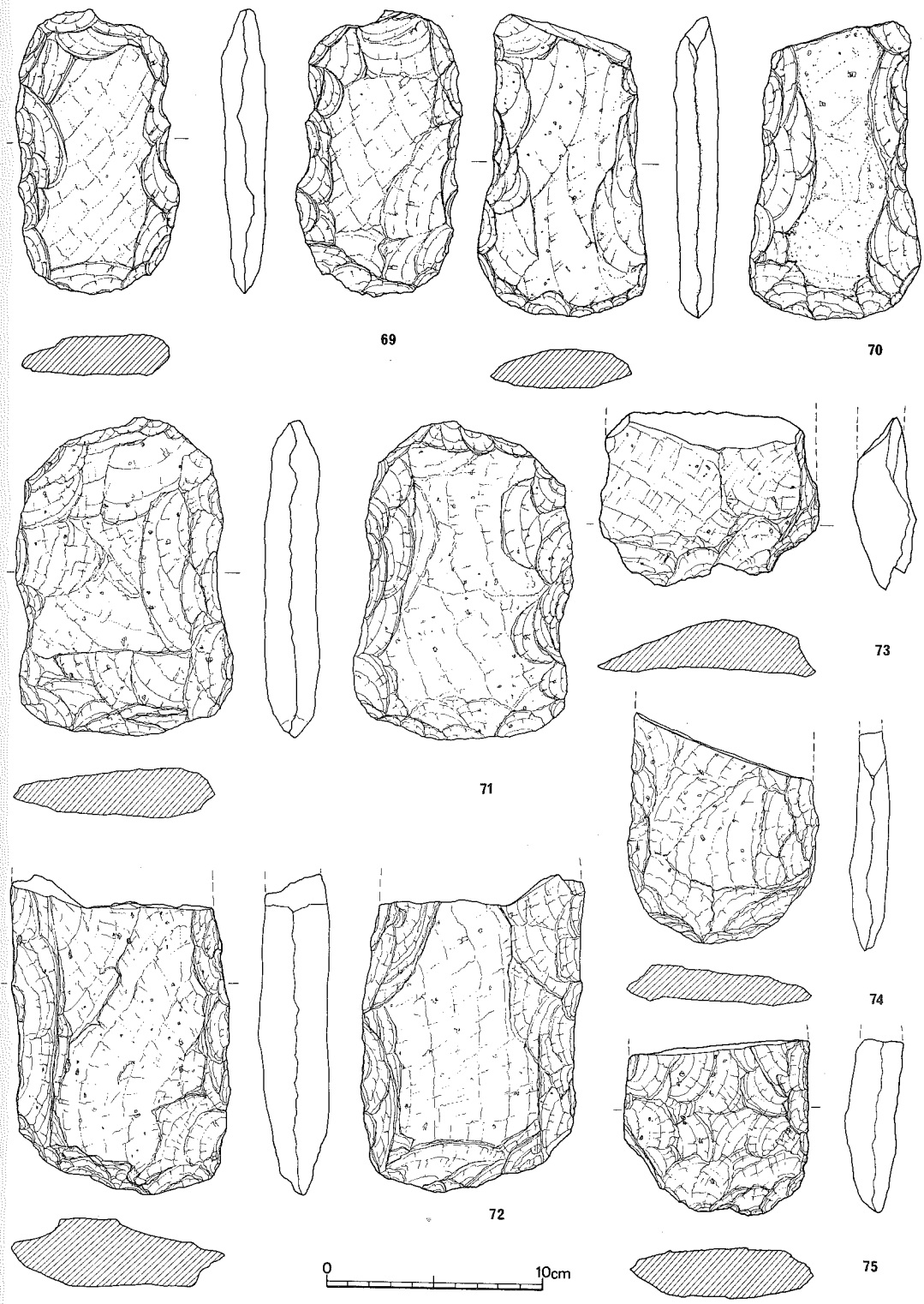
第12図　縄文時代の石器(3)(1／3)



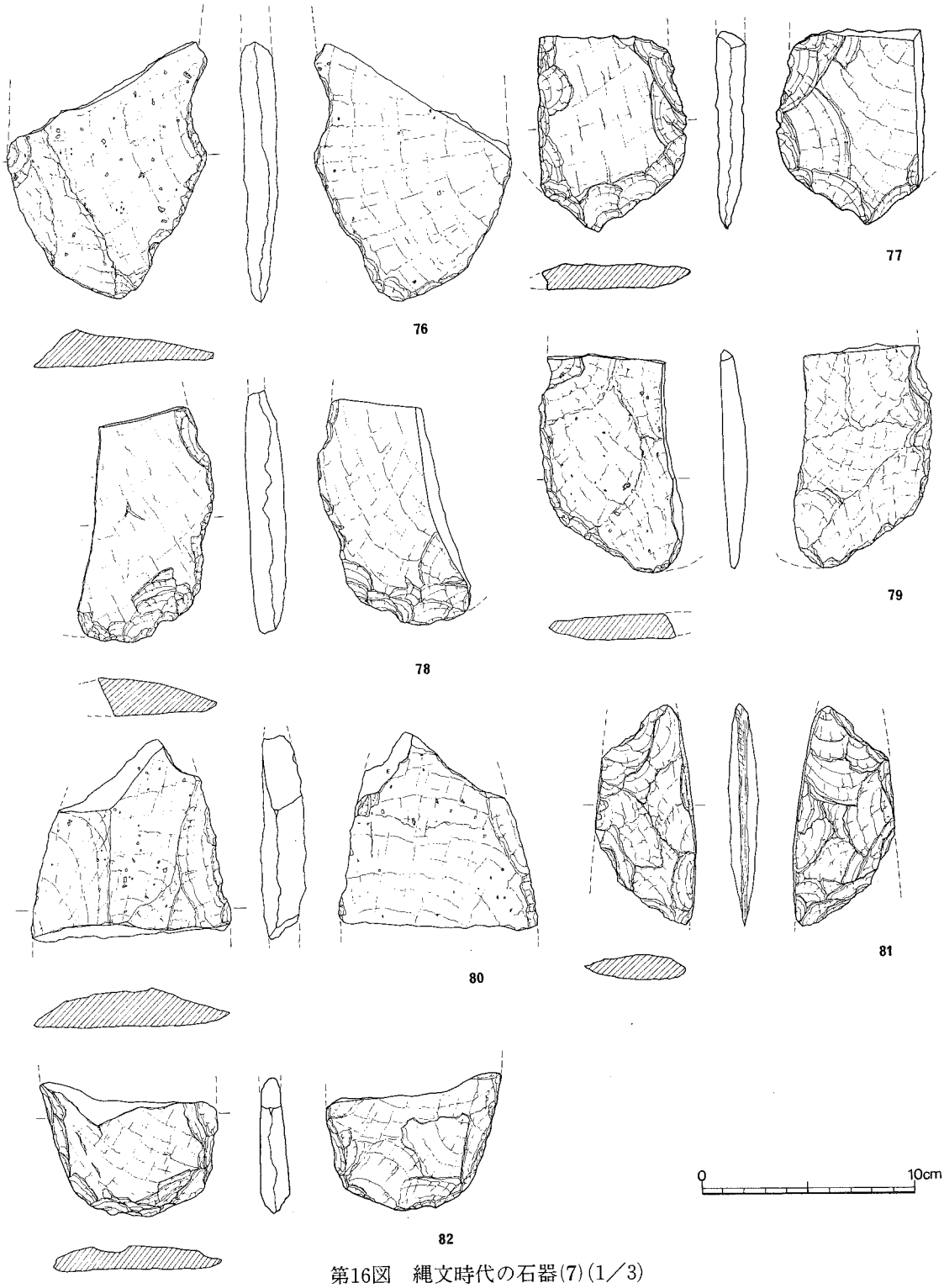
第13図　縄文時代の石器(4)(1／3)



第14図　縄文時代の石器(5)(1／3)



第15図　縄文時代の石器(6)(1／3)



第16図　縄文時代の石器(7)(1／3)

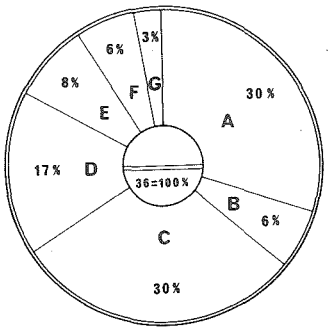
（単位cm・g）

番号	出土区	層	石質	形態	長	幅	厚	重量	遺存状況
47	51－5	4	安山岩	短冊形	13.2	6.2	1.7	197	刃部の一部欠
48	51－4	4	〃	〃	14.5	6.5	1.7	137	刃部の一部欠
49	51－1	5	〃	〃	(7.2)	5.7	1.5	(60)	刃部、上半欠
50	51－4	4	〃	〃	(10.0)	7.5	2.2	(221)	下半欠
51	51－6	4	〃	〃	(10.2)	7.2	1.9	(183)	下半欠
52	51－2	4	凝灰岩	〃	(12.0)	5.3	1.6	(92)	下半欠
53	51－1	4	安山岩	〃	(9.8)	6.7	1.5	(94)	下半欠
54	51－3	4	〃	長楕円形	13.7	6.0	1.7	168	完形
55	51－1	4	〃	〃	11.6	6.3	2.4	218	完形
56	51－2	4	〃	〃	(9.3)	7.7	1.6	(110)	上半欠
57	51－1	4	〃	〃	(9.3)	7.3	1.7	(167)	上半欠
58	51－2	4	〃	〃	(9.5)	6.2	1.6	(140)	上半欠
59	51－2	4	〃	〃	(11.2)	6.7	2.1	(215)	上部欠
60	51－5	5	〃	〃	(11.4)	5.7	1.8	(208)	下部欠
61	51－2	4	〃	〃	(9.3)	6.6	1.8	(125)	下半欠
62	51－2	4	〃	撥形	12.0	7.9	1.5	165	完形
63	51－7	5	〃	〃	8.7	7.9	1.7	90	完形
64	51－4	4	〃	〃	(7.2)	7.2	1.5	(112)	上半欠
65	51－6	5	〃	〃	12.3	6.2	2.6	232	完形
66	51－1	4	〃	〃	10.7	6.3	1.4	125	完形
67	51－6	5	〃	〃	13.1	8.7	3.3	390	完形
68	51－1	5	〃	〃	13.5	8.2	2.0	332	完形
69	51－4	4	〃	大形長方形	13.1	7.4	2.0	261	完形
70	51－3	4	〃	〃	14.0	7.8	2.0	254	完形
71	51－1	5	〃	〃	14.7	10.0	2.2	512	完形
72	51－1	4	〃	〃	(14.6)	10.2	3.1	(650)	上部欠
73	51－3	4	〃	〃	(8.0)	10.1	2.4	(222)	上半欠
74	51－3	4	〃	〃	(10.2)	8.7	1.8	(186)	上半欠
75	51－3	4	〃	〃	(8.0)	8.6	2.1	(245)	上半欠
76	51－4	4	〃	〃	(12.2)	9.3	1.6	(120)	上半欠
77	51－2	4	〃	〃	(9.0)	(7.0)	1.3	(101)	上半、側縁欠
78	51－2	4	〃	〃	(11.2)	(5.5)	1.7	(130)	上半、側縁欠
79	51－2	4	〃	〃	(10.3)	(6.2)	1.2	(90)	上半、側縁欠
80	51－2	4	〃	〃	(9.5)	9.5	1.8	(208)	上部、下半欠
81	51－4	4	粘板岩	一部磨製	(10.5)	(4.6)	1.3	(58)	上部、下半欠
82	51－2	4	安山岩	不明	(6.2)	8.0	1.4	(82)	上半欠

第3表　石斧計測表（　）は原寸値

す。**74・75**は比較的細かな二次加工を施す。**76～79**は薄く、刃部が尖るものである。特に**77～79**は上半および側縁を大きく欠損し、独特の欠損状況をなしている。**80・81**は上部と下半を欠損する。**81**は本来は暗灰色の粘板岩製の磨製石斧だったと考えられるもので、打製の石包丁に転用しようとした可能性も考えられる。**82**は刃部のみが残ったもので、全体の感じが明確に把握できない。非常に薄い剝片を用いている。

使用石材をみると、36点中34点が安山岩で占められ、凝灰岩と粘板岩が各１点ずつをなす。この理由は、在地において簡単に、しかも大形の石材が入手できる。加えて、安山岩特有の板状剥離の性質を有効に活用していることによるものと考えられる。また、本遺跡において二十数基の弥生時代の石棺が検出されており、棺材はすべて同質の安山岩が使用されている。なお、遺跡の近辺には今日でも、安山岩の露頭が多く見られ板状剥離の状況も容易に観察することができる。

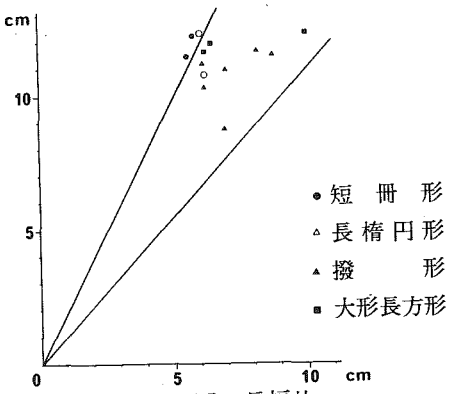


A 完　　形　　品(11)
B 刃部の一部のみ欠損(2)
C 上部および上半を欠損(11)
D 下部および下半を欠損(6)
E 上半と側縁を欠損(3)
F 上下部を欠損(2)
G 上半と刃部の一部を欠損(1)

第17図　石斧遺存状況

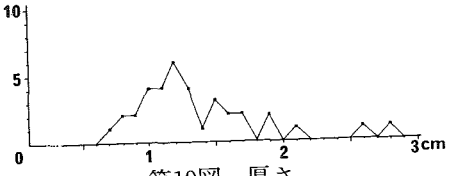
破損の状況をみると第17図に示すように、完形品が３割で、残る７割が欠損品で占められる。完形品のうち撥形の残存率が比較的に高く、器形からくる強度が予想される。欠損品においては上部、下部を欠損するものが半数弱を占める。換言するならば上下に直線的に切断されるように欠損をなしていると言えよう。また、短冊形７点のうち３点は刃部の角ばった部分を欠損し形態からくる当然の欠損をなしていると言えよう、飛躍して考えるならば、このような欠損状況を加味して刃部の形態は丸く仕上げた方がよいのかもしれない。

完形品及び全体の形態が明確に予想できるもの13点で長幅の比をみたが、おおよそ２：１に近似する値のものが多く、短冊形、長楕円形は細身、撥形はやや幅広の傾向がうかがえるようだ。



第18図　長幅比

また、石斧全36点においてその厚みを計測しグラフ化したところ（第19図）、１～２cmの値のものが多く、特に1.2 cmでピークをなしている。このことは先にも述べたように、二次加工での調整によるものではなく、在地の安山岩特有の性質からくる板状の剥離の厚さである。



第19図　厚さ

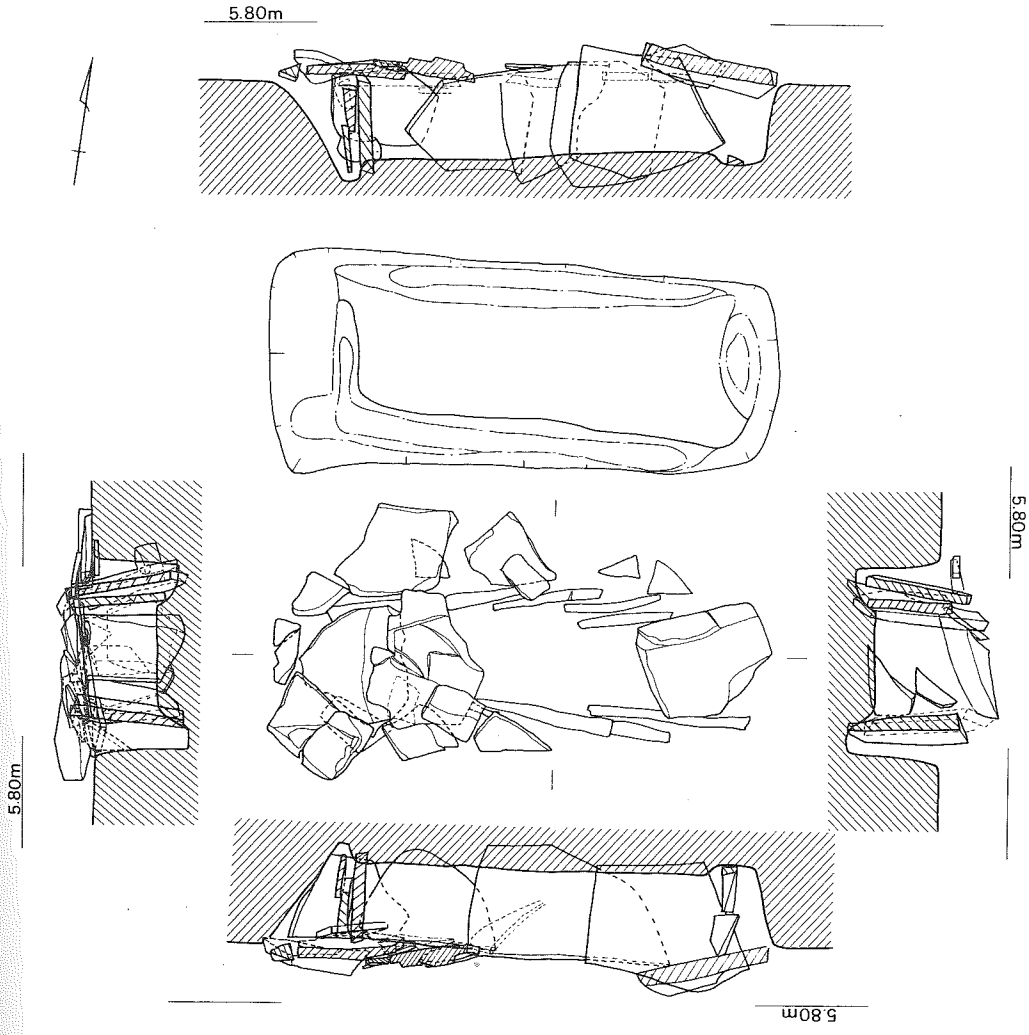
扁平打製石斧は、所謂、「土掘道具」として今日において多くの資料をみるが、鋤等の機能を強く持つものであれば「斧」と言う使用は適切ではないのかも知れない。なお、本遺跡では使用痕や着柄の観察や実験を行うには至っておらず、今後の課題としたい。

2．弥生時代の遺構

(1)埋葬遺構

白井川遺跡では、標高４ｍ～12ｍの広い範囲に、箱式石棺墓、石蓋土坑墓、壺棺墓の計22基が検出された。その中で圃場整備事業分として調査したのは10基である。残り11基と壺棺１基については町単独事業の調査として記録を行った。後者の事業では関連のものとして鏡片の出土や、住居跡などが検出された。これらをまとめる報告書については次年度刊行予定である。従って遺構全体の総括は次刊にゆだね、今回は10基の遺構の事実認定だけにとどめる。

なお番号は箱式石棺墓、石蓋土坑墓にかかわらず通しにしてある。



第20図　第１号石棺墓(1／20)　0　1m

第１号石棺墓　第20図

表面観察で最初に発見され、調査の糸口を開いた遺構である。蓋石は1/3程残存し、その他は表土剝工事の際失われている。側板は５枚の板石を重ねながら立て、北側を広く、南側を狭くした長方形の末広がりである。小口側板は北側が残り南側は抜かれ床石は敷かれていない。副葬品はガラス小玉１個、碧玉製管玉１個が得られている。棺の内法は長軸１ｍ、短軸0.4ｍ、主軸方向N84°E

第２号石棺墓　第21図

１号石棺墓のすぐ北側に位置する。石蓋石は破片がわずかに残り、側板は両側とも１板抜かれ、小口板は残る。床の敷石、副葬品は認められない。棺の内法は長軸0.95ｍ、短軸0.35ｍ、主軸方向N46°E

第３号石棺墓　第22図

かなりの破壊を受けている。側板と思われるものが２枚と小口の部分がわずかに残り、土坑は不自然さを残す。石蓋土坑墓かも知れない。主軸方向N38°W

第４号石棺墓　第23図

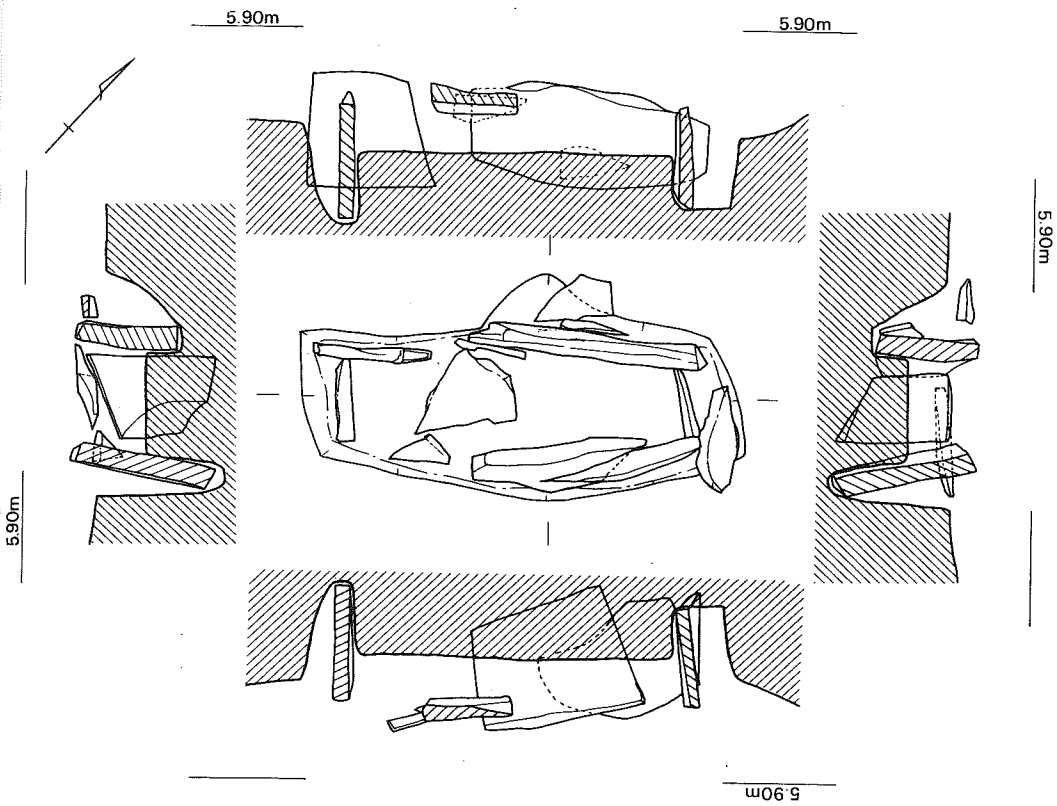
石棺墓の中では一番西側に位置しほぼ完形で残る。石蓋はよろい板状に、北から南へ重ねられている。蓋を取ると側板は２枚組、小口板は１板で組み合わせられている。また土坑もよく観察されるが、土坑と側板の間には東側に２個、北側に１個の拳大の裏込め石が置かれている。棺床面に石敷はないが、副葬品は碧玉製管玉２個。棺の内法は長軸0.65ｍ、短軸0.35ｍ、深さ0.18ｍ、主軸方向N23°W

第５号石棺墓　第24図

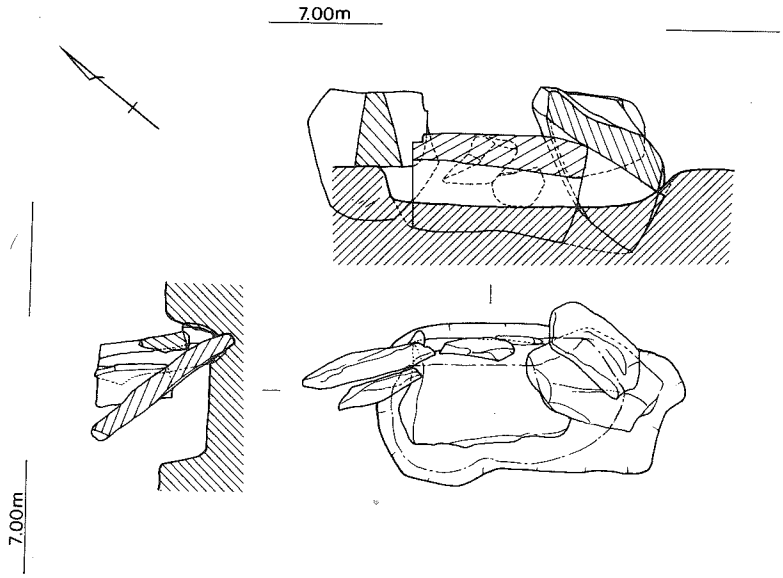
４号石棺と隣接する。蓋石は大きなものが４板残り、側板は両側とも半分の２板だけ残る。形状は末広がりで狭い方の小口板が１枚はめられ、角に拳大の礫が１個支えに置かれている。棺床石敷なく副葬品も見られない。棺内の長軸は知り得ないが土坑長は約１ｍ、短軸は0.47ｍ、深さ0.19ｍ、主軸方向N43°W

第６号石棺墓　第25図

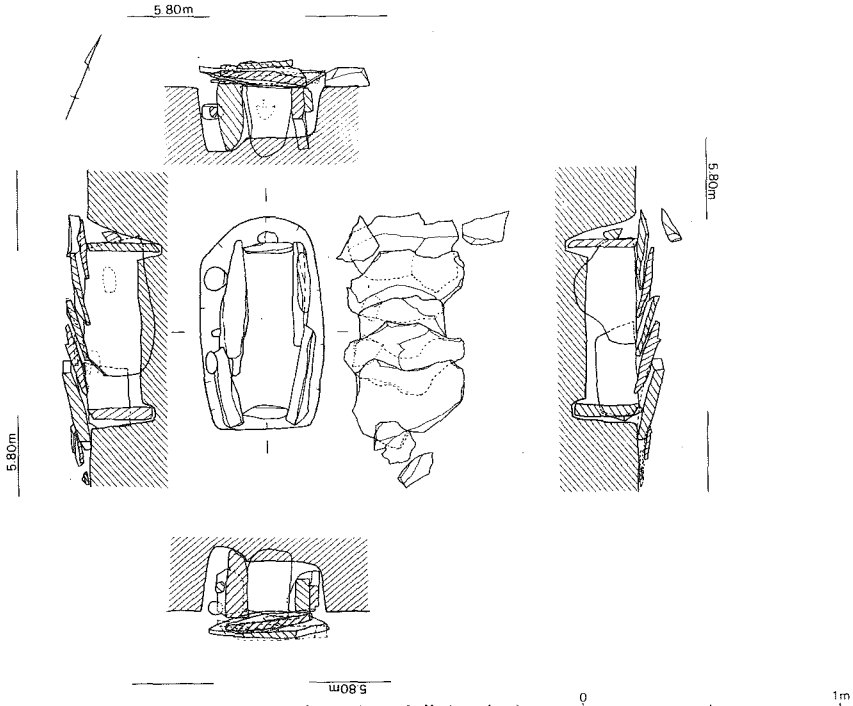
石棺墓の集中する一角のＤ－５区に位置し、小形である。蓋石は１枚残るだけで他は失われている。側板は各２枚、小口は１枚である。棺床石敷、副葬品は認められない。棺内は長軸0.55ｍ、短軸0.3ｍ、深さ0.15ｍを計り、主軸方向N69°W



第21図　第２号石棺墓(1／20)



第22図　第３号石棺墓(1／20)



第23図　第４号石棺墓(1／20)

第７号石棺墓　第26図

一応石棺墓としてあげたが、調査の結果は、蓋石と考えられた下部には土坑らしい遺構は見られなかった。主軸方向N49°E

第８号石蓋土坑墓　第27図

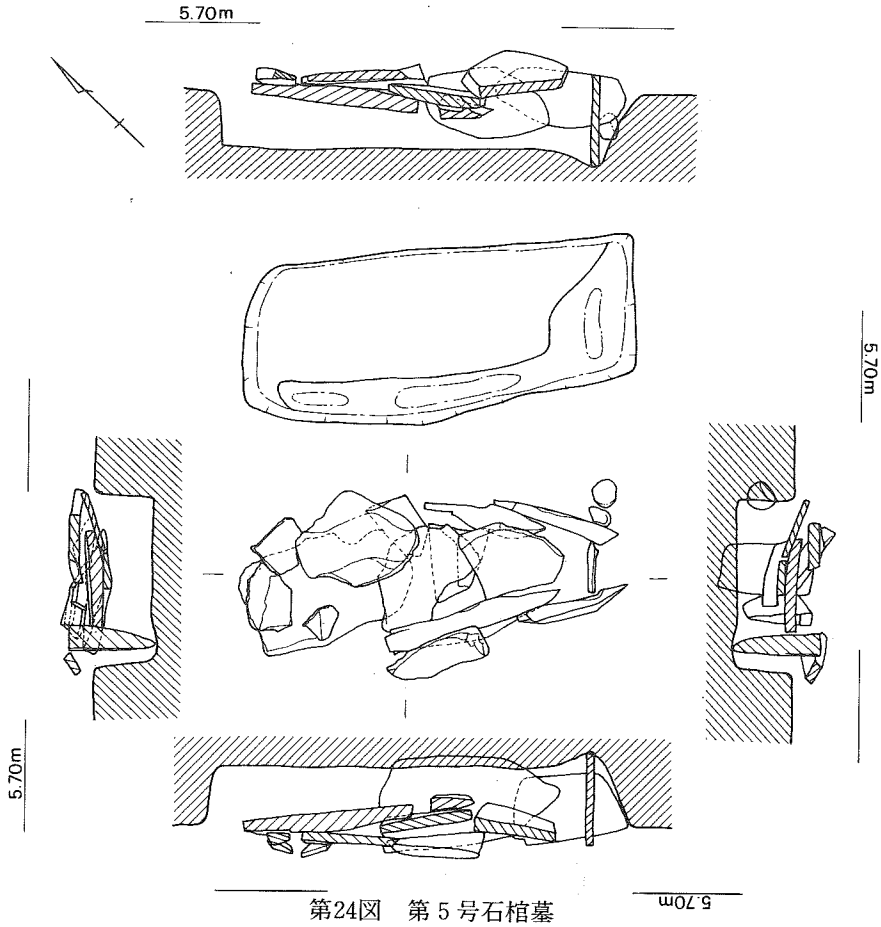
C－５区に位置し小形である。蓋石が３枚ほど乗るが、土坑全体は覆われておらず、欠失していると思われる。土坑は丸味をおびて掘られ、長軸0.75m、短軸0.55m、深さ0.22mを計り主軸方向N42°W

第20号石棺墓　第28図

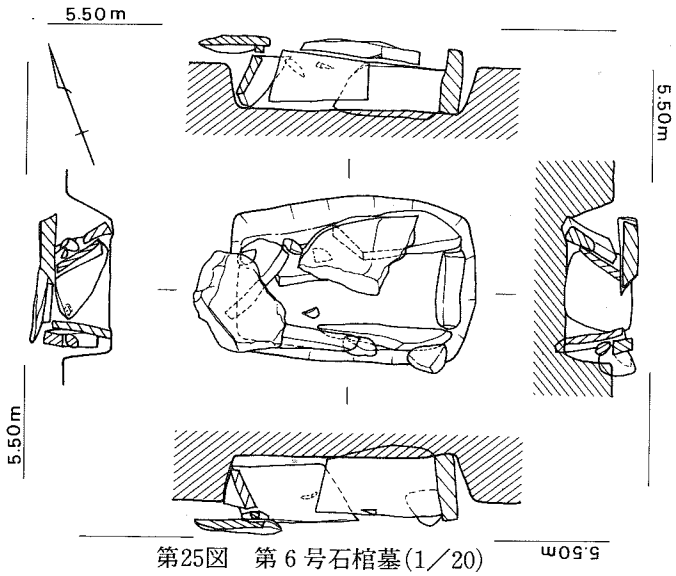
調査後の工事中に出土した石棺墓である。ほぼ長方形で蓋石は失われている。側板は両側とも１枚の板石が置かれ小口の方も同様である。各コーナーには小さい石がはめ込まれ補強され、床石、副葬品はない。棺内は長軸0.55m、短軸0.30m、深さ0.2mを計り、主軸方向N65°E

第21号石棺墓　第29図

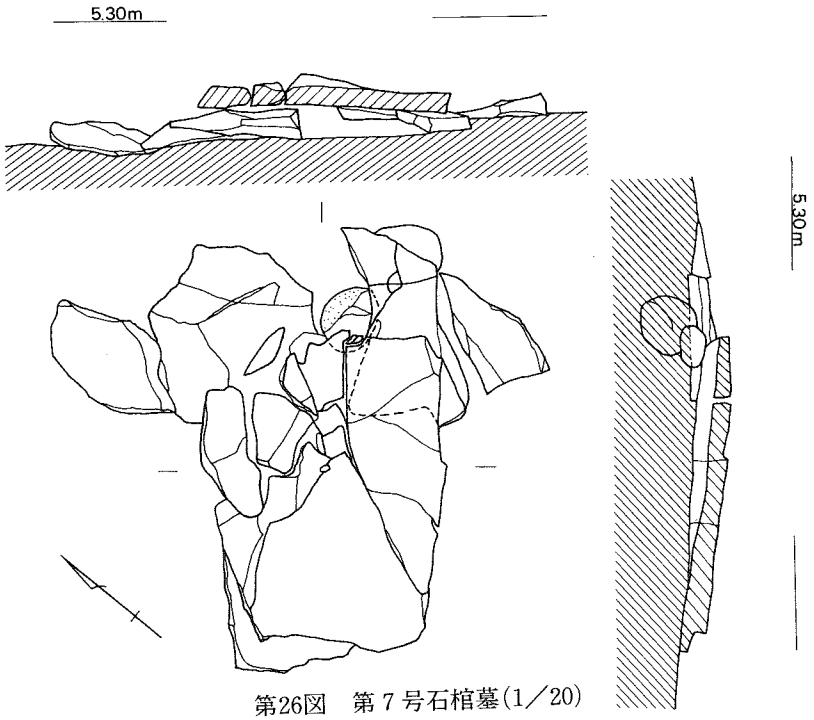
20号に隣接し、一緒に確認されたものである。蓋石や側板は失われている。石抜き痕は見られず、石蓋土坑の可能性もある。主軸方向N87°W



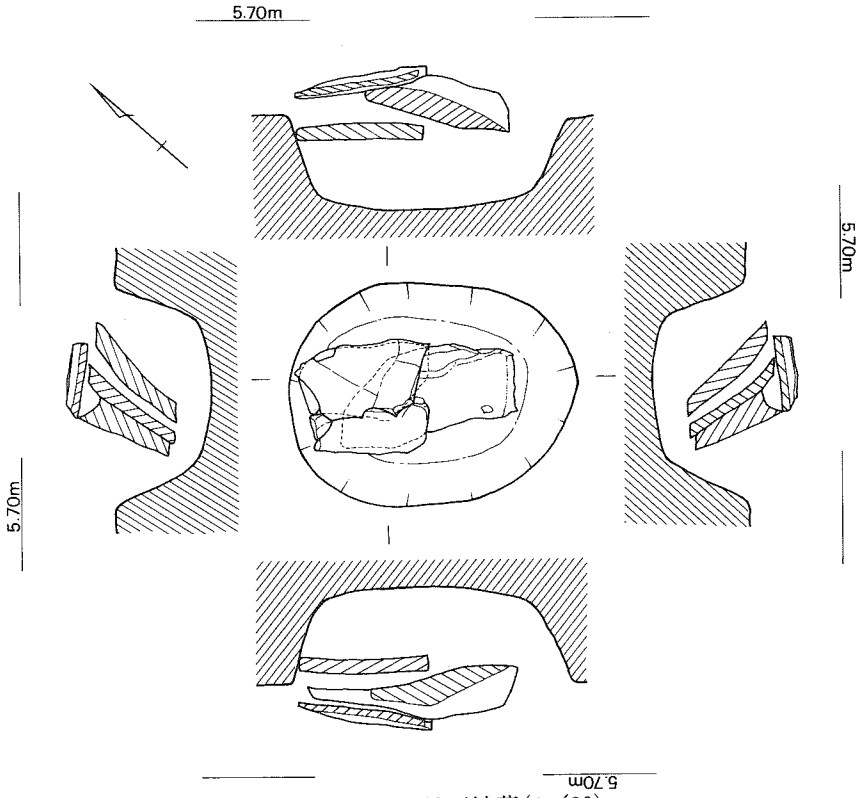
第24図　第５号石棺墓



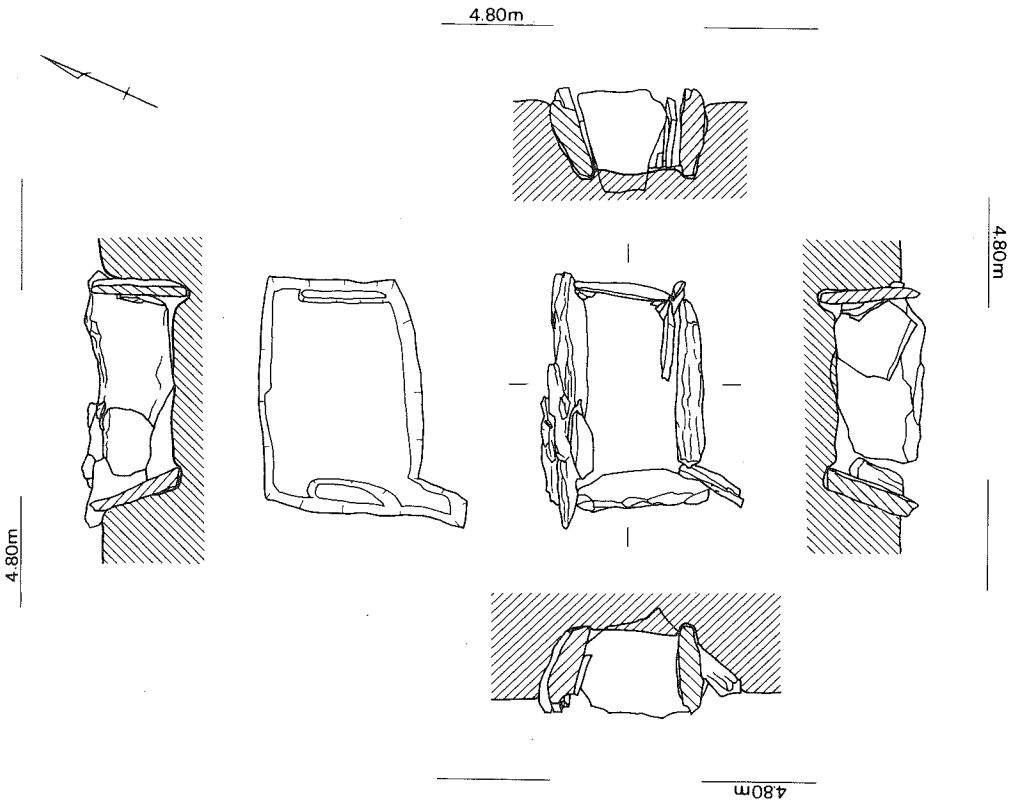
第25図　第６号石棺墓(1／20)



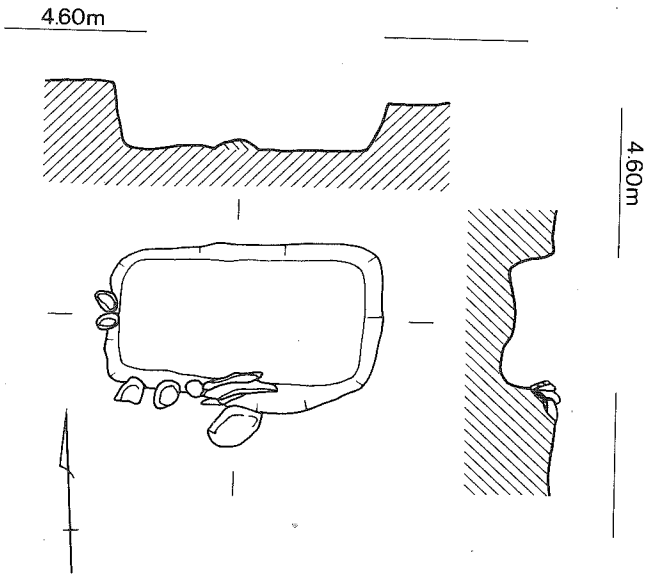
第26図　第７号石棺墓(1／20)



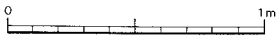
第27図　第８号石棺墓(1／20)



第28図　第20号石棺墓(1／20)



第29図　第21号石棺墓



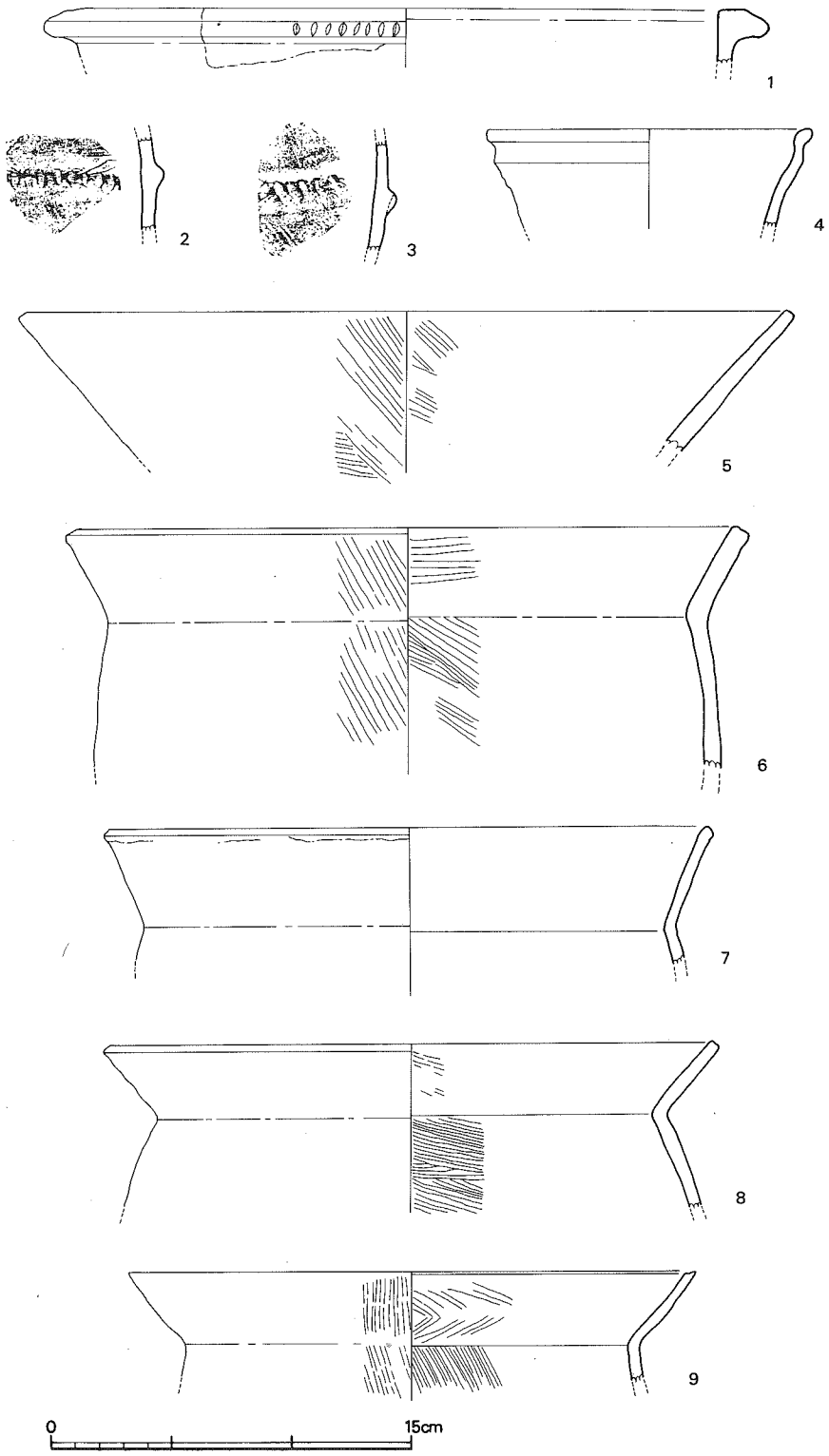
3．弥生時代の遺物

弥生土器（第30図～第34図）

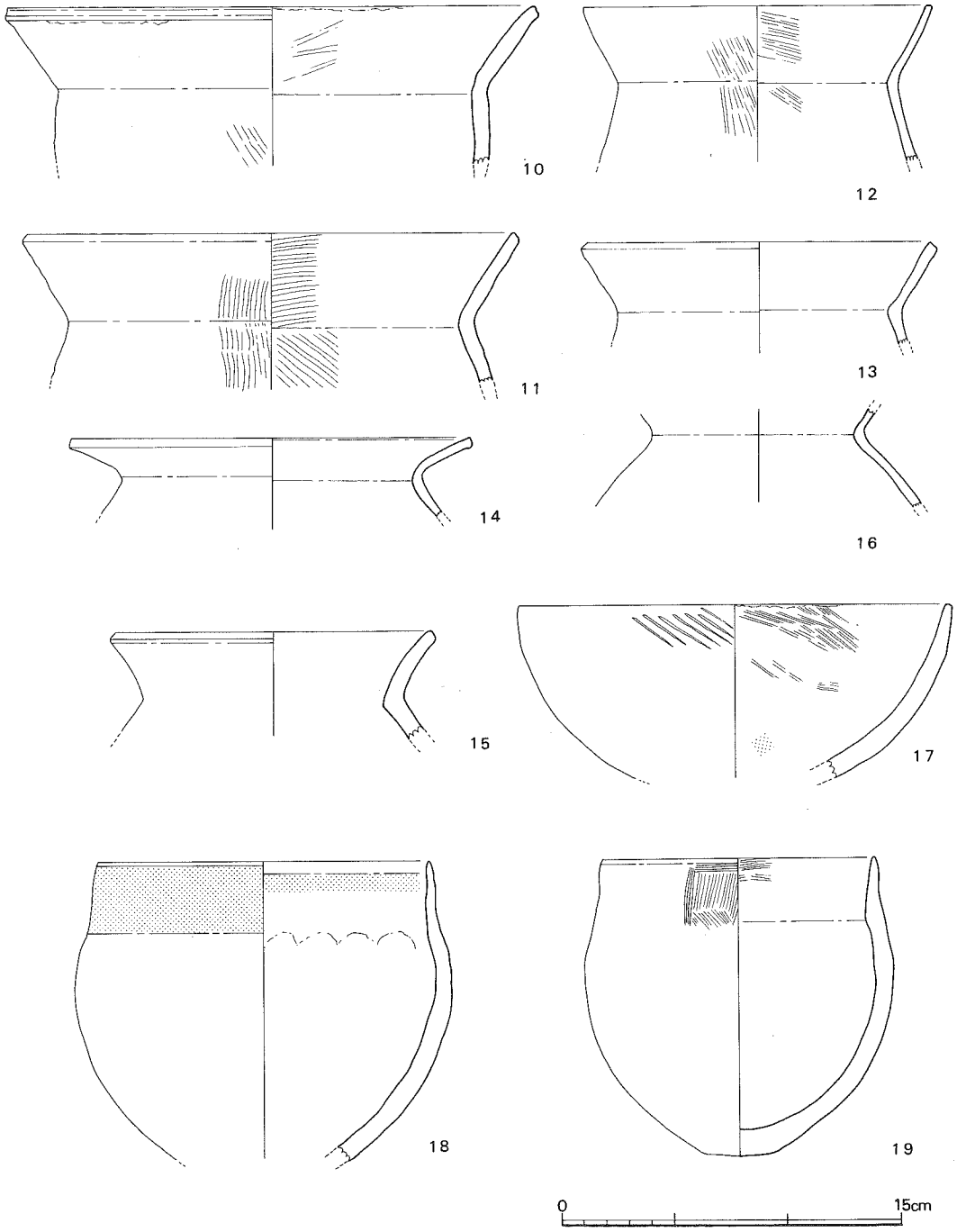
器種では甕、高杯、鉢、器台など、出土量は膨大ながら、小破片が大半である。特に集中的に出土したのは51水C～D区の土器溜りと考えられる所からで、標高5m～7mまでの範囲に弥生時代の主体が見られる。

甕（第30・31図1～19）

1は口縁に突帯が設けられ、刻目が施されている。口縁直下で失われているため、刻目突帯が2段になるか不明であるが、亀ノ甲タイプの甕であろう。胎土には長石、角閃石、石英粒などを含み焼成は良好。2、3は甕胴部で同じ刻目突帯文を有するが、2は刻目が短く施してあるのに対して、3はややきれ長に施してあり、直下にわずかなハケ目調整痕が残る。内部も同様のハケ目が施してある。胎土は両者とも滑石粉末が混入され、茶、黒の砂粒も目立ち同一個体に近い感じである。時期的には後期に見られる刻目とは違い、古いタイプと考えられる。4は器壁薄く、かなり磨耗している。口縁部はくびれ、丸くふくらみ頸部上半がわずかに張り出す。全体の形状を知り得ないが壺状を呈する。5は広口の壺口縁と思われる破片で、内外面にシャープなハケ目が施されている。色調は黄褐色を呈し、焼成は甘い。6～15は器壁のうすい甕形口縁である。出土遺物の多くはこの土器片が占める。6は大形の破片で「く」字形に屈曲する。口縁端部は平坦で、わずかに凹んでいる。頸部は間のびした感じでしまりがなく胴も張らない。内面の口縁部分は横のハケ目を、下部には横および斜めにハケ目調整を行っている。胎土には滑石粉末が混入されよくしまっている。色調は灰褐色で焼成良好。7はわずかに磨耗しているが、ハケによる調整痕は見られない。口縁端部は平坦である。8は外面は磨耗してハケ目調整痕は痕跡をとどめないが、内面胴部には細いハケ目調整がやや斜めに施され、胎土には滑石粉末を混入して胎土、焼成とも良好。9の口縁は、内側に斜めに削られ、わずかにふくらむ。口縁外面はタテにハケ目が、内面は綾杉状に、胴部は斜行してハケ目調整が行われている。10はぼってりとした口縁で、端部は指状のものでヨコナデされ、口唇部に粘土のあとびきが残る。胴部外面は粗いハケで調整のあとヨコナデされている。内面も同様である。この土器にはやや多めの滑石粉末が混入されしっかりしている。色調は暗褐色を呈し、焼成は良好。11は黄褐色を呈し、器面の内外に粗いハケ目調整を行っている。12も焼成は甘く黄褐色を呈しているが、器壁は薄く弱いハケ目調整が行われている。13は胎土粗く、ハケ目調整も見られない。14は器壁薄く頸部がしまり、外に屈曲が強い口縁である。端部はわずかにつまみ出されている。内外面ともヨコナデが行われている。胴部内面はヘラ削りと思われるものが残り、古式土師器の段階に属するものであろう。色調は暗褐色で胎土、焼成とも良好。15は器壁厚く内外面ともヨコナデで土師器であろう。16は口縁部を欠失するが、頸部がよくしまり胴部は球形に張り出し、小型の壺を呈するものである。磨耗著しいが胎土には石英や長石などの砂粒を含み、色調は黄褐



第30図　弥生式土器実測図(1)(1／3)



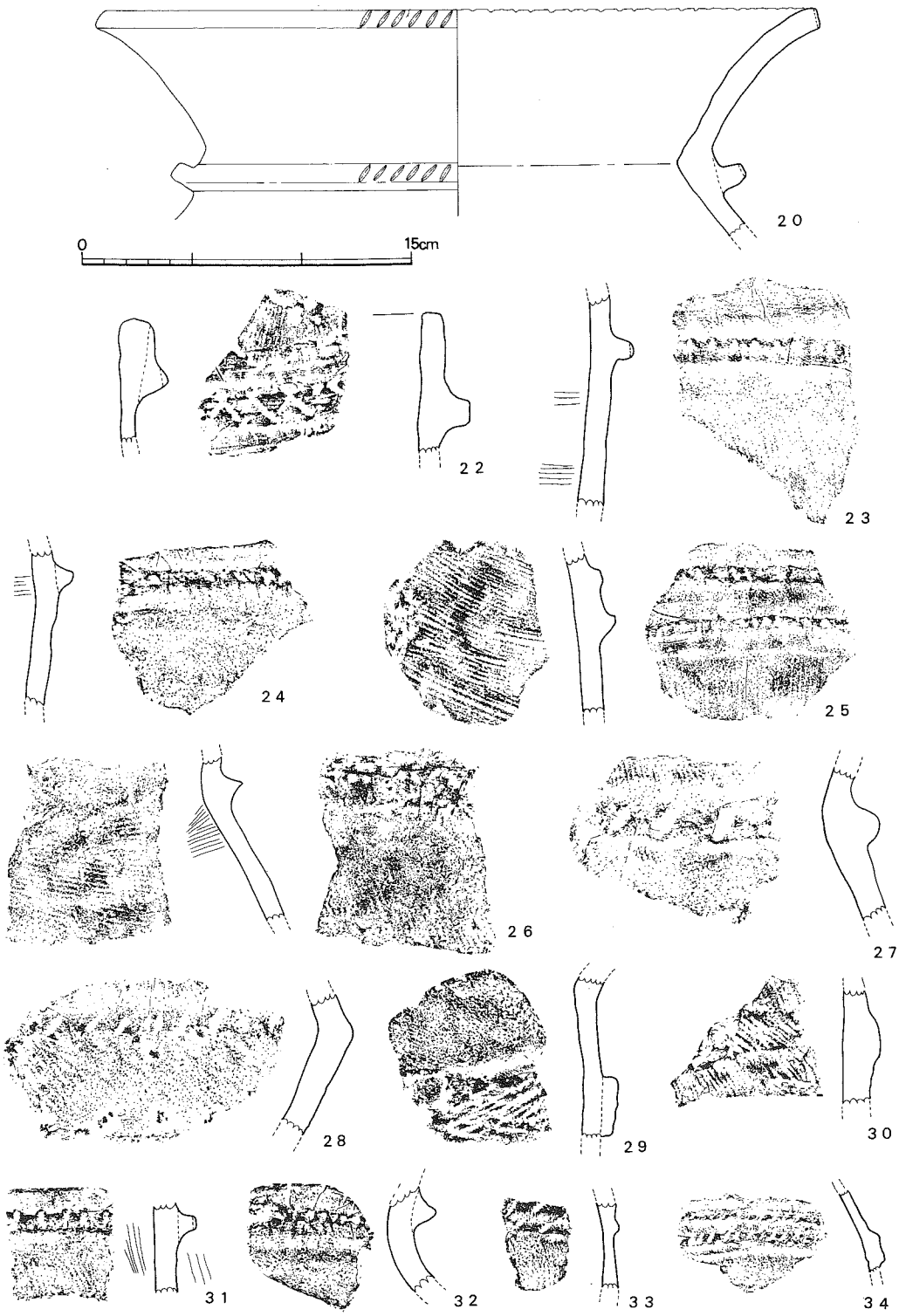
第31図　弥生式土器実測図(2)(1／3)

色で焼成良好。17は口径19cmの丸底になると思われる鉢である。外面にはヘラで斜行する刻みが施され、内面は粗いタタキに似た調整が行われ、下半部はヘラ削りされている。胎土には粗い石英粒や砂粒、それに滑石粉末が少量混入されている。色調は褐色を呈し、土師器に含まれるか。18は頸部がわずかにしまり、口縁は直行しながらやや内湾する。口縁部分には内外に丹が塗ってある。胴部はややふくらみ底部は欠失するが、19に近いと思われる。胎土は茶色の砂粒が目立ち、軟弱で磨耗著しい。色調は黄褐色、焼成甘い。19は器形は18に近いが、胎土に滑石粉末を多く含み、灰暗褐色でよくしまりしっかりしている。口縁部外面は縦にハケ目を、内面にはヨコにナデ調整が行われている。内部はヘラ状のものでナデられているが凹凸があり、雑な作りである。底部は平底気味で安定していない。口径12cm、高さ13cm。

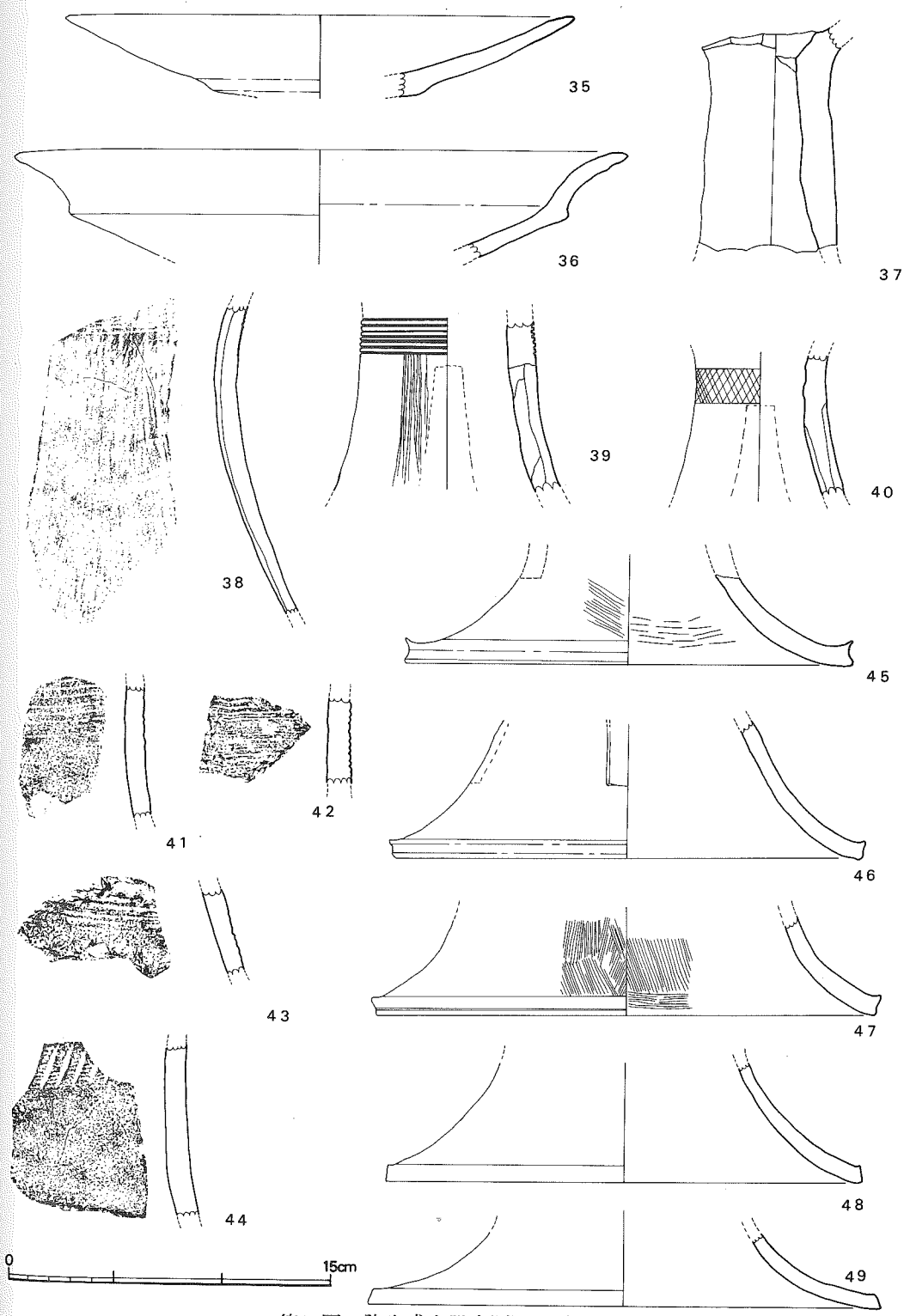
大形甕・壺（第32図20～34）

ここに示した土器は大形の甕あるいは壺になるもので、甕棺として使用された可能性もある。調査では弥生後期の壺棺１基だけの検出に終っている。

20は、大きな口縁部破片で頸部が大きく屈曲しながら外反する。口唇部にはヘラと思われる工具で斜行する刻目が施され、頸部には約１cm幅の突帯を貼り付け、口唇部と同じ刻目を施している。胎土は茶色や白い砂粒を多く含み、色調は赤褐色で焼成良好。出土は51水－01区Ⅳ層からで内面は荒れている。21は口縁直下に突帯を貼り付け刻目を施している。胎土には細かい砂粒を多く含み、焼成は甘く、灰白色を呈する。22は厚い口縁下部に断面方形の突帯を貼り付け、平坦部にヘラによる三角文状の刻目を施し、突帯と口縁部の間にはハケ目調整を行っている。内面は剝落しているが、胎土、焼成は良好。23はほぼ直行する胴部に断面方形の刻目突帯を有し、さらに下半部には粗いハケ目調整が施されている。内面も横にハケ目が見られるが剝落部が多い。胎土は細かい砂粒が主体で色調は褐色、焼成は良好。24は胴部に断面台形の狭い突帯を有し、平坦部に刻目が全体に入れられている。外面はやや磨耗してハケ目は見られないが、内面には横方向にかすかに残る。胎土には白い砂粒の他や金雲母も含まれ、焼成も良好である。25は胴部に２段の刻目貼り付け突帯を有するが、上段は低くつぶれたようになる。下段は断面三角形でヘラによる面取りが行われ、内外面は粗いハケ目調整が施されている。胎土にはやや粗い砂粒を含み、色調黄褐色で焼成は良好。26は壺状を呈すると思われる頸部から胴部にかけての破片である。頸部に断面三角形の貼り付け突帯があり、項部に刻目が入る。内外面には粗いハケ目が施され、胎土、焼成とも良好。27はやはり壺と考えられる頸部である。胴部上半に貼り付け突帯を設け、縄目の押圧が間のびした間隔で付され、ハケ目は内外に粗く施される。胎土には黒白の砂粒が多く混り、褐色で焼成は甘い。28は肩と思われる屈曲した部分に、ヘラで両側から刻目を入れている。内外面はかなり磨耗しているが粗いハケ目がかすかに残り、器壁は厚く、大型になると思われるが全体の器形は知り得ない。胎土良好だが焼成やや甘い。29はかなり磨耗を受けている破片で頸部がやや外反する。胴部には断面方形で幅２.５cmの帯状貼り付け突帯が付き、平坦部には斜格子状に刻目が施されている。30は胴部に低い帯状貼り付け



第32図　弥生式土器実測図(3)(1／3)



第33図　弥生式土器実測図(4)(1／3)

突帯が付き、平坦部に斜行する粗い刻目が付く。内外には粗いハケ目が施され、胎土には石英粒や粗い砂粒を含み外面は黒色、内面は暗褐色で焼成は甘い。31は、口縁端部を欠くが、直下に断面丸形の刻目突帯を付け、ハケ目は内外に施されている。32は壺、頸部のくびれた部分に刻目突帯を設け、胎土には白い砂粒や石英粒を多く含んでいる。33は小破片だが帯状貼り付け突帯の中央が凹み、ヘラにより斜めに刻んでいる。器形は小形の甕である。34は小形壺、胴部に帯状貼り付けが行われ、中央部が凹み高まりの部分に2段の刻目が施されている。胎土はきめ細かく焼成は良好。

高杯（第33図35～37）

35は高杯の杯の部分である。口縁端部は先細りにつまみ出され下半はわずかにふくらみ、脚部につながる部分は段がつき厚くなる。胎土は白い砂粒を多く含み焼成はやや甘く、磨耗を受けている。36は杯部で口縁部は外反し、肩は屈曲する。内外面はヨコナデが行われ、胎土は良好で焼成甘い。37は脚部で上部にわずかに杯部分が残る。断面には中空が見られ、ヘラ削りの痕が見られる。胎土、焼成とも良好。

器台（第33図38～49）

器台片も多くが出土し、三種類に分けられる。(1)数条の横沈線を施し、透し窓を付けるもの。38・39・41～44である。沈線はシャープなものから乱れたものまであり、縦にハケ目調整が施されている。44は沈線のあとに斜めにヘラで刻目を入れている。わずかに丹塗りの痕跡をとどめる。(2)は格子状にヘラによる刻目を付け、透し窓をもつもので40がそうである。(3)はラッパ状に開く脚下半部で、端部が凹むもの45～47、と平坦なもの48・49がある。またハケ目は45、47に見られ、47は丁寧な調整が施されている。透しが確認されるものは45、46に見られる。

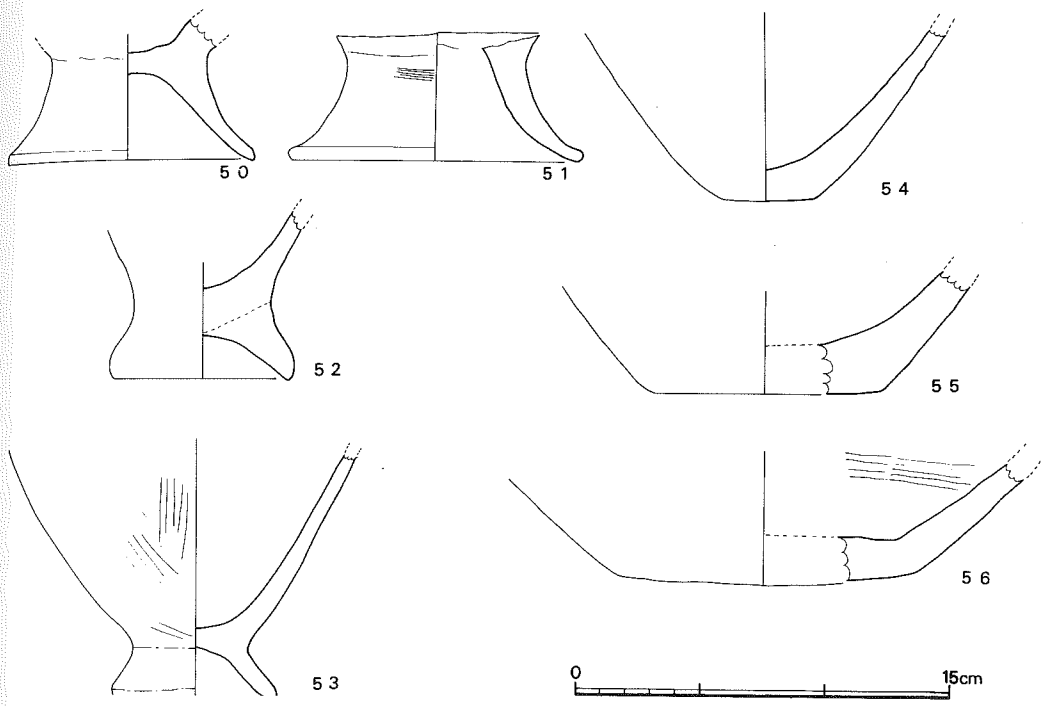
甕底部（第34図50～56）

50～53は台付甕の底部である。51、52は褐色を呈する。ぶ厚く、裾部の広がる土器である。52、53は裾部が開かない台付甕であるが、52は滑石粉末を多く含み暗褐色でよくしまっている。胴部や底部は板状の工具で粗く整形されいびつである。53も滑石粉末を多く含む。整形はいびつで底部はかなり磨耗を受けている。胴部は粗いハケ目が付き、内面は黒色、外面は黄褐色を呈する。54は底部径が3cmの平底で安定を欠く甕である。胎土には滑石粉末を含みややしまるが、52、53程はない。55、56は大形甕の底部である。器壁は厚く、焼成は甘い。56は中央部がふくらみ安定感を欠く。

弥生式土器は旧河道ではないかと考えられる51水01～05区からの出土で、古墳時代の土器と混在して出土したが、51水1～8区になると第2層～3層に集中した。2層では古式土師器も出土しており、弥生終末の土器と混在している。3層ではやはり古式土師器も混在するが、弥生終末の土器が多数を占める。

亀ノ甲式土器については大村市稗田遺跡[註10]でまとまった出土をしている他、武雄市周辺の遺跡

でも類例が知られている。また今回図示した大部分は弥生終末期のもので、大集落の存在が予想される。すでに3棟の円形竪穴住居が検出されているので、次刊行分では先述した遺跡群との比較を行いながらまとめてみたい。

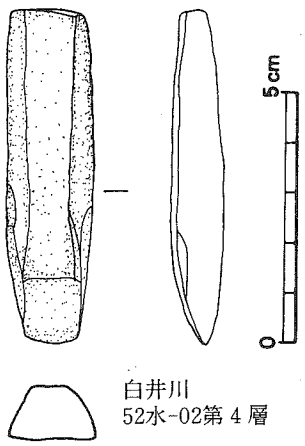


第34図　弥生式土器実測図(5)(1／3)

石　器（第35図）

方柱状扁平片刃のノミ型の石器である。石質は安山岩製で、全体を丁寧に研磨している。断面は隅丸方形で、表面は中央部に抉りが見られ、緊縛になる部分である。刃部はやや細くなり弧状を呈する。裏面はゆるく湾曲するように研磨されている。全長6.6cm、幅1.6cm、厚さ1cm、重量22g。

出土層位は、51水－02区Ⅳ層の弥生と古墳の混在層からであるが、時期的には弥生に属するものである。類似資料は、田平町里田原遺跡において、弥生前期末～中期にかけて出土している。



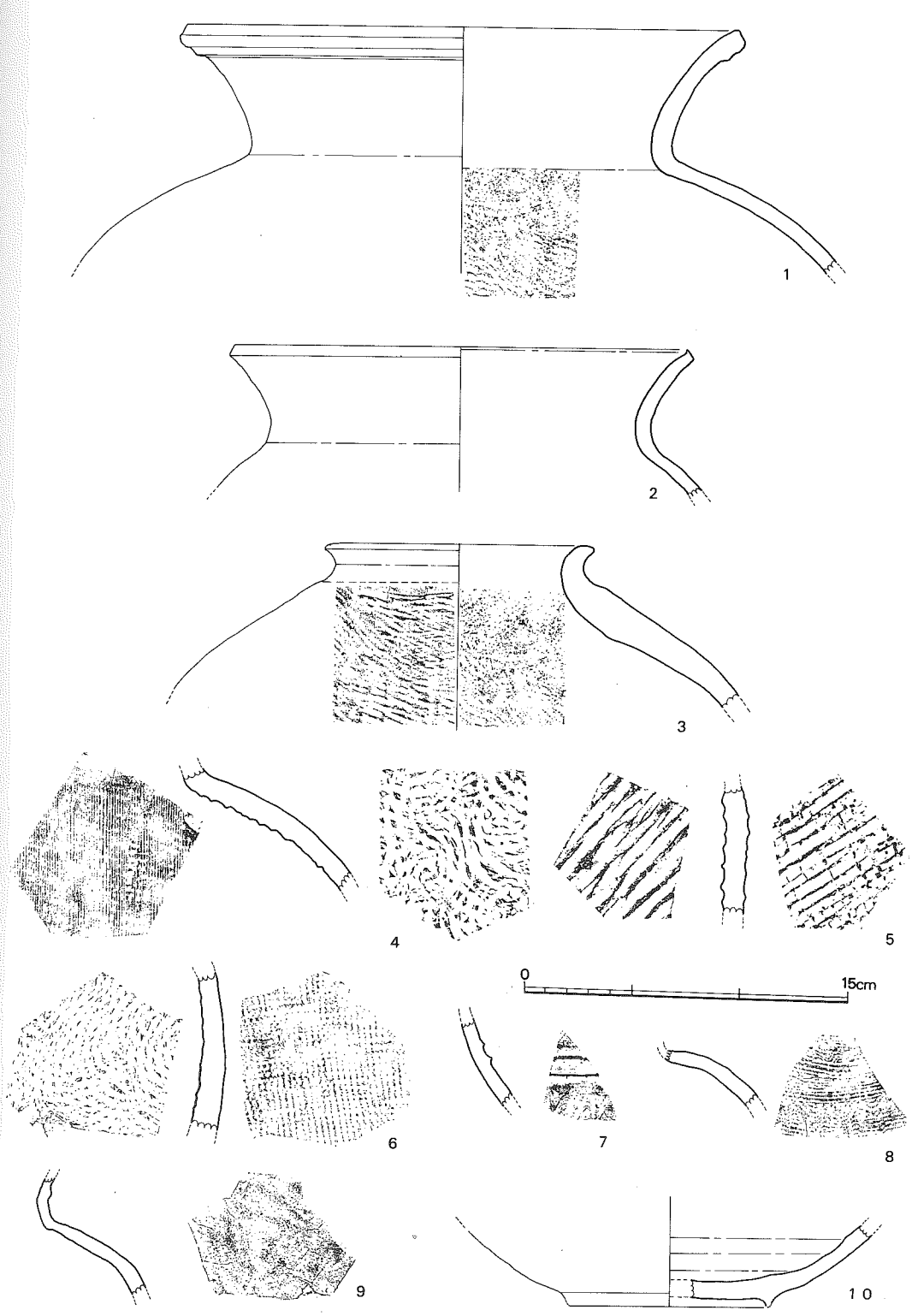
第35図
方柱状片刃石器実測図(2／3)

4．古墳時代の遺物

古墳時代の遺物が出土したのは、51水－01～05区の砂礫層中からと、表土を剥いだ直下からのものが多い。墳墓との関係については直接結びつくものはないが、彼杵川を挟んで上流500 m足らずの地点に三根古墳群と彼杵古墳群が位置し、円墳6基が点在する。また下流域には前方後円墳のひさご塚が位置し、本遺跡はその中間点にあたる。昭和30年頃に鉄道が建設され、その時に数基の古墳が破壊されたと語り継がれていることや、塚道という別称が残されていることからすると、墳墓との関係も無視できないものがある。

須恵器（第36図1～26）

1は中型の甕で、口縁部は長く伸び外反し端部外面には低い突帯を付し沈線を巡らしている。口縁から頸部にかけては内外面ともヨコナデが行われ、体部内面は同心円文が重複して残る。外面は格子状の叩きがかすかに残るが、その上を丁寧な横ナデで消されている。2は頸部がゆるくしまり、口縁は外反し、端部は斜行するが、内側にわずかに引き出されている。全体にヨコナデ痕が見られる。3は短頸の壺である。張り出した胴部に短い口縁が付き、端部は平坦気味に丸くおさめられる。体部内面は指による調整が行われ器面は荒れている。外面は全体に平行叩目文が見られ、その上に灰かぶりがある。器壁は厚く、熱が通っておらず茶褐色を呈する。4～6は甕胴部片。4は内面は同心円文で、外面は格子目の叩きの上を繊細なハケ目で縦にナデている。5は外面は彫りの深い格子目、内面は溝状の粗い叩き文様である。6は内面は同心円文、外面はきめの細かい格子目文の叩き文様である。7は甕の頸部と思われる小破片である。二条の突帯とその下に櫛目文が波状に描かれ、内外に灰かぶりが見られる。8は壺胴部で外面にハケ目が施され、その上に櫛目文が波状に2段に見られ、内面はヨコナデだけである。9は頸部から胴部にかけての破片である。頸部は細くしまり、胴部は張り出している。体部上半にヘラ記号が描かれているが、丁度の部分で割れている。内面は粘土を継ぎ足した部分で段がつき、ひび割れを生じている。10は壺底部で高台が付くが全体が割れている。体部は立ち上がりから外に大きく開いている。11～13は杯蓋である。11は天井部が凹むがつまみが付くと思われる。口縁は断面三角形に短くつまみ出され外反する。体部外面には灰かぶりが見られる。12は焼成が甘く軟質で灰白色である。天井部は11より若干高い。13は天井部がほぼ一直線、口縁部を区別するため、外面に段を内面に沈線を設け区別している。12・13ともつまみは付くと思われる。14は内に返しを有する杯蓋で口径12cm・高さ3.7cmで焼成甘い。口縁内側のかえしは小さく低い。天井部につまみを有するか不明。15は杯身で底部は平坦で口縁部は短くつまみ出され、返しが細く立ちあげる。胎土には白い砂粒が目立ち、焼成は良好。16は蓋杯である。天井部外面にはヘラ記号を持ち、体部は丸く、口縁部は直行しながらわずかに内反している。内面は口縁部分に浅い沈線が入る。17は基本的には16と変わらないが口縁部内面がやや外反するように



第36図　古墳時代の遺物実測図(1)(1／3)

なっている。外面には自然釉が多くかかり、段を有する。**14**〜**17**はⅣ期にあてはまる。**18**〜**24**は杯身である。**18**は底部が平坦でヘラ切り。体部は下半でふくらみながら立ち上がり、口縁部は薄く引き出されながらのびる。**19**は深い杯で、底部はヘラ切りで丸くなっている。口縁は真すぐ立ち上がり丸くおさめられている。**20**〜**24**は高台が付く。**20**の高台は貼り付けで断面四角形、底外面には同心円状のヘラ記号を有する。底部からの立ち上がり部は厚いが、口縁は外に開き気味に垂直にのびる。口径11.5cm、高さ3.2cm。**20**は高台貼り付け部が広く、丸みをおびている。口縁部も内湾しながら外に開いている。**22**は底部破片であるが、推定径は11cmと大きい。形態的には**20**と同じである。**23**は体部から口縁部にかけてＳ字状に開き、高台も八の字状になる。底部内面はヘラ削りで１段低くなり、器壁全体は薄い。**24**は底部片であるが、高台端部が八の字状に大きく外に開いている。

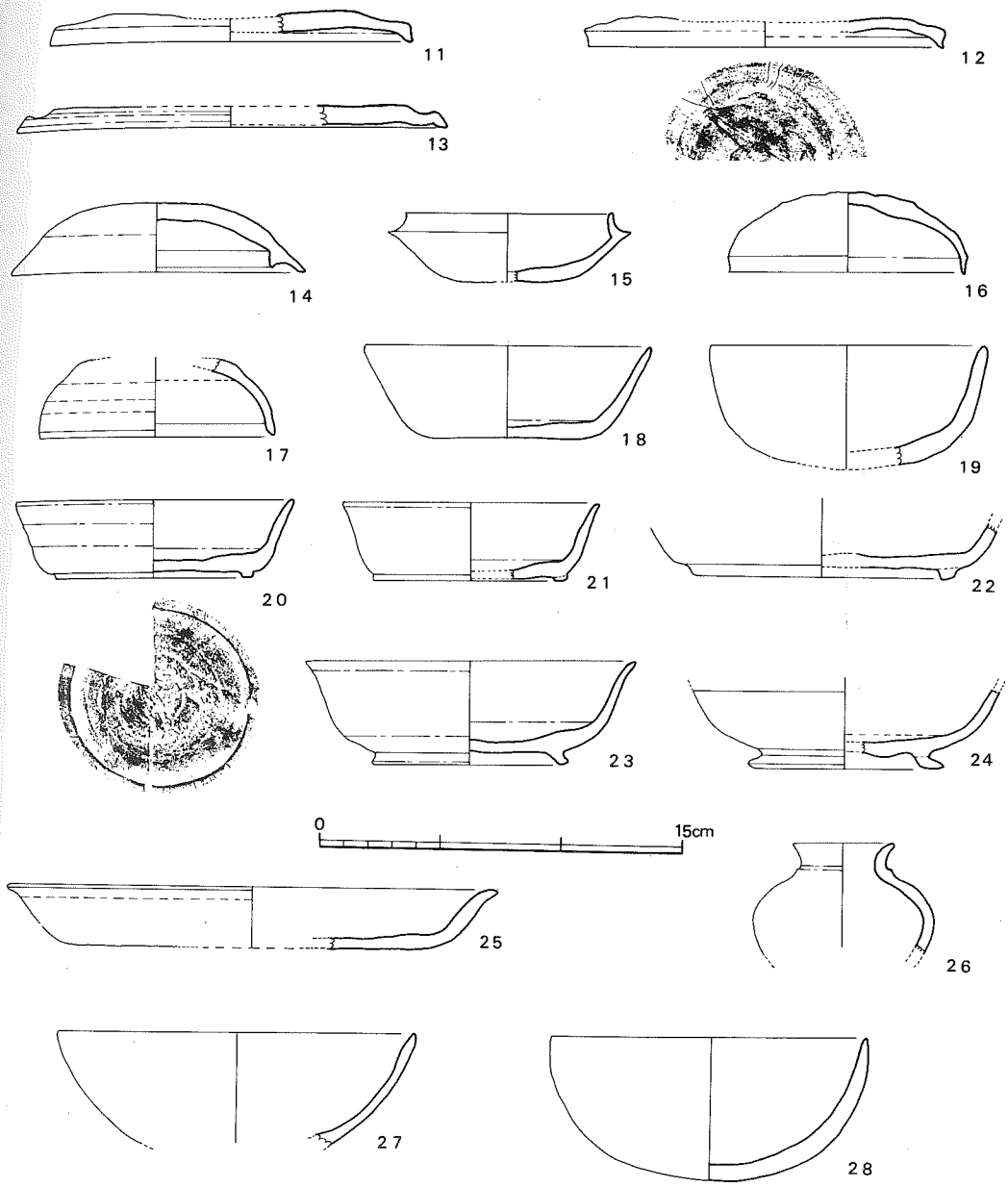
その他の須恵器（第37図25・26）

26は胴部から口縁部にかけての小形壺の破片で底部を欠失している。胴部は張りのある球形で、頸部はくびれ、ヘラ調整時の突起があり短い口縁部が外に開く。器壁は薄く焼成も良好。**25**は皿状になるもので、焼成甘く、表面は磨耗著しく灰白色を呈する。底部は平坦で口縁部は外に開く。推定口径20.3cm、高さ2.5cm。

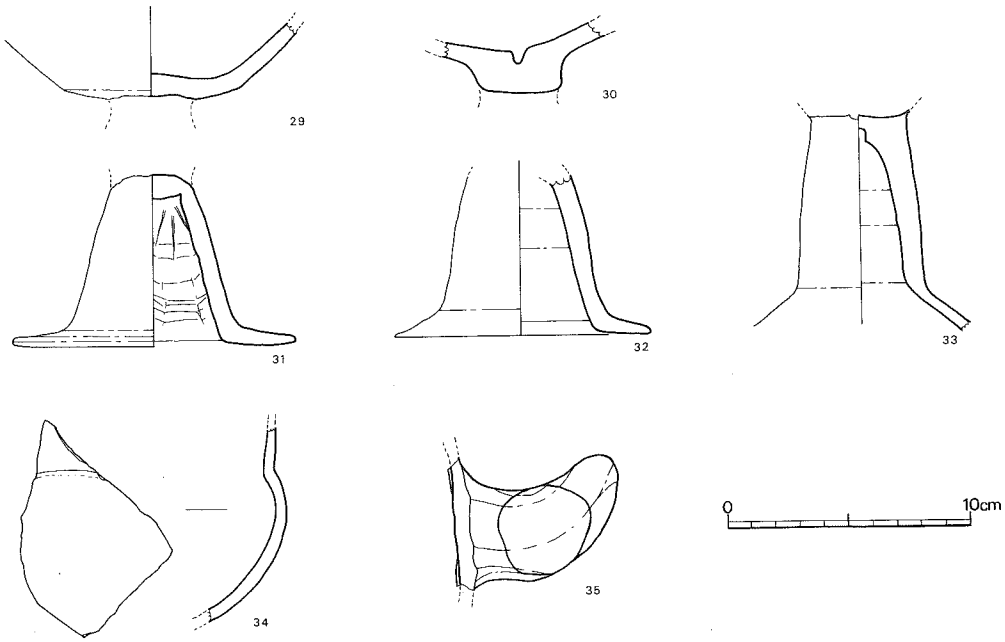
土師器（第37・38図27〜35）

27・**28**とも椀。**27**は小破片で、器壁はやや薄く、口縁部はやや内湾気味に尖る。**28**はほぼ完形で器壁は厚い。底部は丸底で半球形状に胴部が張る。口縁は内面が削られ尖る。**31**は脚台である。上部は粘土継ぎ目で杯部を欠失している。脚部は短く、外に広く開く。中央部に径１cm、深さ１cm余りの穴が付けられている胎土は、雲母粉末が混入されておりきめ細かい。古式土師器になるものである。**29**〜**33**は高杯である。**29**は杯の部分で、体部下半で屈曲し、外に開く。**31**・**32**は高杯の脚部にあたるもので、円柱状に開き、裾部は平坦で外に張り出す。脚部内面は、ヘラ削りが行われ、横に痕跡が残る。**33**は前者よりわずかに細かくあまり張らない。受け身の部分は粘土の継ぎ目で欠失しているが、脚部の裏から小さい穴が掘られている。裾部は内湾しながら開いているが、端部を欠く。外面には丹塗りの痕跡をとどめる。**34**は球形の胴部に外する口縁が付くいわゆる小形丸底の坩である。表面採集品で表面は磨耗を受けているが、内面はヘラ削り調整痕が観察される。**35**は甑把手。内面にはヘラ削りされた跡が残り、把手はあまり尖らず、下端が内湾し指による調整が行われている。

古墳時代の時期については古式土師器の段階から、終末期まで幅広く見られる。ひさご塚の年代が５世紀代、彼杵川古墳群出土須恵器の時期は６世紀後半の年代が与えられている。白井川遺跡については古式土師器を出土する５世紀の段階から、須恵器については**16**の杯身の７世紀



第37図　古墳時代の遺物実測図(2)(1／3)

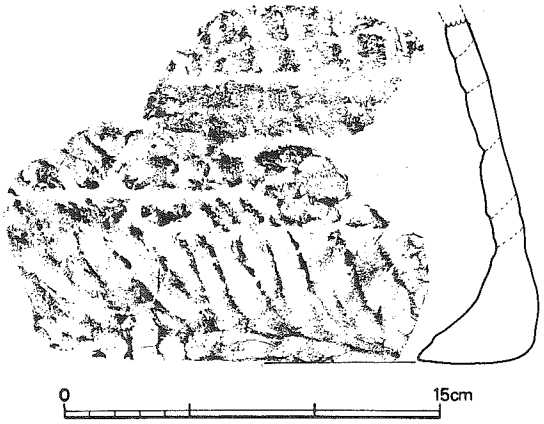


第38図　古墳時代の遺物実測図(3)(1／2)

前半が古く見られるだけで、他は総じて7世紀後半から8世紀に及ぶものが主流を占めるようである。

カマド（第39図）

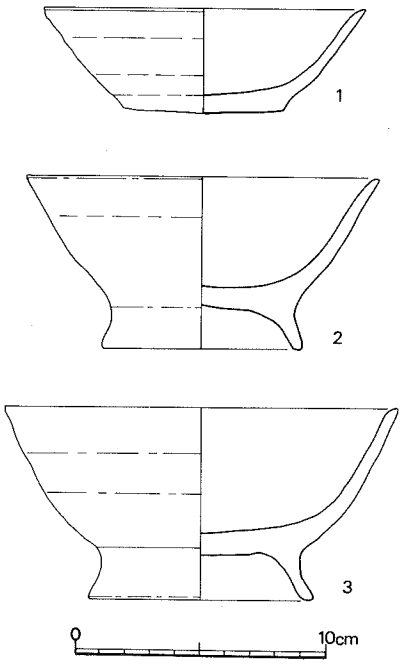
51号支線排水路計画変更による、51水－D区5層の斑黒色粘質土からの出土である。この層からは土師質の小破片が多く出土しており、古墳時代以降と考えられる。カマドは大きい破片1個だけで、他に接合される破片は見当らない。胎土には多くの滑石粉末を含み色調は暗褐色を呈し、堅くよくしまっている。外面は粗いハケ状の工具でナデられているが、あまり痕跡をとどめない。内面は底部に近い部分に指頭によると思われる太い凹文が縦に斜行して施されている。上部には2～2.5cm幅の粘土輪積みの痕跡がはっきりしている。底の部分は幅4～4.5cmで丸みをおび内側に引き出され尖るように整形されたり、貼り付けの部分が剝げたようになっているが、安定感はある。



第39図　カマド実測図(1／3)

51水－05区ピットの遺物（第40図１～３）

51水01～04区出土の遺物は先に述べた弥生時代から古墳時代にかけてのものがほとんどであり、しかも混在した状況で04区に至っては少量であった。そのため10ｍの間をおいて北側に５ｍの調査区を設定した。もともとこの調査坑は14号石棺が近くにあり、その関連性を見ようというものであったが、石棺は確認できなかった。下流が礫の多い層であったのに対して05区は４層と呼んだ黒褐色砂利層が堆積しており、遺物は小破片が若干であった。しかし径30cm×深さ30cmの先細になった掘り込みが見られ、中には炭化物が充填されていた。炭化物を掘っていくと、中から３点の土師質土器が一括出土した。出土の状況は**1**が口縁部を上にした状態で、**3**は**1**に接して横向きになり、**2**は下部の方から破片で出土した。ピットからの破片は全て持ち帰り復原したが、３個体の土器はいずれも口縁の一部を欠失している。



第40図　土師質椀実測図(1／3)

1は杯で、ロクロ成形が見られる。内外の器壁はヨコナデされているがわずかに磨耗している。底部はヘラ切りで、一旦切り離したあと、縁辺だけナデを行い、板目圧痕を付けている。体部はほぼ直線的に外に開き口縁端部は丸くおさめられている。口径12.5cm、底径6.7cm、高さ4.2cm。**2**は高台付椀。ロクロ成形のあとヘラ切りされ、高い高台を貼り付けている。高台はわずかに外反し、端部は面取りされている。体部の立ち上がり部はよくしまり、口縁までほぼ直線的である。口縁端部は丸くおさめられている。胎土には長石や角閃石を含み精選された土が使われている。高台部分にスス状のものが付着し色調は暗褐色、焼成は良好。口径14cm、底径８cm、高さ6.7cm。**3**は**2**よりひと回り大きく、端部が外に張り出した高い高台を貼り付けている。体部は下半で丸くふくらみ、口縁にかけて直線的で、端部は内面がやや外に開く感じで丸くおさめられている。底部内面は広く平坦にとられヘラ切り離し。胎土には長石や石英角閃石粒を多く含み、表面は磨耗している。外面は赤褐色を帯びている。焼成やや甘い。口径15.7cm、底径8.3cm、高さ７cm。

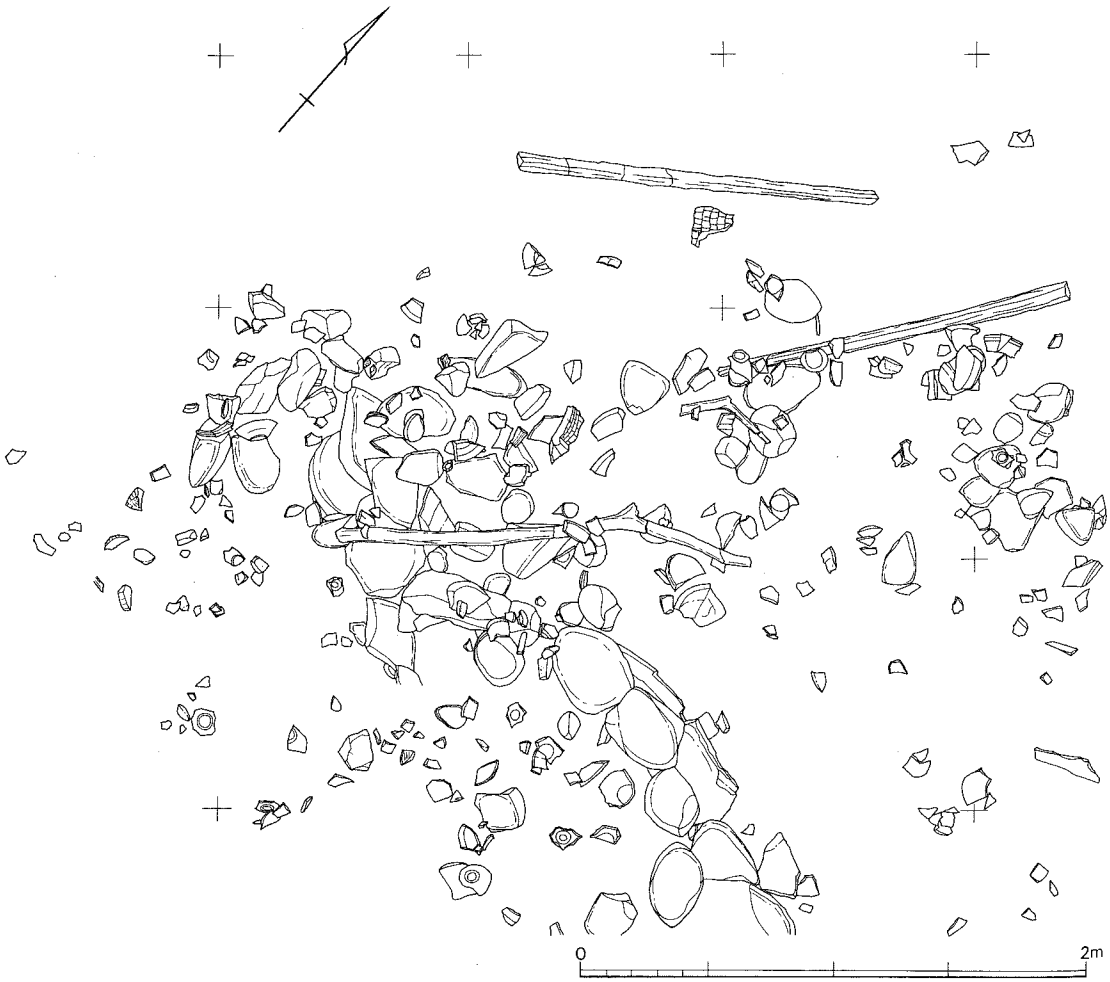
以上の３点の土師器はセット関係をなすもので、次の共通した特徴を備えている①高台付椀が高い外反した高台を付している。②回転ヘラ切り離し底が認められる。③口縁端部が直線的に外に開く。などである。時期的には県下における類例には接していないが、隣接する地域として佐賀県潮見遺跡や撰分遺跡[註10]から同様の土器が出土している。また太宰府史跡出土と比較すれば本資料は９世紀後半～10世紀前半に比定できるのではと考えられる。

中世の遺構・遺物

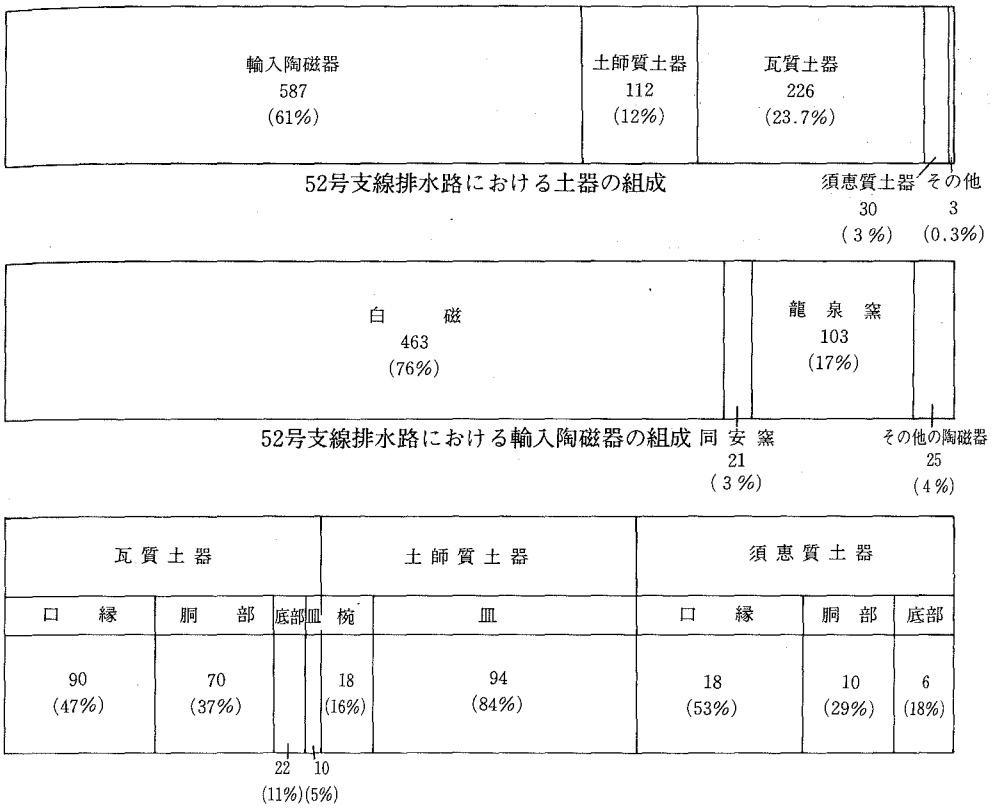
中世の遺物は調査区の全域から散見されるが、集中的に出土したのは52号支線排水路からである。ここでは50ｍの調査区を設定した。９～11区にかけて、中世だけの遺物の出土があり、なかでも、特に集中したのは11区である。

出土状況は、土層の項で述べたように黒褐色腐植土層である泥炭層が主体である。この調査区は、排水路に限られたため地形が把握できないが、西側から基盤層である砂礫層が落ち込んできており、東側から南側へかけて、傾斜が深まっていく様相が見られる。

出土遺物は、11区だけで1,000点を越すが、内容は輸入陶磁器、国内産の土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、及び石鍋、また泥炭層という状況から下駄、鋤先状などの木器類も出土した。



第41図　52水-11区遺物出土状況図(1／30)



第42図　52号支線排水路における出土土器の組成

土器類については第42図の如く組成を区別したが、総点数751点の中で、輸入陶磁器が50%を占め、瓦質が30%、土師質が11%となり、輸入陶磁器が国内産を上回っている現象が見られる。また輸入陶磁器については、白磁が76%を占め、次いで龍泉窯系17%、同安窯系が3%を占めている。

遺構については明確なものは見られないが、52水－11区では砂礫層から泥炭層に傾斜し、移行する部分に、大きな礫が集中し、人為的な様相が観察された。(第41図)。また東壁には泥炭層に打ち込まれた木製杭もあったが、それ以上の性格については不明である。

中国輸入陶磁器の分類については森田・横田氏の分類[註12]に従った。

白磁椀（第43図１～63）

Ⅱ類で破片が１点だけ確認された。口縁が内湾する浅い椀で器壁は薄くやや小ぶりな感じである。口縁はわずかに玉縁をつけ、浅い沈線で区切られている。胎土、釉とも灰白色を呈し、全体に貫入が見られる。

Ⅳ類（第43図２～32）

口縁にはやや厚味のある折返し断面三角形状の玉縁が付く。胎土には黒い細粒が入り、空気抜きのもみ込みが足りないため気孔が残るものが多い。釉の色調は灰色がかったものから黄灰色、さらに濃淡のあるものなど若干のばらつきが見られる。また外面には体部、下半部と底部には施釉されないが、釉は厚目にかけられ、内面の口縁直下まで垂下しているものが多い。

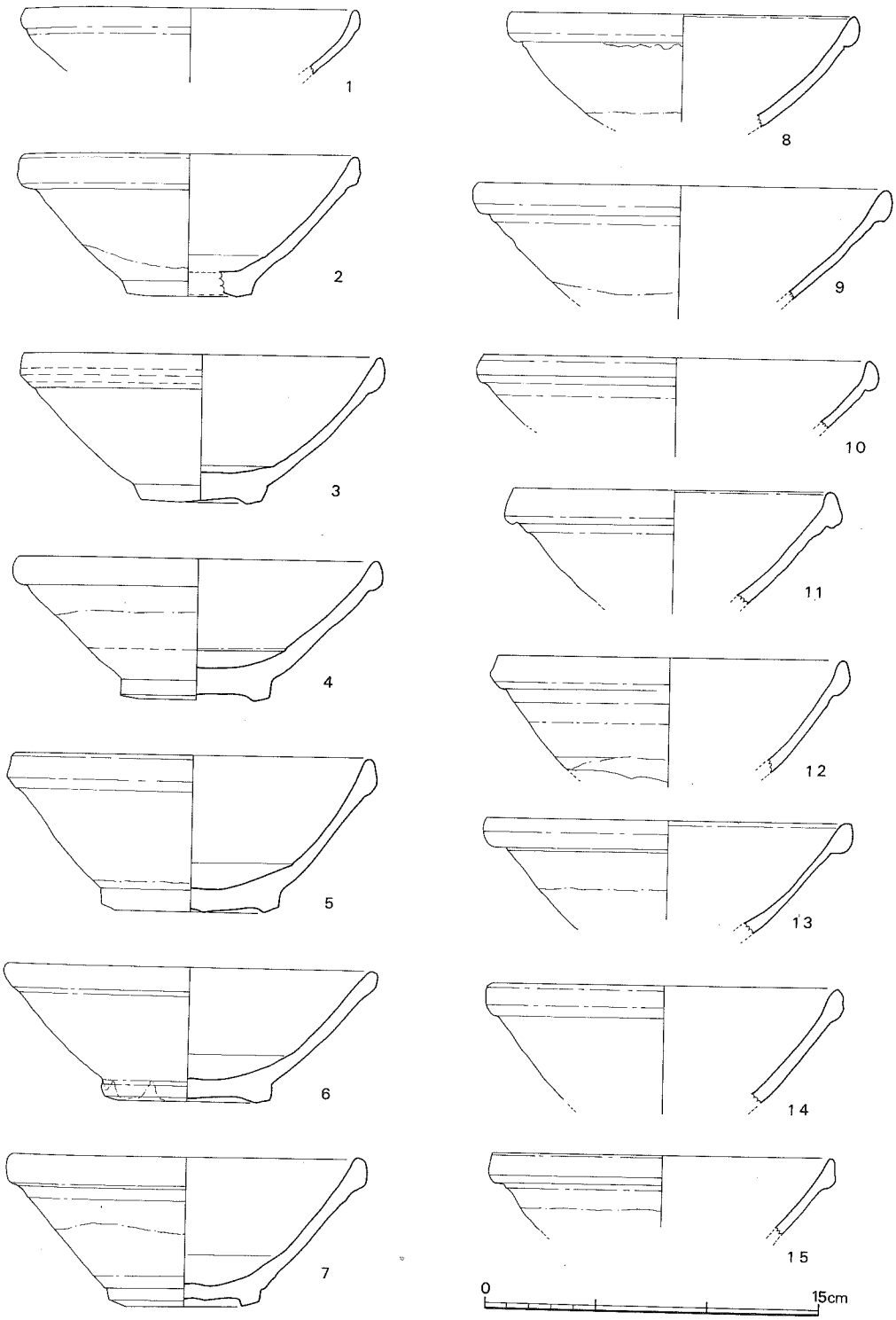
出土品のなかで完形になるものはないが、復原出来たものは**2**～**7**までである。**2**は見込に沈線状の段が入り、釉は外面の高台部にまでかけられて、口縁部内外に釉が垂下し貫入が全体に入る。高台は厚く、削り出しはわずかである。口径15cm、高さ6.2cmを計る。**3**は見込に沈線文と、その上に浅く凹んだ沈線が入り、気泡が多くガサガサしている。釉は明るい灰色で外面体部全体に貫入がある。高台部は浅く削り出され厚いが、中まで火が通っていない。口径15.7cm、高さ6.5cmを計る。**4**は灰色の釉が厚くかかるが体部上半部だけでとまる。見込には沈線文状の段が入り、高台はわずかに削り出される。口径16cm、高さ6.3cmを計る。**5**は体部外面下端まで灰白色の釉がかかるが、全体的に気泡が目立つ。見込には沈線文状の段が入り、高台はわずかに削り出され、中心部分がカキとられ凹んでいる。口径16cm、高さ７cmを計る。**6**は口縁はやや開き気味で、一部高台まで濃い黄灰色の釉がかかるが気泡が多くガサついた部分がある。高台部は面取りが施され、前者よりもわずかに斜めに深く削り出されている。口径16.3cm、高さ６cmを計る。Ⅳ類－２。**7**はやや厚ぼったい灰黄色の釉がかかる。外体面は上半部まで、見込には弱い沈線文が入る。高台はやや深く削り出されている。**8**～**14**は底部を欠失するが、Ⅳ類２と考えられる口縁が内湾するものをあげた。**8**と**13**は貫入が全体に入る。

15～**28**は体部上半が直線的に外開きになるものをあげた。**18**は体部下半まで残るが、外部上半は削り出され段がついている。**22**は内面の口縁直下に浅い沈線が巡る。釉は灰色で気泡が多く貫入がある。他に**19**、**21**、**26**、**28**に貫入が認められる。

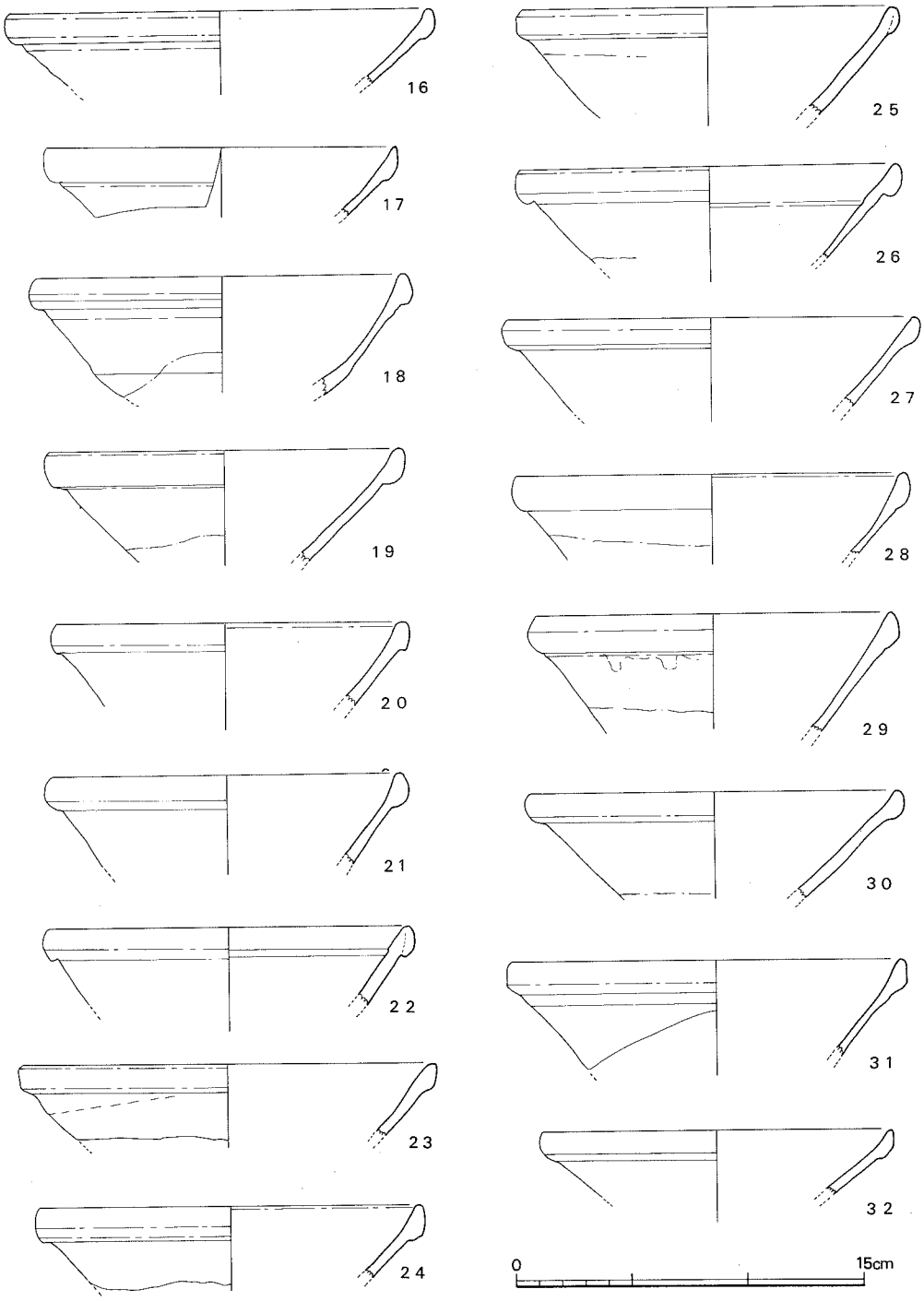
29～**32**はⅣ－４に相当する。体部上半がやや外反気味に開くものをあげた**29**は、灰白色を呈し貫入が全体認められる。断面に熱が通っていない部分が見られるが釉の乗りも悪く外面には気泡が多い。**32**は緑灰色を呈し、気泡が多く入る。外面の玉縁部分にはガサついたゆ着痕が認められる。

Ⅴ類（第45図33～57）

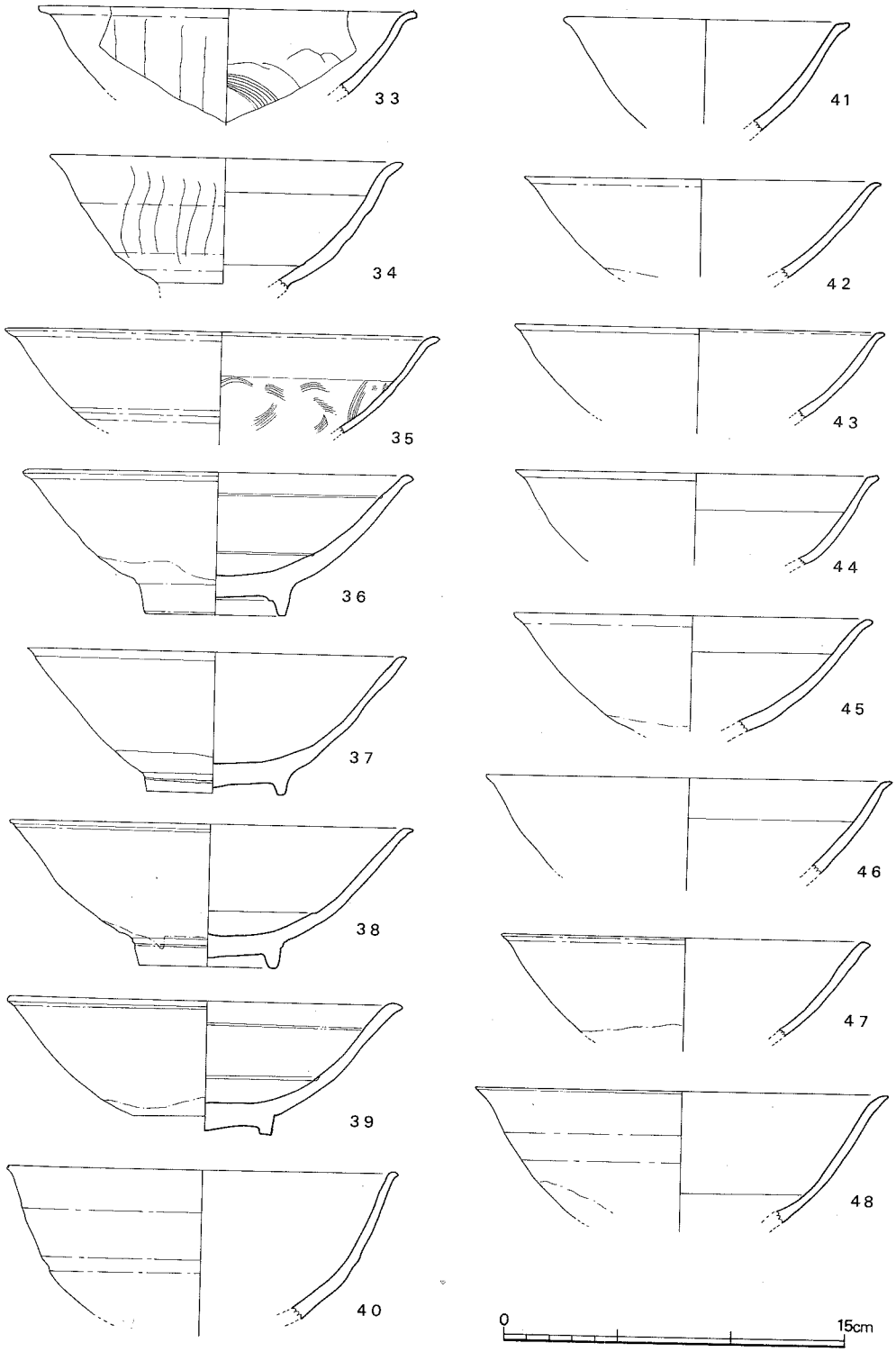
破片としての類はⅤ類が一番多い。器壁は比較的うすく、口縁は外反し平坦面はシャープに開く。外面に縦線文を有するものや櫛描文のあるものや、口縁内面と見込部に沈線を巡らすものがある。釉の色調は黄灰色や灰白色でⅣ類と基本的には変わらない。底部まで残るものが３



第43図　白磁椀実測図(1)(1／3)



第44図　白磁椀実測図(2)(1／3)

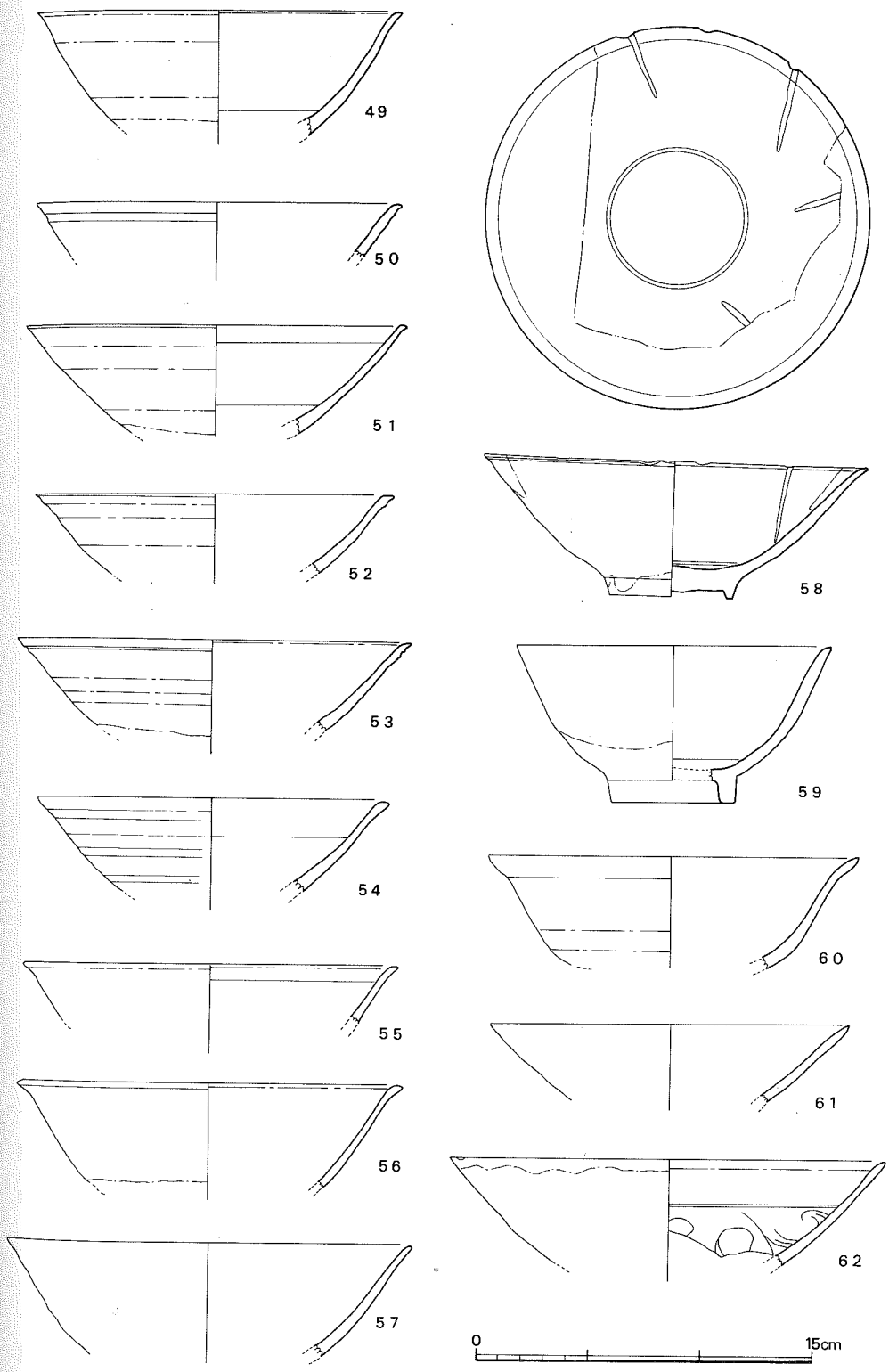


第45図　白磁椀実測図(3)(1／3)

点ほどあるが、高台は高く削り出されている。

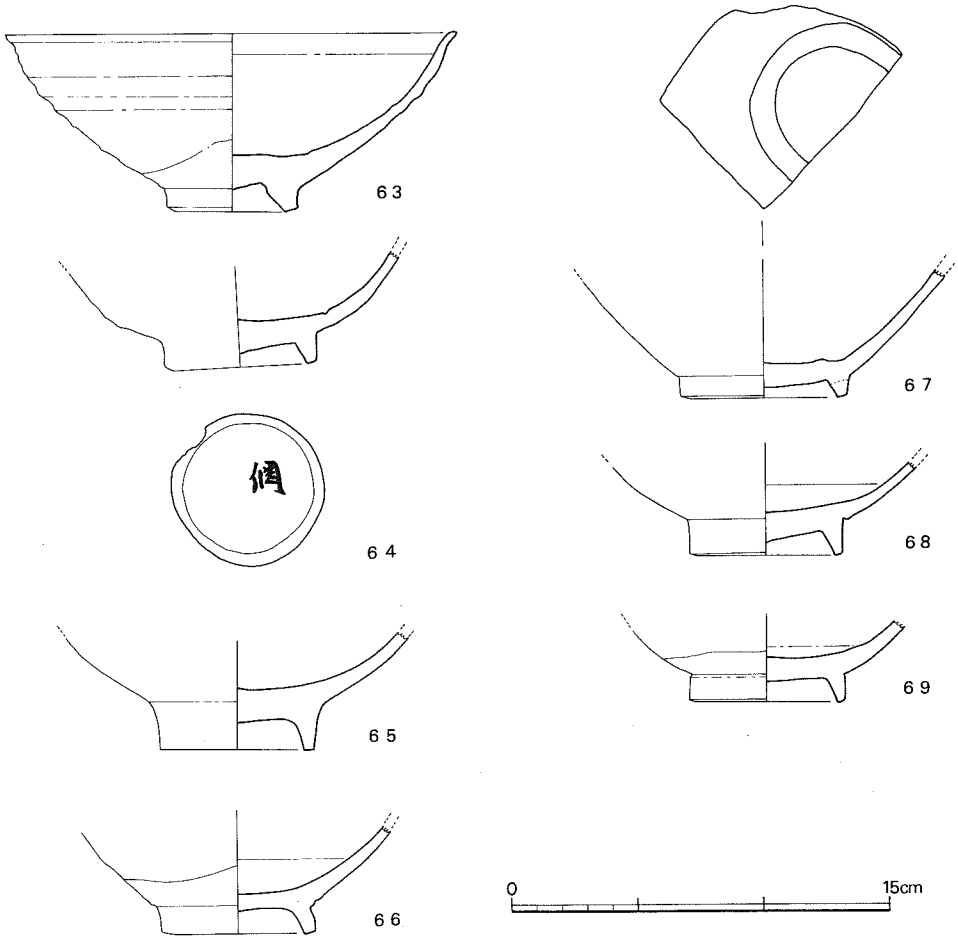
33は体部上半はゆるく内湾し口縁部が外に開く。釉はやや緑がかった灰白色で、内面に線刻と櫛で花文が描かれている。外面はヘラによる片彫が縦に施されている。34は釉は体下半部まで施され乳白色に近く、外面は気泡を生じている。口縁から胴部にかけゆるくカーブする縦線刻文が巡る。内面には口縁直下に細い沈線が、見込には沈線状の段を有している。35は、底部を欠くが器壁が非常にうすく仕上げられ灰白色の釉がかかり、口唇部には溜っている。外面は気泡が見られ、内面には櫛描文が施されている。36は完形に近く、底部を欠失する。釉は良好で黄灰色を呈し外面下半には施釉されない。内面には口縁直下にうすい沈線と見込に沈線状の段がつく。高台は細くシャープに削り出され、畳付には中央に円が描かれている。口径17cm、高さ6.3cm。37は口縁から底部にかけて残り復原したものである。釉は灰色で外面下半には施されていない。内面見込には沈線が段状に巡るが、その中には砂状の付着がありザラついている。高台は高く削り出されている。38、釉は灰色で気泡が目立つ。外面は削り痕が明瞭に残り、下半部に釉は施されていない。高台は斜めに削り出されてやや低い。口径17.8cm、高さ6.8cmを計る。39は発掘調査の端緒になったもので、ユンボによる掘削坑でバラバラに発見され、接合の結果完形になった。釉は黄灰色で高台部分まで施され、見込には沈線が入る。器形はいびつで、空気出しの至らない部分がありひび割れている。高台は深く削られるが端部が割れ欠失している。口径17cm、高さ6cm。40～49は底部を欠失しているため器高を知り得ない。V－3類に相当するもので、釉の状況から器形までほぼ同じ状況である。口縁直下に沈線の入るものは44、45、46、51貫入の認められるもの42、44、46、47である。

50～56は口縁がヘラ切りで平坦にされ、殆ど外反しないで、胴部に直線的に至るものである。58はⅦ類で口縁が外反し、口唇部には凹みを施し、輪花にしている。器内は白堆線で体を六区分している。色調は濁った灰色、見込には沈線が巡る。外面は高台部まで釉がかかり全体に貫入がある。高台の削りはあまり深くない。口径16.8cm、器高6.2cmを計る。59は口径14cmと小ぶりの割には器高が7cmと深い。胎土はやや粗く、釉ののりも悪く気泡が多くザラつき、外面上半部まで施してある。口縁はわずかに外反するだけでほぼ直線的におさめられている。見込は段状の沈線が目立つ。高台は深く削り出されている。60は頸部から外反し、胴部はふくらむ。61は口唇部にわずかな凹みがみられるが、輪花かどうかはっきりしない。器形は直線的に外開きになる。62は口唇部にわずかな凹みを有し、輪花になる。器内には線刻による花文が施されている。全体に貫入が認められ釉は灰色を呈する。復原口径は19.2cmを計る。58、62はⅦ類。63はⅧ類である。内底見込の釉を輪状にカキ取っている。色調はベージュを呈し、貫入が部分的に見られる。口縁部は若干くびれて外反する。外面はヘラ削りの段が明瞭で、中央に沈線が巡る。高台径は5.2cmと小さく、半分が斜めに階段状に深く削り出されている。口径17.8cm、高さ7.2cmを計る。64～69はV類からⅦ類の椀底部である。64は釉はやや緑がかった明るい灰色で青白磁か。内面見込には沈線状の段がつく。外面は高台にも一部釉がかかり、底部には「倜」名の墨書



第46図　白磁椀実測図(4)(1／3)

がある。おそらく綱を略したものであろうが、墨書名の土器はこの１点だけである。**67**は内底見込の釉が輪状にカキ取られている。高台の削り出しは低くⅧ類である。

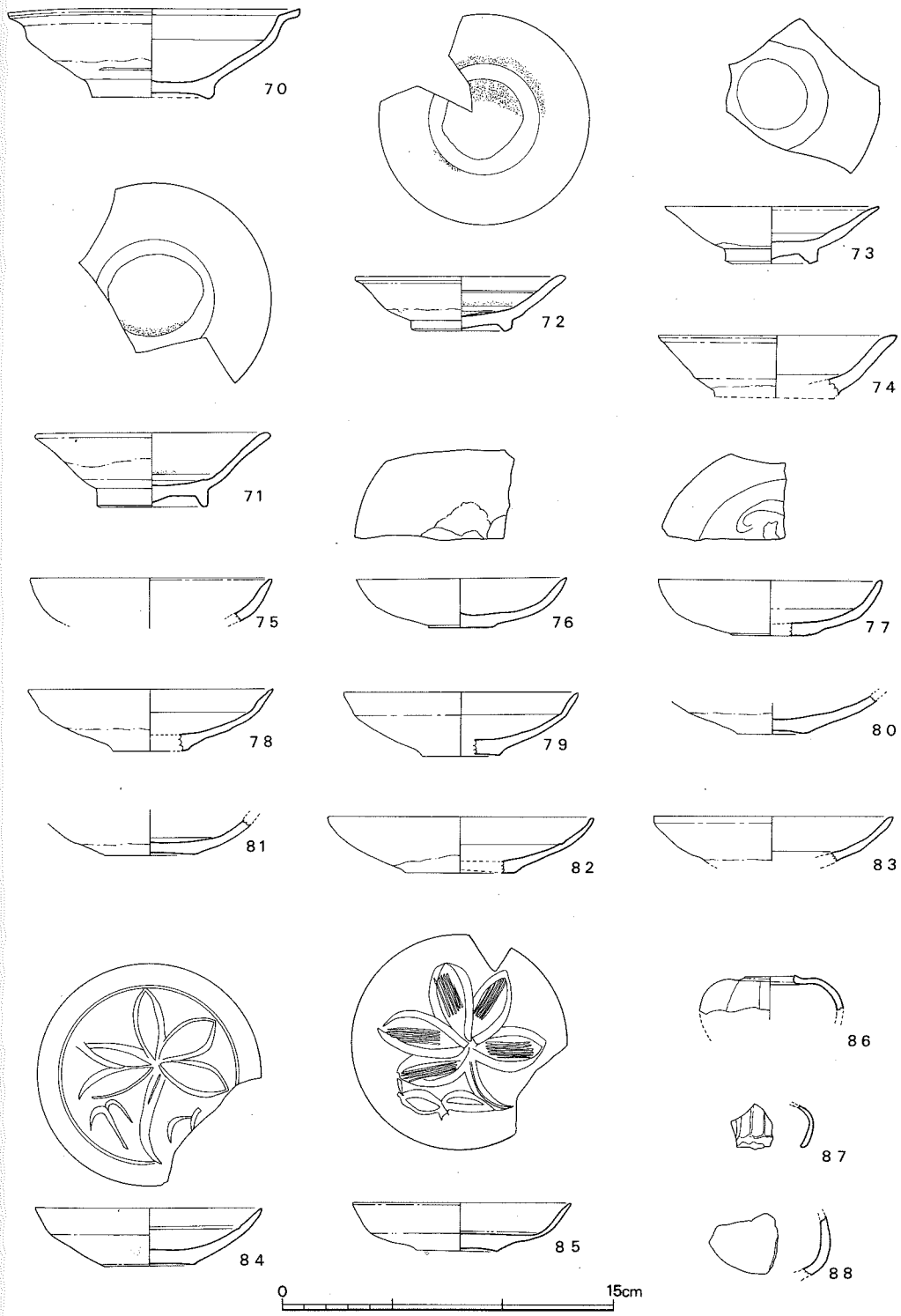


第47図　白磁椀実測図(5)(1／3)

白磁皿（第48図70～85）

皿は高台付のものと高台をもたないものに分けられ、量の上では後者の方が多い。

70は高台付皿で肩が張り、口縁はさらに外に開く。内面は肩のところに沈線状の段がつき、口縁の折れ曲った部分にも稜線が明瞭に付く。釉は灰色で外体下半部には施されない。口径13.2cm高さ４cmを計る。**71**～**73**はⅢ類。見込の部分を輪状にカキ取っている。**71**は灰色をおびた白濁の釉が厚くかかり、貫入が全体に入る。見込には重ね焼の跡が残る。高台は深く削られ、釉は体面下半部にはかからない。口径10.6cm、器高3.4cmを計る。**72**は釉は灰色で微細な黒い粒子を全体に含み厚くかかる。見込は重ね焼きの際の草灰痕が残る。高台は深く削られている。口径9.5cm、高さ2.5cmを計る。**73**も前者とほぼ同様である。口径9.6cm高さ2.8cmを計る。**75**～



第48図　白磁皿実測図(6)(3／3)

83はⅥ類。75は底部を欠失するが、口縁は丸く内湾し、釉は灰色を呈する。76は平底から内湾気味に立ち上り、内面見込には草花文と思われる線刻がわずかに残る。底部外面には重ね焼痕が残る。77は体部内面の折曲部に沈線が入り、見込には草花文と思われる線刻が施されている。釉は濁った灰色で濃い。底部には重ね焼の砂目が残る。78～83は底部がわずかにあげ底になり、体部は開き肩のところで屈曲し、内面には沈線が段状に巡る。78、79は口縁が外反しながら尖っている。82、83は口縁がやや内湾しながら丸くおさめられている。釉は体部下半にはかからない。84は黄味をおびた白濁の釉がかかり、貫入が全体に入る。体部内面上位で屈曲し、沈線が巡り、内側にはヘラ描きによる草花文が描かれている。外底部は釉がカキとられているためわずかに凹んでいる。口径10.3cm、高さ2.2cmを計る。

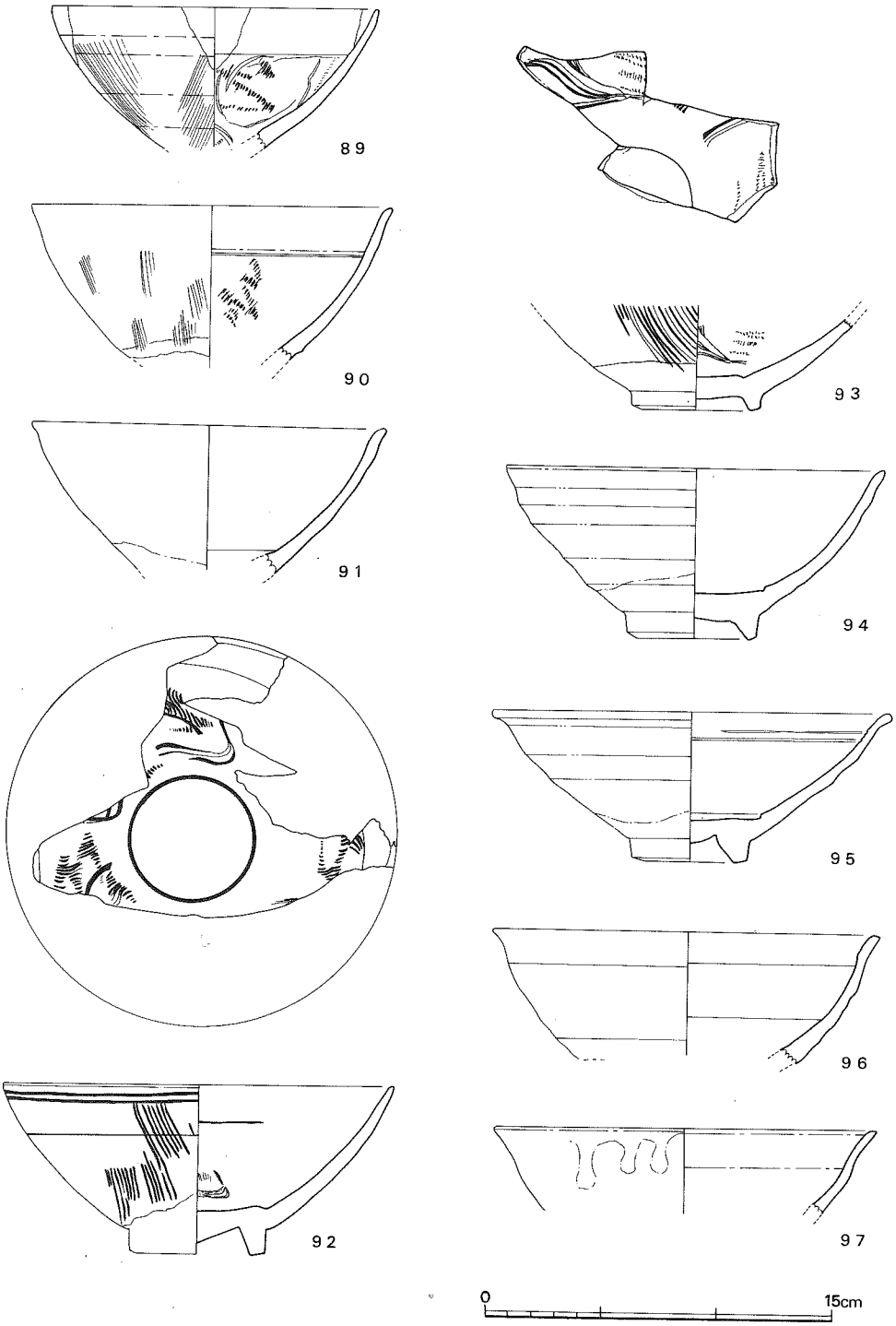
85は黄灰色の釉がかかる。体部外面は、底部から上部に張り出し中程で屈曲し、口縁は外に開き気味になるが、内部は屈曲部から平坦になり底部に移行する。この見込にはヘラ描きで草花文が描かれ、５つの花弁には５～６条の櫛目が入る。外底部は施釉後カキ取られており、中心に細い二重の不整円が見える。窯印であろうか。口径9.8cm、高さ2.2cmを計る。

その他の製品（第48図86～88）

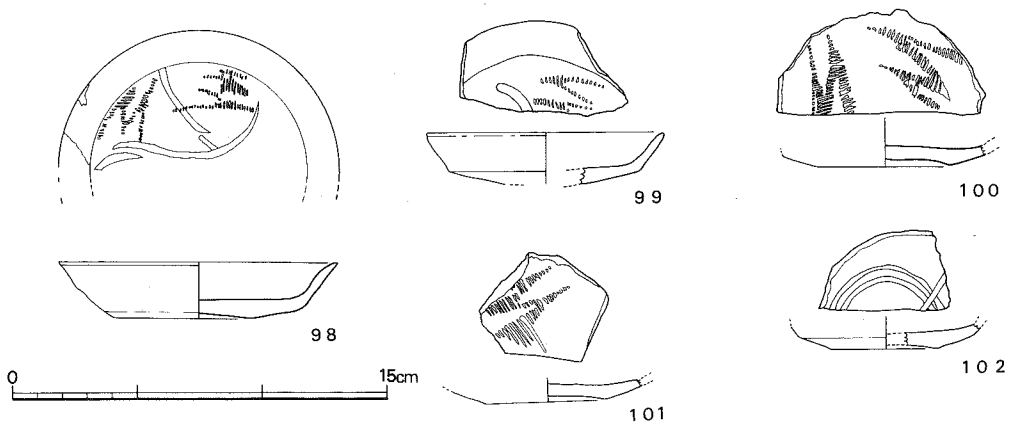
合子や小形壺などの製品はわずかである。86は瓜型の小型壺で青白磁である。肩の部分に線刻を巡らし、胴部には縦に区画線を入れるが、線は緑色を呈している。体内面には釉はかけていない。87は合子蓋破片で釉は透明がかり、溜った部分は緑色をおびる。体内部には施釉していない。88は白磁胴部破片である。内外面に釉がかかっているところから口縁が開くものか、形態は不明。全体に貫入が認められる。

同安窯系青磁（第49・50図89～102）

白磁に較べると量的には少ない。椀と皿に分けられる。椀の外面下半部には釉はかからず胎は灰色が多い。89から93はⅠ類椀である。89は口径14cmとやや小ぶりの椀である。釉色は黄緑味のあるガラス質の釉がかかる。底部を欠失するが、体部は内湾気味に立ち上がる。外面は削り痕が明瞭で稜線が残り、櫛目文が放射状に縦に描かれている。内面の口縁直下には線刻が巡り見込は沈線を入れるが、ここに段を有する。見込と上部沈線の間にはW状の櫛目文と沈線曲文が交錯する。90はやや内湾気味に立ち上った胴部の口縁が若干開くか外面はわずかにくびれる。胴部には櫛目文が不整形に描かれる。内面は口縁下に沈線を巡らし胴部にはW状の櫛目文だけが描かれている。釉は厚くかけられ、緑がかったガラス質で光沢が強い。91は90とほぼ同様の形であるが文様をもたない。92は内湾しながら口縁部は丸くおさめられ、その直下に細い線刻が巡る。内面見込は沈線が明瞭に残り、胴部には細かい櫛目文が見られる。外面はやや粗い櫛目が斜行する。釉は黄灰色でうすくかかっている。高台は粗く削り出され中央が尖がる。口径16.6cm、高さ7.3cmを計る。93は底部と胴部が部分的に残る破片である。内外面に粗い櫛目文が描かれ、釉色は緑黄に近い。94は無文のほぼ完形品。釉は灰黄色で内面見込に沈線状の段



第49図　同安窯系青磁(1)(1／3)



第50図　同安窯系青磁皿(2)(1／3)

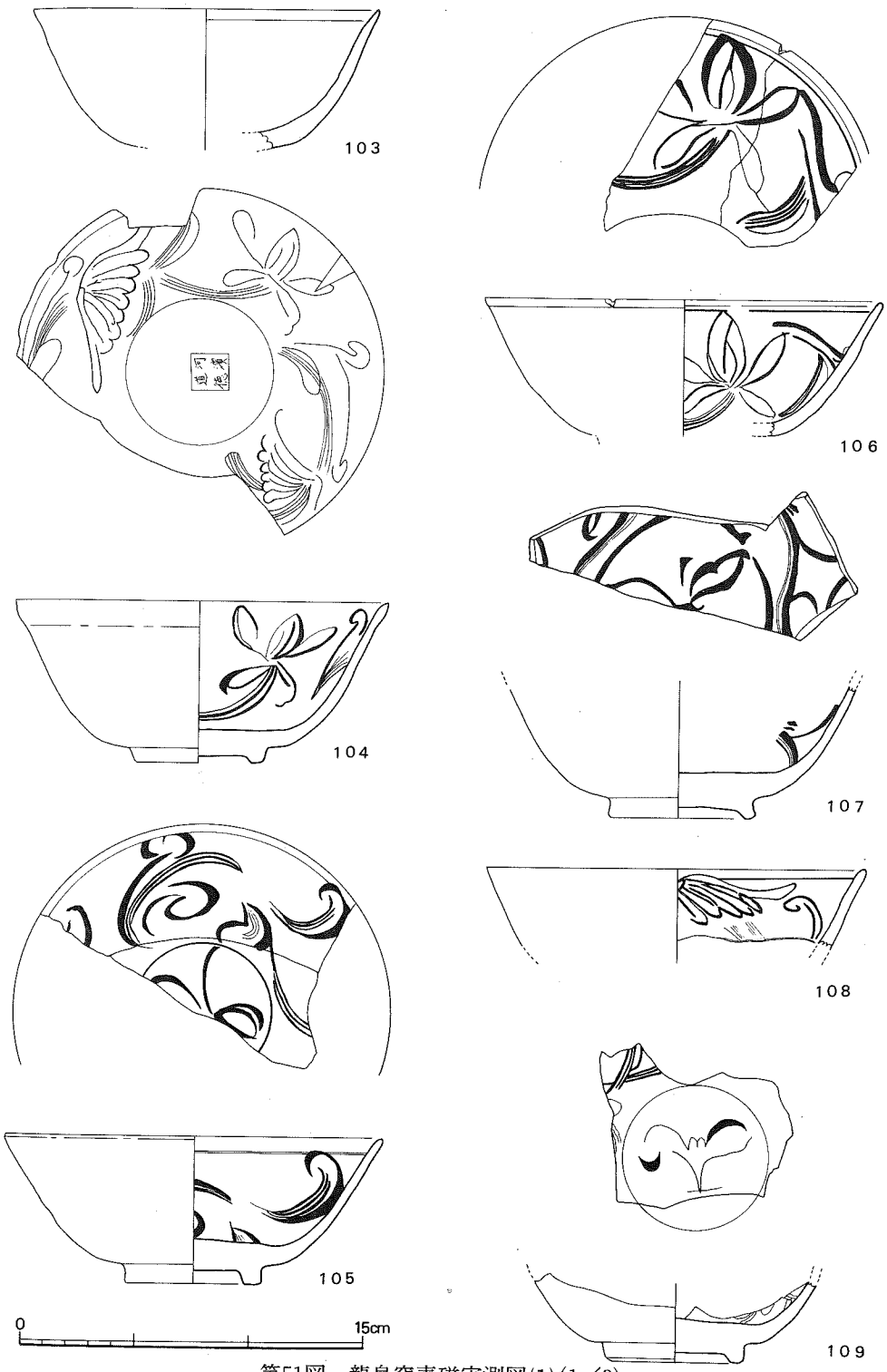
がつく。高台は面取りが行われ粗く削り出されている。口径16.3cm、高さ7cm。**95**は体部上半から口縁にかけて外反する。内面には口縁直下に明瞭な沈線が巡り、見込は一段低くなり、ひび割を生じている。胎は粗く釉色はベージュに近い。高台は径5.5cmで小さく、斜めに粗く削り出されている。釉は体部下半にはかからない。この器は白磁系のものかも知れない。口径17.5cm、高さ6.5cmを計る。**96**、**97**は胴部が丸味をもっているが底部を欠失している。**96**は釉は濁った灰緑色、**97**は灰黄色だが、釉溜りは緑色が強い。

皿（第50図98～102）

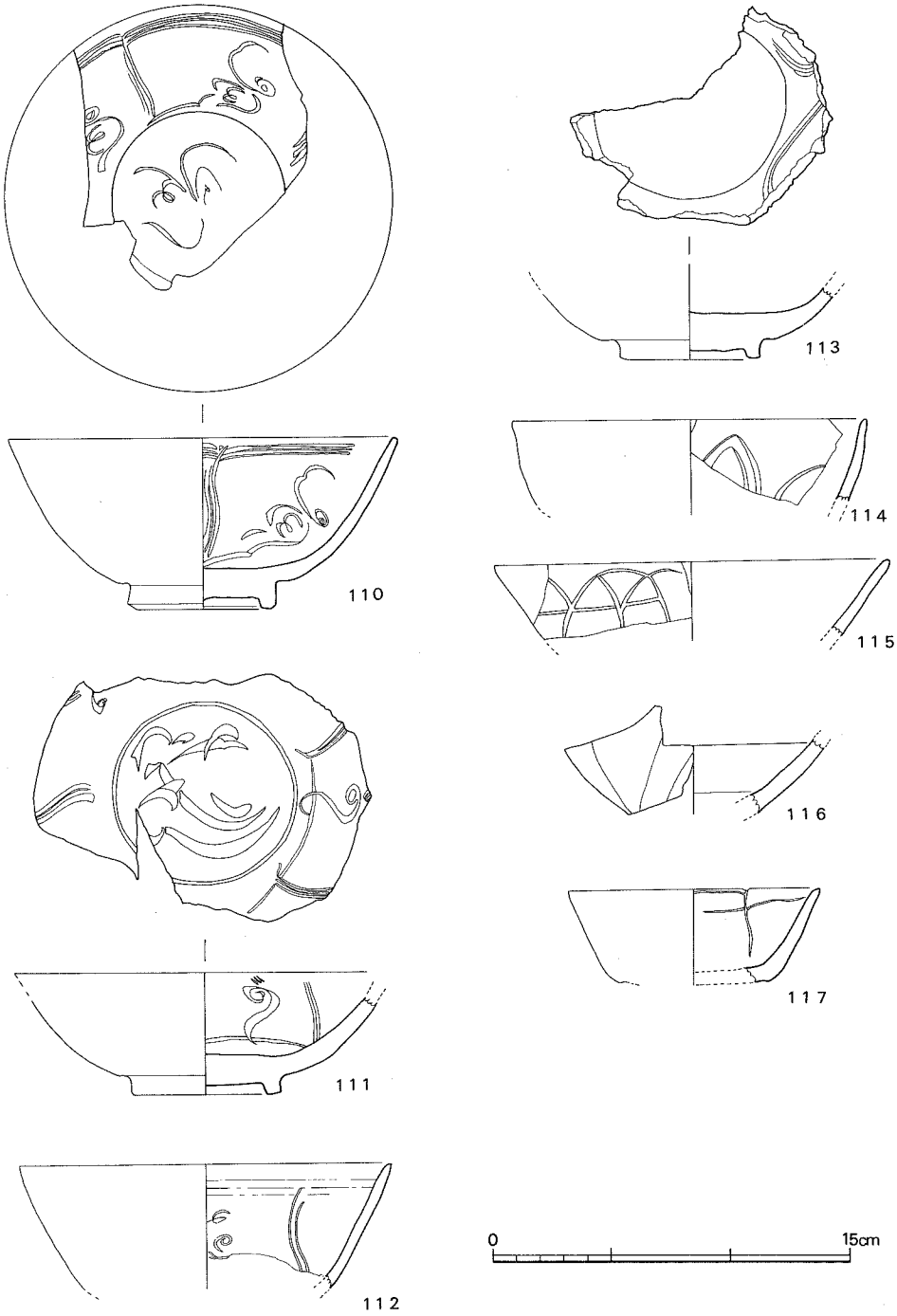
98の底は釉がカキとられわずかにあがり、体部中程から短かく外に開く。内面底はほぼ平坦でW状のジグザグ文とヘラによる曲線が描かれている。釉色は緑がかり、外面はわずかに貫入が見られる。**99**は**98**と文様形態は同様だが釉が厚く緑色が強い。全体に貫入が入る。**102**は体部下半は釉がかかっていない。内底には草花文と思われるものが描かれている。皿は全面施釉のうち外底がカキとられるものと、下半部に施釉しないものに分けられる。

龍泉窯系青磁（第51・52図103～117）

調査によって得られたものは、ほとんど椀のⅠ類とⅡ類に限られる。**103**は底部を欠失する。胎は灰色で、厚味をもつ。釉は光沢のない緑灰色である。内面口縁直下にかすかな一条の線刻と縦に櫛目状の沈線が見られ、Ⅰ類として捉えられる。**103**は内面一杯に双蓮華単葉劃花文が描かれている。見込には「河濱道徳」のスタンプが押してある。外面は無文で底部は厚く高台は浅く削り出されている。釉は暗い灰緑色を呈する。口径16.5cm、高さ7cmを計る。**104**は内面、口縁直下に線刻が巡り、胴部には草花文が、見込には花弁が片彫で描かれている。外面は無文で釉は緑黄色がかり、高台部までかかる。口径16.5cm、高さ6.5cmを測る。**106**は**104**と



第51図　龍泉窯青磁実測図(1)(1／3)

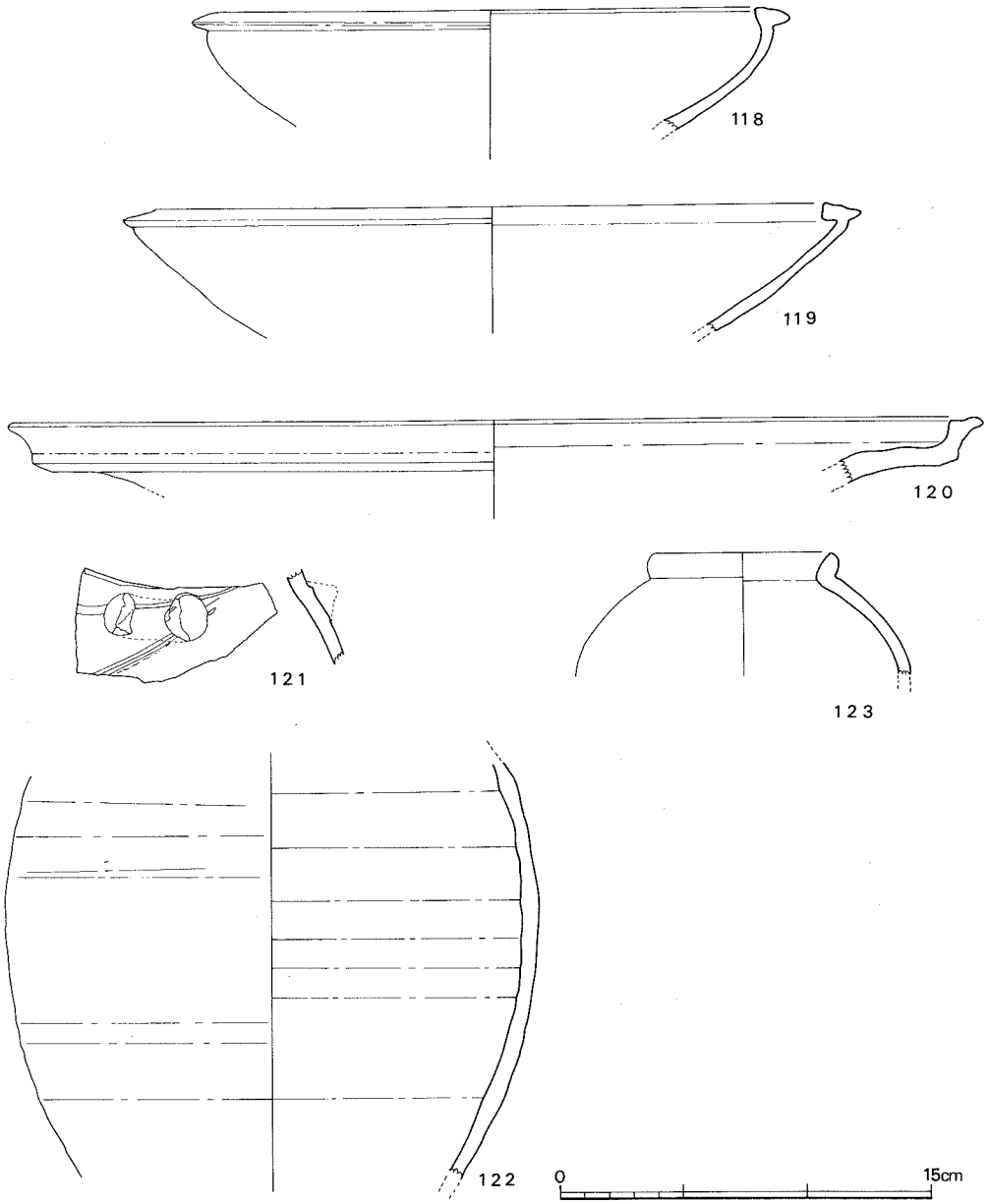


第52図　龍泉窯青磁実測図(2)(1／3)

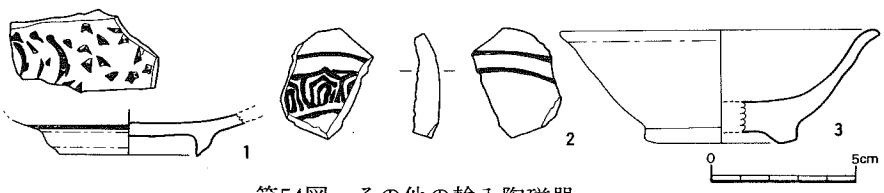
同じ文様構成と思われるが、貫入が見られ暗緑灰色で釉は厚い。107は底部から胴部にかけてかけての破片。胴部に草花文、見込に花弁が片彫されている。釉は飴色で発色がよく貫入が全体に見られる。108は104と同様で109は107と同様の文様構成になる。高台は面取りがされ削り出しが浅い。110～112は六輪花雲文劃花文である。110が一番完形に近い。釉は緑灰色で全体に貫入がある。見込は沈線が段状になり、内側に文様が描かれている。高台は幅があり安定している。削り出しは浅い。口径16.2cm、高さ7.2cmを計る。113は底部だけの破片である。わずかに曲線文が残る。釉は厚くかけられ、緑色でガラス質に富み、大きな貫入が生じている。高台内面まで釉が流れている。114は小破片である。鎬蓮弁文が内面に施され、釉は飴色で貫入が見られる。115は外面に鎬蓮弁文が施されるが蓮弁の重なっている部分に沈線が巡る。釉は濁った緑色で白っぽく光沢がない。116は胴部下半部で鎬蓮弁文の下部が見られる。釉は厚くかけられ灰緑色で、大きな貫入が見られる。117は小ぶりの椀である。灰緑色の釉が厚くかかる。口唇にはわずかな刻目が入れられ横と縦に線刻が施される。輪花劃花文であろう。

陶器（第53図118～123）

出土した陶器は量的には限られている。118は平鉢で下半から丸味をおびた胴部が肩の部分で内に屈曲し、口縁部は外に折り返され尖る。胎土は明るいベージュで、黒褐色粒子が目立つ。内面は黄褐色。外面は白っぽい膜状のものがうすくかかり、緑色の砂状のものも部分的に見られる。口唇は重ね焼のあとが残り、外側は緑色の自然釉状のものがかかる。119は前者よりひと回り大きな褐釉の平鉢である。胴部はほぼ真すぐに外に開き、口縁は内側に折れ曲る。口唇は平坦で外に尖る、いわゆる鋤先状を呈する。胎は灰色で黒い粒子が若干混る。釉には濃淡があり、暗緑色から濁った褐色である。120は盤か鉢になるのかその実態がよくつかめない。胎土は灰色で粗くセメント質で硬い。口縁は平坦で段をもち二重口縁状になる。頸部は内側に大きくしまるようであるが、これから下半部を欠失する。外面はこげ茶色で、焼きしめたようになり、わずかに格子目のタタキではないかと思われるものが残る。内面は灰色で、表面は白っぽくザラついている。推定口径は約39cmを計る。121・122は黄褐釉の四耳壺の同一個体である。121は耳の部分が折れ、ヘラによる沈線が直線的につけられている。122は胴部で、内部にはロクロ成形時の段が明瞭に残る。胎土は灰色で粒子が多く見られる。釉は緑黄色で内面は無数の黒点が混る。



第53図　陶器実測図(1／3)



第54図　その他の輸入陶磁器

その他の輸入陶磁器（第54図１～３）

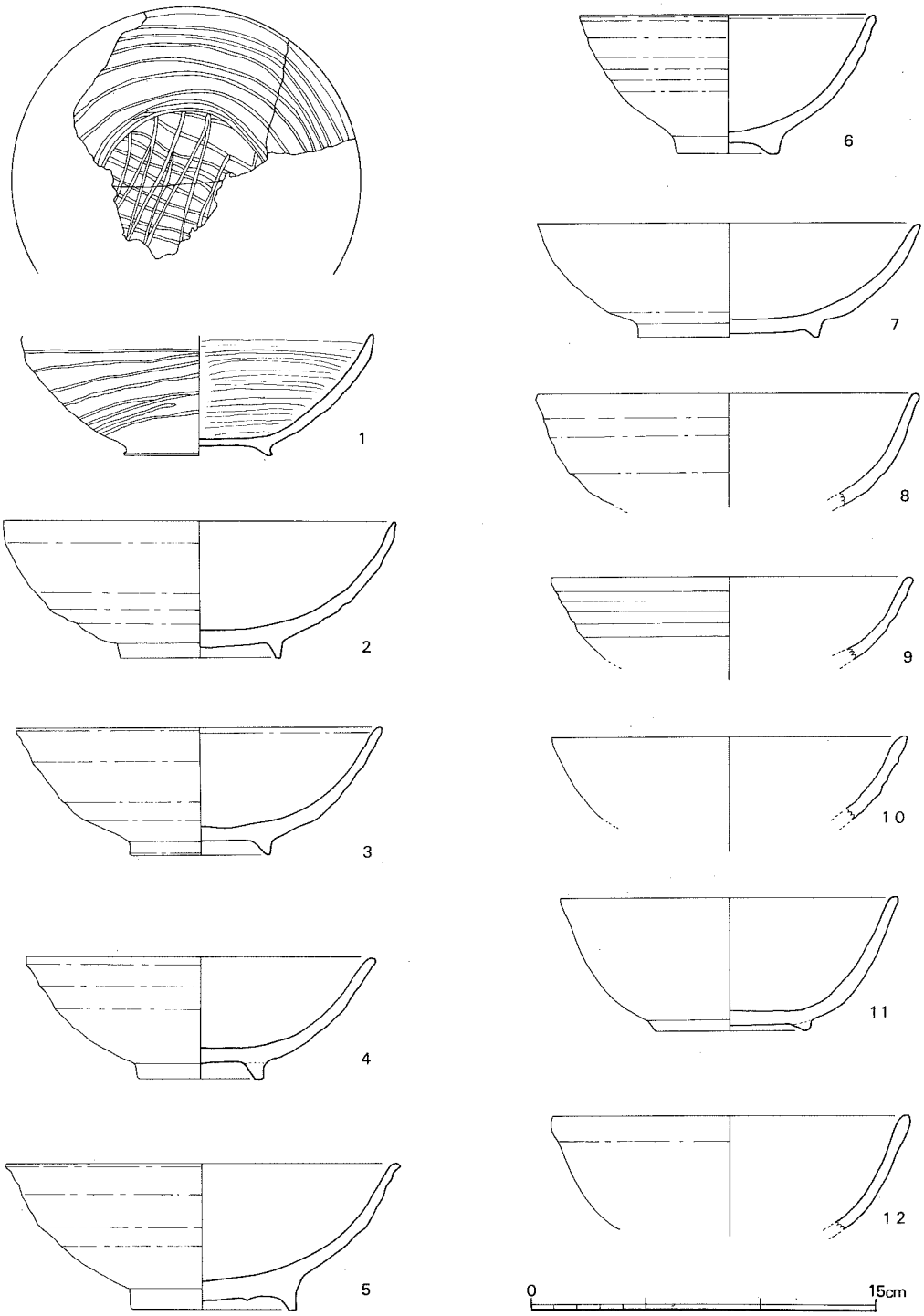
１は小破片の明染付皿底部である。内傾した端部の尖った高台が付き、釉がカキ取られている。内面には三角文の崩れた文様と短曲線文が描かれている。外面の立ち上がり部には、圏線が１本巡り、全体に淡い釉がかけられている。

２は朝鮮産粉青沙器で、内側に三重の圏線を施し、その間に剣頭文をスタンプして白象嵌している。外面は二重の圏線を施し、白象嵌を行い、全体に緑黄色の釉をかけている。３は小ぶりの椀で半分を欠失している。胎土は粗く灰色で、空気がよく抜かれていない。淡い緑釉が内外の全体にかかるが、高台の端部は、重ね焼のためか砂目が付き、内面見込も同様である。緑釉は全体にかかっているものの、灰色の付着物があり、白土がかけられたようになっている。

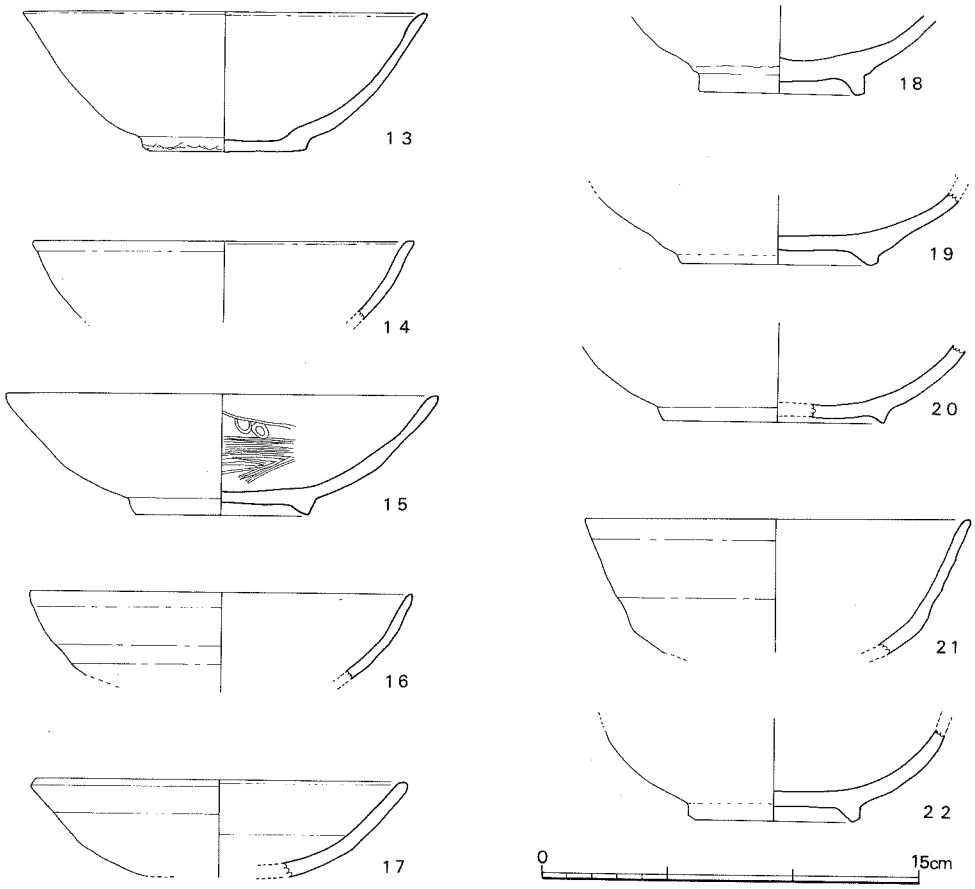
２・３は朝鮮産青磁であるが、染付とともに本遺跡における出土量は限られ、岡遺跡でも数点の出土に留まっている。類例の出土は、これまで調査の行われた川井川内遺跡や小薗城跡から、他の輸入陶磁器と一緒に得られているが、いずれの場合も極端に少ない出土量である。時期的には14世紀末から15世紀初頭の高麗末から季朝初期の所産と考えられる。

瓦器椀（第55・56図１～22）

１は全体が燻し銀状に仕上がり、ロクロ形成のあと内面は丹念にヘラ磨きされ見込には粗く格子状に暗文が描かれている。外面は胴部に不整形な数条の暗文が施されている。器形は、高台部分は低く貼り付けられ、ヘラによる成形で外に引き出されている。胴部は上半で内湾し、口縁外側は意識的にヘラ磨きされ尖り、稜線がつく。胎土はよくしまり青灰色で焼成は良好。口径15.3cm、高さ5.3cmを計る。２は高台はやや高く四角に整えられている。胴部はロクロ成形時の段が顕著であり、その上からヘラ磨きが行われ、内面も同様に丁寧である。器形は下半部からやや開き気味に内湾し、口縁部はヘラ調整で尖っている。胎土は灰白色で内外面とも灰色。口縁は黒ずんでいる。３は高台が粗雑に貼り付けられ、いびつである。口縁はやや厚目に丸くおさめられている。内面には炭化状の付着物があり、暗褐色、外面は焼成が甘いためか灰白色を呈する。口径16cm、高さ5.6cmを計る。４は須恵質に焼かれ、全体が灰色である。底はヘラ切りで高台はやや外開きに付けられ断面四角形を呈する。口縁は内面と外面は燻しにより黒色となっている。内面見込はわずかな円が描かれているのが観察できる。推定口径15.2cm高さ5.5cmを計る。５は底はヘラ切りで高台の貼り付けは粗であり、断面は丸い。径は７cmと大きく安定感がある。口縁は若干外反している。胎土は灰色できめ細かいが、焼成甘く体面は灰白色を呈している。口径17.5cm、高さ6.4cmを測る。６は須恵質に堅く燻して焼き上げられ、丁寧なヘラ磨きが施されている。外面はスス状のものが付着し上半部は黒光りする。高台は台形状に貼り付けられている。推定口径は12.8cm、高さ６cmと小ぶりである。７は約半分が残るが、ロクロは使っているものの器壁はぼってりとして粗である。高台径は7.7cmで大きいが、張り出しは浅い。



第55図　瓦器椀実測図(1)(1／3)



第56図　瓦器および土師椀実測図(2)(1／3)

胴部に焼成時の亀裂が走り、口縁部内外は黒ずんでいる。焼成は甘く暗灰色を呈する。口径16.8cm、高さ5cmを計る。**8**～**11**は口縁部破片でほぼ同様の形態を有する。焼成は**8**と**11**が須恵質の硬いのに対し**9**・**10**は灰色の瓦質である。**10**は胎土に滑石粉を含む。底は糸切で、高台はその上に貼り付けられ断面は台形状を呈する。**12**はロクロ成形の段はヘラ磨きにより消されている。器壁は厚ぼったく口縁はややふくらみながら丸くおさめられている。**13**は底部がほぼ完形、体部が半分残る。焼きは灰色で須恵質である。体部内外には指頭による成形痕が残り、内面見込は段がつけられ低くなっている。口縁部は丸くおさめられ、底部は糸切の状態がそのまま残され、高台はつかない。胎土には粗い粒子が入る。口径16cm、高さ5.5cmを計る。**14**は口縁外部がくびれ外反する。内面は暗灰色、外面は黒色である。胎土は灰色で黒色土器かも知れない。**15**は瓦質土器ではあるが、焼成甘く、黄褐色を呈している。体部は内外面とも丁寧にヘラ磨きされ、内面には暗文が施されている。高台は貼り付けられ、断面は三角形で、ヘラ磨きされている。推定口径17cm、高さ4.8cmを計る。**16**は**17**と同様の焼成であるが、外面はロクロ調整痕が

明瞭で、口縁は尖る。内面はヘラ磨きが行われている。17は灰白色を呈し、外面は粗くヘラ磨きされている。口縁はふくらみながら丸くおさめられている。18～20は瓦質土器底部である。18は外面が黒く黒色土器を思わせる。高台は楕円形に付けられ、内面は灰色で細い線で十字が描かれている。20は外面は須恵質で灰色、内面は燻されて黒くなっている。高台は断面三角形で低く付けられている。

土師椀（第56図21・22）

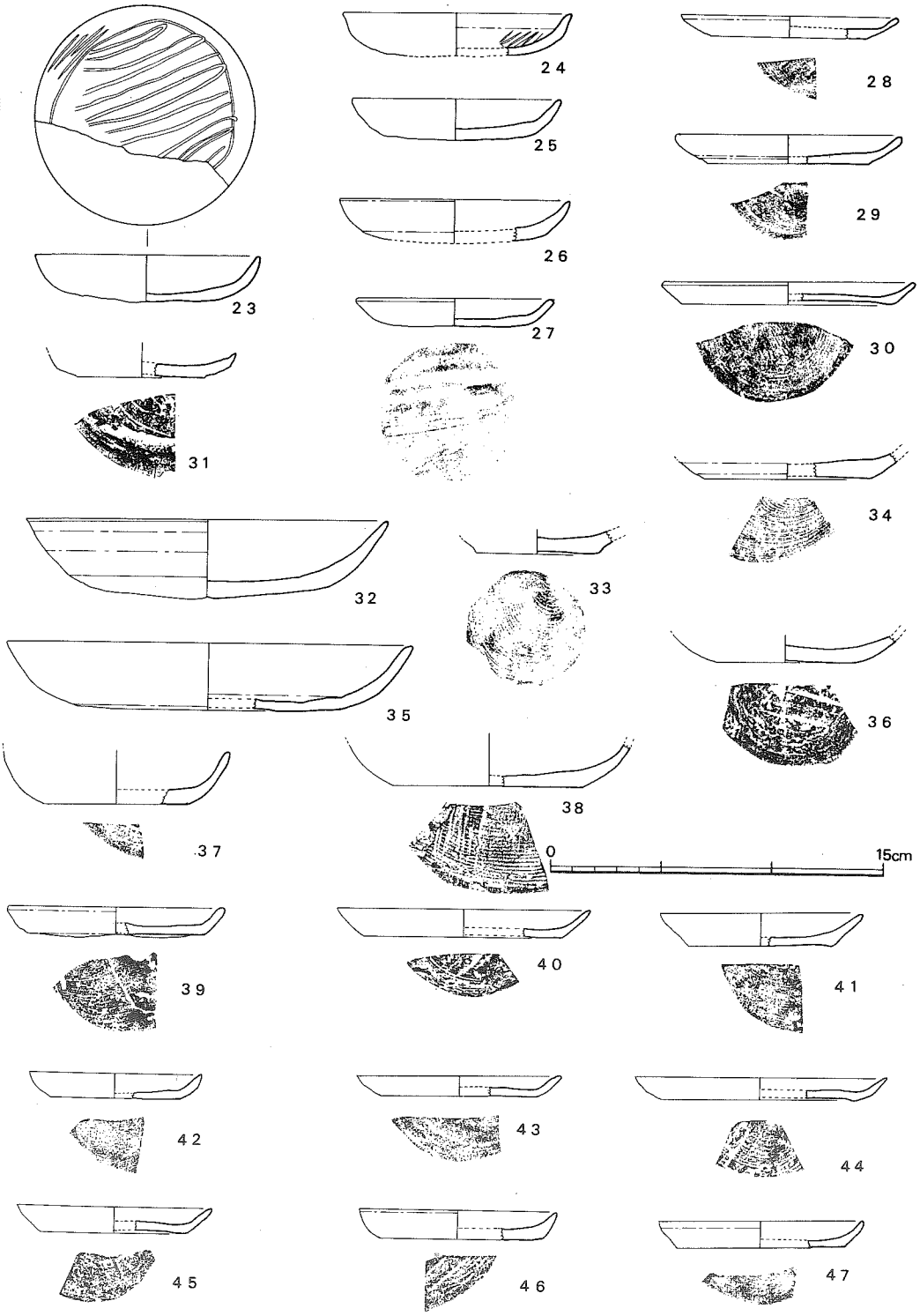
21は黄灰色の口縁から胴部にかけての破片である。内外面ともかなりの磨耗を受け白けている。ロクロ成形時の段がわずかに残り、体部下半が湾曲しながら上半は真すぐ外に開き、口縁は丸くおさめられている。22は黄褐色の胴部下半から底部にかけての破片。内外ともヘラ磨きされている。高台はやや外に開き気味に付けられ高く断面は丸い。高台径は7cmと大きく安定している。

皿（第57・58図）

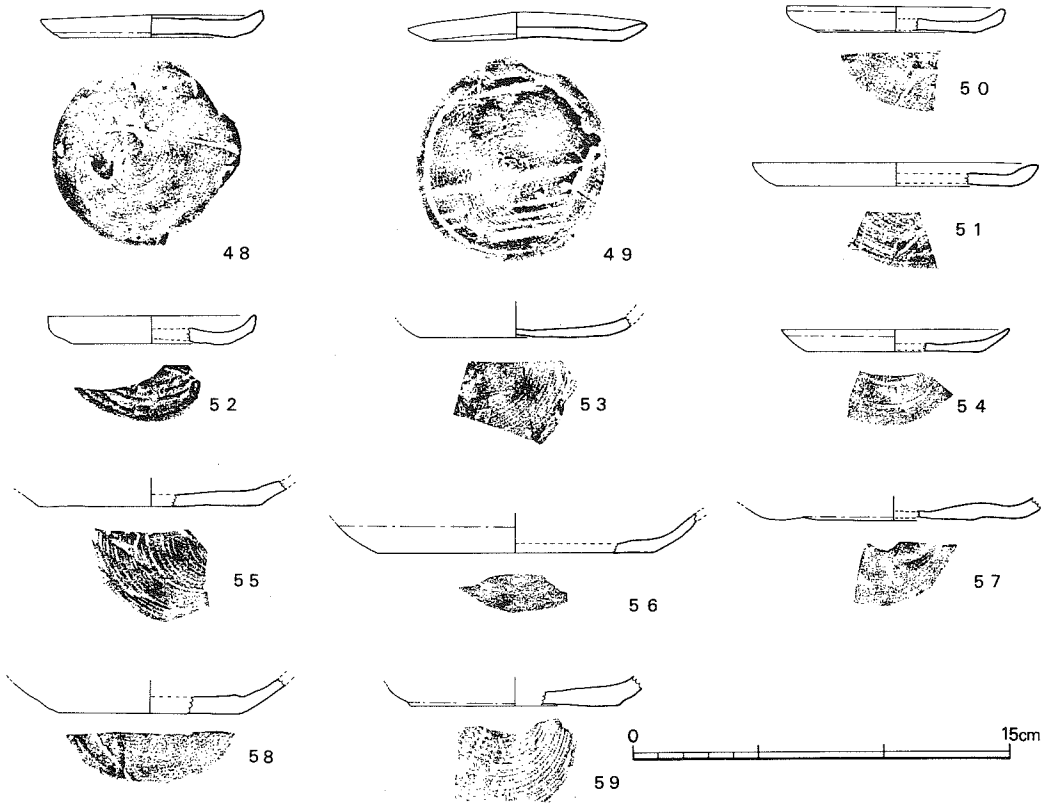
皿は瓦質44点・土師質94点、合計138点の破片の出土がある。

瓦質皿（第57図23～38）

23は黒く燻んだ上に、内面はヘラ磨きされ、底に暗文が曲線的に施されている。底部外面はヘラ切りの痕が残り凹凸がある。立ち上がりから上はヘラ磨きされ、形態はややいびつで、口径10cm、高さ2.1cmの小皿である。24～26は灰白色を呈する小皿で底はヘラ切りである。24は23と同じく内面底に暗文の曲線が施されている。27～31は底部から屈曲して外反する口縁部がわずかにつまみあげられる小皿で、焼成は瓦器と土師質の中間である。27は底部はヘラ切りのあと板目圧痕がつけられ、内面は指頭によるナデが行われている。28～30は底部と体部の区別ははっきりとしており、底は糸切りである。31はわずかに口縁がつまみ出され、底部はヘラ切りで口縁の境ははっきりしない。口縁直下には1条の沈線が巡る。29～30は小皿に較べて底部から口縁部までが深く、杯に類するもので底は糸切りである。32は灰白色を呈しているが焼成は良好である。底部はヘラ切りで中央がやや高くなり、板目圧痕が見られ安定性に欠ける。外面はロクロ成形のあとナデによる調整が見られ内面も同様である。底部は立ち上がりの部分に沈線状の段が設けられ底部と体部を区別している。口径16.2cm、高さ3.7cmを計る。33は明確な糸切り痕が残る底部で、立ち上がりの部分がくびれ、高台状になる。器形は椀に近いものかも知れない。胎土には金雲母を含み、精選され、焼成は良好であるが灰白色を呈する。35は比較的大きな破片である。胎土は金雲母を含み精選され焼成も良いが、内外面にスス状の炭火物が付着している。推定口径18.2cm、高さ3cmを計る。36は黄褐色を呈し焼成甘いが底部はヘラ切り。38は底部が糸切りのあとに板目圧痕が残るが、さらにその上からハケ状のものでナデが行われている。



第57図　瓦質皿および土師皿実測図(1)(1／3)



第58図　土師皿実測図(2)(1／3)

土師質皿（第57・58図 39～59）

ほとんど小皿で、口縁部が少し開き気味に立ち上がり、やや深いもの（**39～47**）と、口縁部をわずかにつまみ出した浅いもの（**48～54**）に分けられ、底部はすべて糸切りでわずかにあげ底になるもの（**44・45**）や、板目圧痕をもつもの（**46・49**）がある。口縁部は端部が丸くおさまるもの（**39～41**）と、尖り気味になるもの（**42～46**）や、中間の形態をとるもの（**47～52**）などがある。

この中でほぼ完形品は**48・49**である。**48**は糸切り底からわずかに引き出された口縁がつき、内底はもり上がりその差は２～３㎜である。**49**は糸切りのあと板状圧痕が付けられ、口縁は大きく外に開き焼成時の歪みのため底部との区別がはっきりしない程である。**57**は胎土に金雲母を多く含み灰白色を呈する。口縁部は欠失するが底部は段をもって体部と区別され二重底になっている。

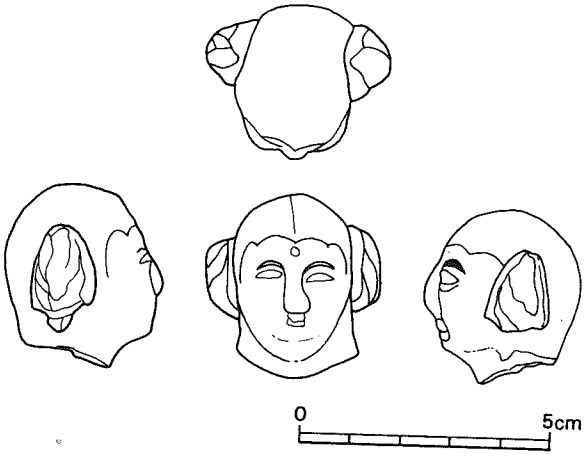
中世須恵質土器（第60図１～15）

ここに示した須恵質土器は、東播磨（神出窯・魚住窯系）の土器として、通称東播系の須恵質土器と呼ばれるものである。調査では25点の破片の出土がある。すべて鉢で口縁部により、分類が可能である。ここでは井沢氏の編年試案[註13]に従う。

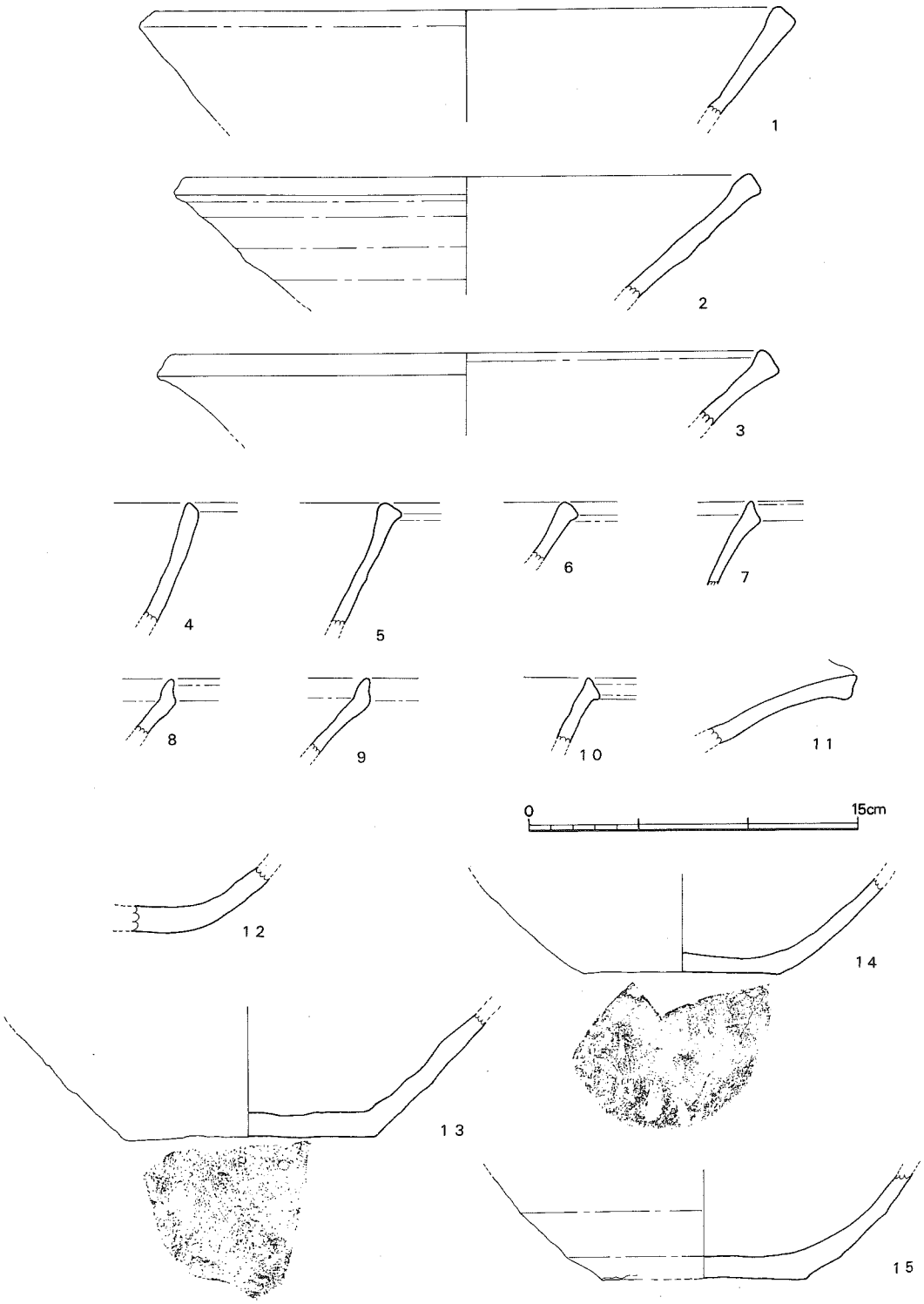
1、**2**は口縁部は、わずかに内側につまみ出された様になる。**1**は口唇がヘラ状のもので押さえられ、かすかに沈線状に凹みが２条残る。両者とも口縁部に自然釉がかった灰白色の光沢が見られる胎土は、粗い砂粒を含む。色調は青灰色で、**2**は内面にスス状の黒い部分が残る。II－２類に相当する[註14]。**3**～**11**はIII類からVI類に相当すると思われるが、口縁が斜行し、玉縁状になるもの**5**、**6**と、口縁がわずかに凹んで端部が尖るもの**7**～**10**に分けられる。**4**は口縁が平坦で外側は丸くなり、内側の方がはっきりした稜線が付く。瓦質に近く軟質である。**12**も**4**と同様の焼成で灰色である。**11**は鉢の片口の部分である。口縁の部分に自然釉がかかり黒くなっている。**12**～**15**は底部である。**12**は粗い砂粒を含みしまっている。小破片のため復原は出来ないが、底部はヘラ切りである。**13**は底部から胴部にかけての破片で、図上復原が出来る。底部は糸切りで、胴部への立ち上がりは明瞭で外開きに伸びる。外面はほとんど緑灰色の自然釉状のものがかかり、底部まで達している。内面は暗灰色で焼きしまっている。**14**はやはり糸切り底で立ち上がり部はやや丸く不鮮明だが、外開きに直行する。内底はわずかな盛り上がりを見せ、前者より焼成は甘く、青灰色を呈する。**15**は切り離したあとに粘土が付着しており、糸切りかヘラ切りかはっきりしない。底部からの立ち上がりは、丸く外に張り出し胴部がふくらむことを示している。胎土は粗いが焼成は良好で、内外とも暗灰色を呈する。この底部はIV類に属する。

人形頭部

52水10区から、他の中世陶磁器などと一緒に出土。白磁製品で、首の部分が割れている。顔は童顔で頭部は中央で分けられ、耳の所に束ねられている。顔立ちはふくよかで、額に白毫がある。「白毫は仏の眉間にある白い毛で光を放つと言われ、仏像には水晶などがはめられることもある。この相好は三十二相の一つとして、眉間白毫（みけんびゃくごう）と呼ばれている。」このように人物像というより、信仰の対象とされた仏像の頭部で、輸入された当時は一体であったと考えられる。



第59図　白磁製人形図 (1/1)



第60図　須恵質土器実測図(1／3)

滑石製品（第61図１～10）

ここに示した滑石製品は、すべて石鍋が破損したあとの転用品と考えられる。

１～５は、いわゆるスタンプ状の製品である。１は石鍋の耳の部分を中心に方形に面取りしているが、片岩を多く含んでいるために軟質の部分から欠失している。つまみの平坦部は黒く変色して石鍋の転用を示している。スタンプ部分の最大厚は2.3㎝で凸レンズ状に削り出されている。重量188ｇ。２は良質の滑石を楕円状に整え、つまみも細長く削り、一孔が穿たれているが、この部分から割れている。スタンプ面はゆるい凸レンズ状でなめらかである。３は石鍋の耳、短軸部分をそのまま残し長軸の方を削りつまみとしており、中央に孔を穿っている。スタンプ面はわずかに破損しているが細かく削られ、強い凸レンズ状を呈する。石質はきめ細かく良質で、重量168ｇ。４は51水７区の出土である。良質の滑石を小ぶりの方形に整え、つまみには孔を穿っている。スタンプ面はなめらかに凹レンズ状に仕上げるが、他の面は粗く削っている。５はスタンプ状の未製品で、内面は石鍋面が残る。つまみの製作途中に割れたのか、切離痕が多く残る。６は幅1.9㎝、長さ4.3㎝の細い長方形に面取りし、つまみの部分は欠失している。スタンプ状製品にしては小形であり、周囲が黒いススを受けている。７はうすく仕上げられたスタンプ状の半分割れたもので、面はほぼ平坦である。８は石鍋の口縁の部分を切離したもので、湾曲面が残る。削り痕は全体に見られ、一部に刻線を施しているが、これから何らかの製品に仕上げようという段階の転用未製品である。９、10は石錘。９は石鍋外面の黒い部分が残され、両端を先細に丸く尖らせ中央に溝を刻んでいる。長さ9.2㎝、最大幅2.8㎝、厚さ1.4㎝、重量49ｇを計る。10は小形のもので、側面に深い溝を平坦面に細い線刻を施している。長さ５㎝、最大幅２㎝、重量19ｇを計る。

石鍋（第62・63図１～15）

石鍋は全域から出土しているが、特に集中するのは51水－11区から総数50点を越える出土がある。隣接する岡遺跡出土の石鍋と合わせるとかなりの量にのぼる。すでに形態分類について森田氏分類[註15]、木戸氏分類[註16]に加えて岡遺跡出土の分類が試みられており、本例もこれに従う。

一般的には次のように大別されているが、本遺跡でも例外は認められない。

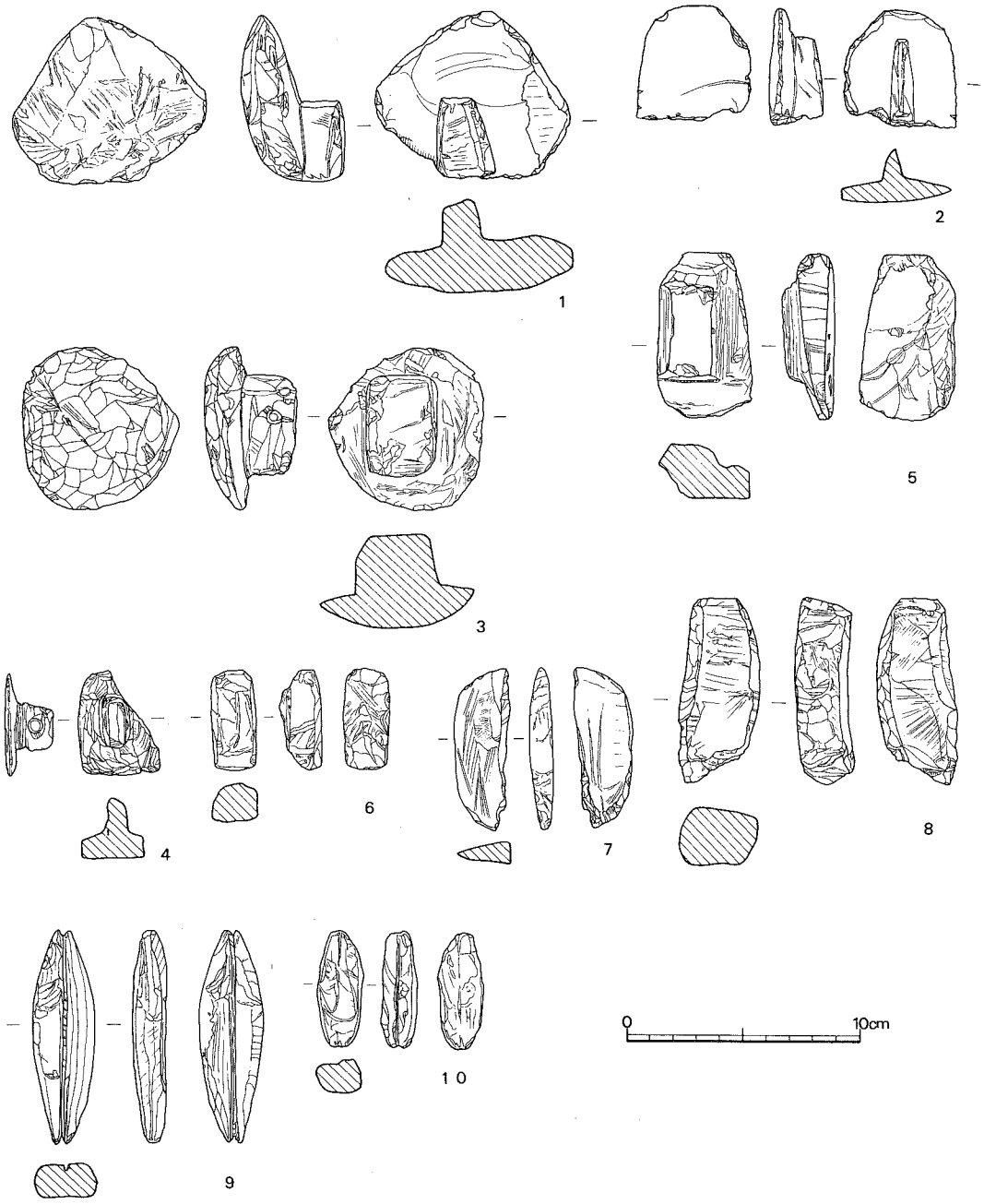
① 口縁部直下に削出し突起を全く持たない桶状のもの。

② 口縁部直下に瘤状、縦長状の把手が付く桶状のもの。

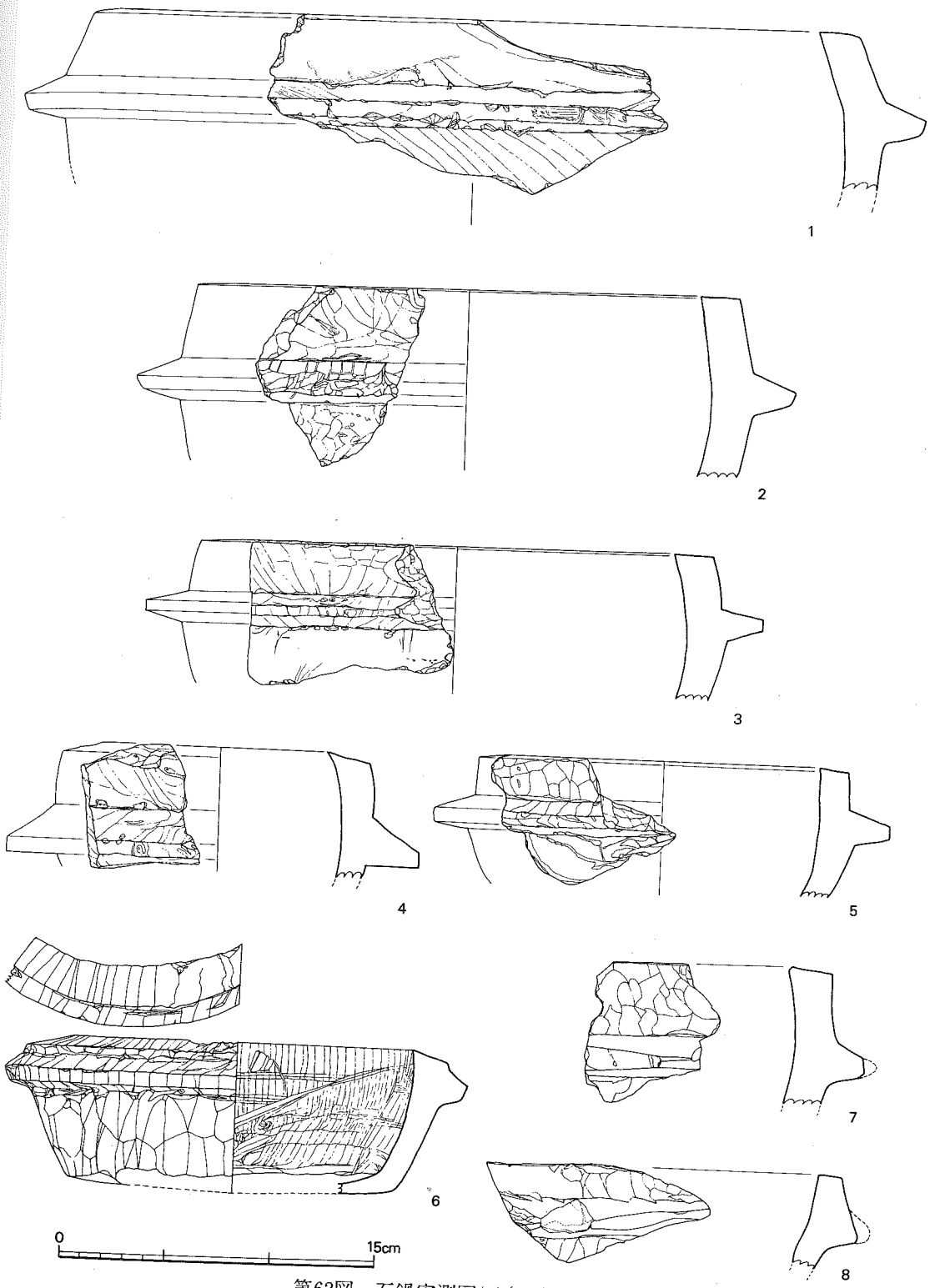
③ 口縁部直下に鍔が廻るもの。

出土石鍋の中で一番多いのは鍔が廻るもので、次にただの桶状のものと縦長状に把手の付いたものの順になる。しかし、桶状の破片は、把手をもつものも含んでいる可能性がある。

１～15は①～③の特徴を有し、さらに細分すれば１～３が森田分類のＢ－１類、木戸分類Ⅲａ。口縁は平坦で、鍔から上が内傾し、鍔は２等辺の台形を呈している。３点とも良質の滑石を用い外面にはススが多量に付着している。１は大形で口径34㎝。４・５・７は口縁端部が外側に



第61図　滑石製品実測図(1／3)



第62図　石鍋実測図(1)(1／3)

斜行し、鍔上部が急角度をもつ。森田分類Ｂ－２類、木戸分類Ⅲｃ。**6**・**8**は口縁直下に鍔が廻る。**6**は粗い削出しが行われ、鍔も短い。森田分類Ｃ－１、木戸分類Ⅲｄ。**9**・**11**・**12**は破片だけで断定出来ないが、桶状になるもので**9**は質の悪い滑石を使用しているため器壁が厚い。**10**は縦長状の把手を有し、森田分類Ａ－１。良質の滑石を利用し、丁寧な削り整形を行っている。器壁は厚く、内面もよく研磨されている。**13**～**15**は底部である。**13**・**14**は内面の立ち上がりがシャープである。**15**は大形の底部で外底は張り出し気味で不安定である。

石鍋はこの他にも、木戸氏分類Ⅳの退化した鍔で、口縁端部から斜めに削り出すものや、川畑分類Ｄ－２、Ｄ－３などの小破片も出土している。

文　献

註1　東彼杵町教育委員会　『川井川内遺跡』　東彼杵町教育委員会　1986

2　東彼杵町教育委員会　『岡遺跡』　東彼杵町教育委員会　1988

3　長崎県（1975）土地分類基本調査「早岐」

4　長崎県教育委員会　『九州横断自動車道緊急発掘調査報告書』　長崎県文化財調査報告書第94集　1989

5　註４に同じ

6　註４に同じ

7　開　正和『岡遺跡』―付―「東彼杵町内の中世石塔について」 東彼杵町文化財調査報告書第２集 1988

8　福江市教育委員会　『白浜貝塚』　福江市文化財調査報告書第１集　1980

9　諫早市教育委員会　『有喜貝塚』　諫早市文化財調査報告書第　集　1984

10　大村市・稗田遺跡調査会　『稗田遺跡』　1988

11　佐賀県教育委員会　『撰分遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（７）1987

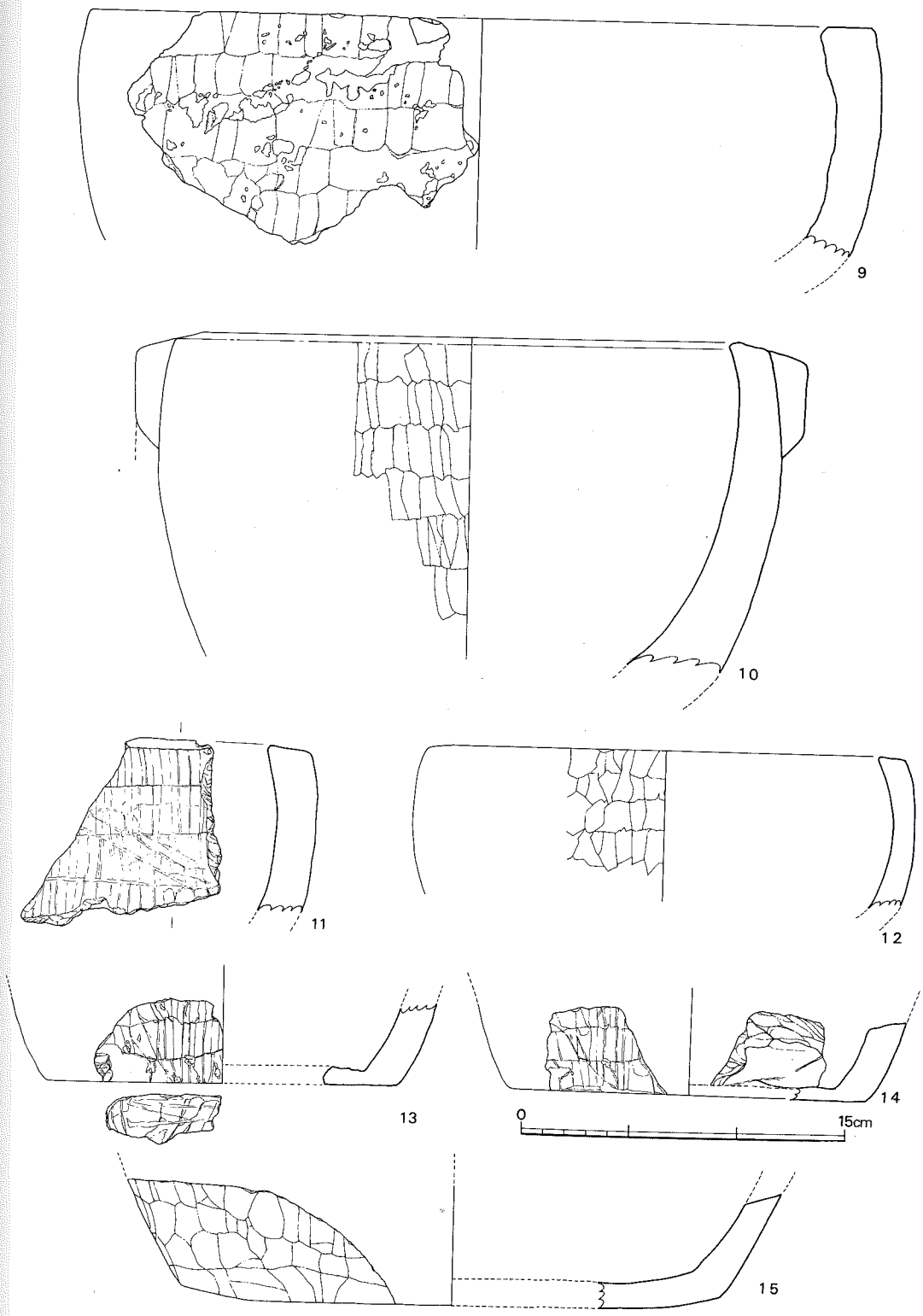
12　森田勉・横田賢次郎　「大宰府出土の輸入陶磁器について」　『九州歴史資料館研究論集４』 1978

13　井沢洋　「福岡地方の須恵器・瓦質土器について」　『中世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会 1987

14　中世須恵質土器については福井国立高専助教授　萩野氏より脱稿後色々と御教示いただいた。

15　森田勉　「滑石製容器－特に石鍋を中心として－」　『仏教芸術148号』　毎日新聞社

16　木戸雅寿　「草戸千軒町遺跡出土の石鍋」　『草戸千軒No.112』　1982



第63図　石鍋実測図(2)(1／3)

木器・木製品

ここで報告する木器及び木製品は８点である。その内訳は下駄３点、鍬状木製品１点、ツツロ１点、加工痕のある木製品３点である。これらについては、実測図と写真で示した。その他に板状木製品が数片出土しているが、全体の形状と用途は不明である。下駄については、日本はきもの博物館(広島県福山市)の主任研究員潮田鉄雄先生に所見をいただいた。それは次頁に一括して掲載した。

鍬状木製品（第64図１）

明らかに形態から見て鍬である。全形の半分しか残ってないが、復原図を描いてみると、平面での先端がやや尖った鍬になる。これを断面でみると、厚さ2.5㎝の分厚い板が刃先に向ってだんだん細くなり先端部で急に尖る状態がわかる。元部にわずかな作り出しが見られ、側面は全て削られた加工痕を残す。柄穴は台形を呈して、柄に接する面（切削された面）は角度をもってきれいに仕上げられている。全長26.7㎝、最大巾17.1㎝。図の右が手前で、左がその裏になる。

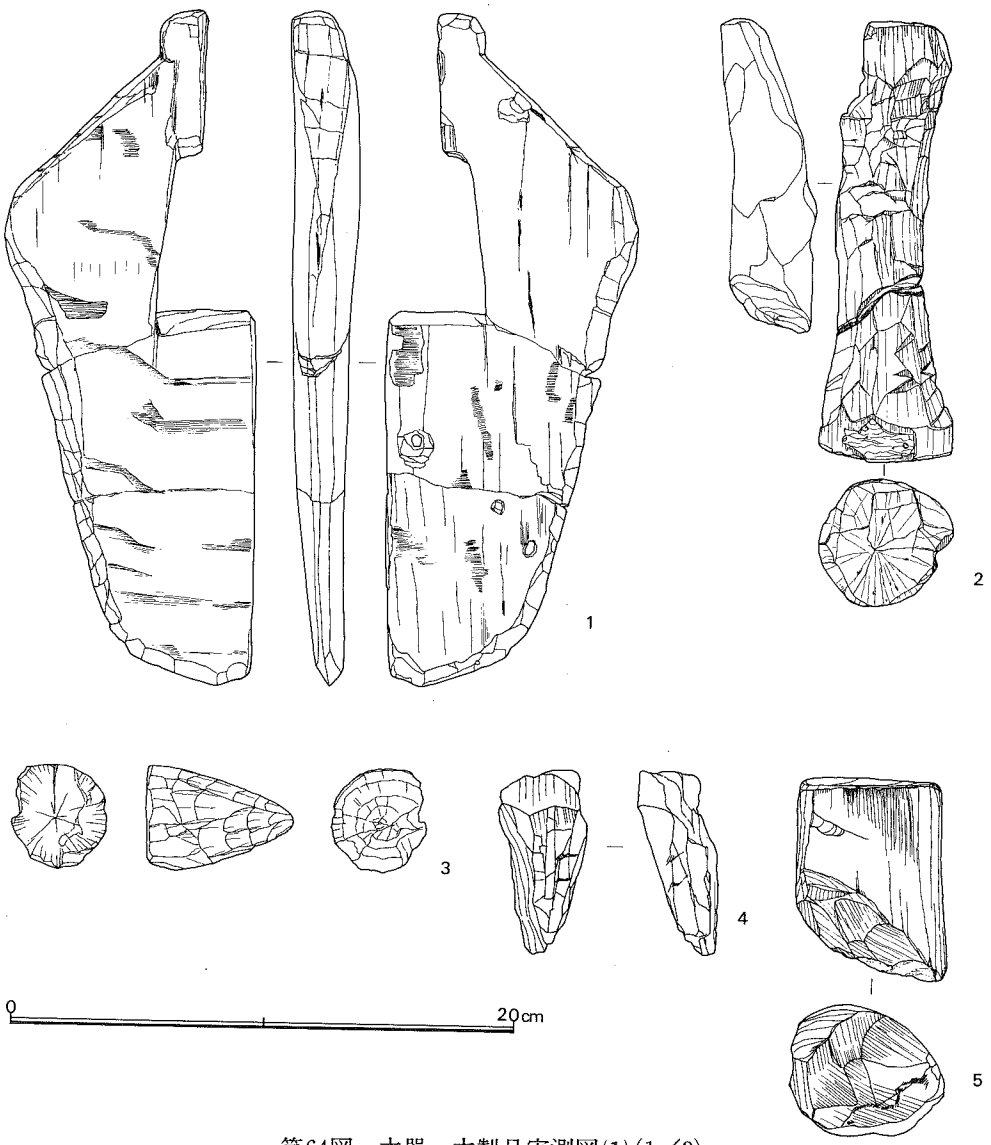
形態からみる特色は、図の上端に見える作り出しである。弥生時代以来のナスビ形木製品の影響を受けたものであるなら、柄を固定するための作り出しと考えたい。次に、柄穴が特異である。これが台形であるのは、接合部近くだけの現象かもしれないが、類例がない。そして装着柄の角度が70度前後であるのは、現代では長柄の鍬の最大角である。しかし長崎県域でごく普通に使用されてきた伝統的な鍬は、平鍬といって、柄と鍬の刃先がほぼ平行に近くなり、短い柄を着けたものである。長柄の鍬は、歴史時代を通して、ついに主流にはなっていない。

ところでこの資料は、形態から、中打ち鍬というのが最も妥当である。畝を作る畑作では、畝谷の溝土を両脇の畝上へ掻きあげるときに使用する鍬である。刃先がやや尖り、両側端にも加工痕がのこるのは、掘り鍬ではなく、畝掻きとしての用途に由来するものであろう。

ツツロ（第64図２）

コモ（菰）編みの錘である。コモ下駄（編台）と組で使われる。呼称を「ツツロ」というのは、長崎県北部域でのこと。一般名称で、コマともいう。考古学の発掘資料では「ツチノコ」で紹介されている例があり、木製と石製がある。長崎県内で使われてきた民俗例にも木製と石製のものがある。

コモは用途でいえば、米俵や炭俵に使われるのが最も多く、茅や稲藁で作られる。また形をなさないものでも、日除けや風除けに使われる場合がある。白井川遺跡からは、ツツロが１個体しか出ていないが、通常籾俵を編むときには８個が２個ずつ対になって使用される。炭俵を編む場合も同じである。



第64図　木器・木製品実測図(1)(1／3)

当該資料は、全体に加工が施され、両端に一部原木の表皮が残る。材質は樫の木と思われるが、民俗例からも、この種の用具には樫や椿など堅木が使われており、適合する。全体が荒削りであるが、使用とともに磨り減るため磨きがかかった状態になる。この資料についても、削り面縁の磨耗は認められるが、長く水土中にありそのため磨耗したのとは区別がつけにくい。従って、使用された結果の廃棄かどうかは決定できない。しかし実測図右下の欠落部分は、虫食いなどによる自然破砕が認められ、そのための廃棄である可能性が強い。

形態からみる長崎県のツツロには、民俗例を参考にして、この資料が大きな範疇にはいるも

のと思われるが、現在のものは仕上げが精巧で左右均衡であるなど、細部で異なる。これについては、今後のため類例を待ちたい。

加工痕のある木器・木製品

（第64図 3）

芯材を使用していて、ほぼ原材の大きさがわかる。先端に向けて意図的に削りだしており、その加工痕は残るものの、摩滅がひどい。短い円錐形への加工は鉈状の工具で削り出したものである。用途は不明であるが、この状態で完成品であろう。直径4.0cm、長さ5.7cm。

（第64図 4）

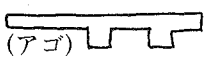
木製杭などの先端部の破片と思われる。加工痕跡が残り、鉈状の工具で先端へ向けて削ったものである。

（第65図 5）

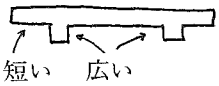
丸太のまま、杭状の原材に一部加工が施されており、これも他の加工痕のある木片と同じように、鉈状の工具で削られている。削り方からは、切断のためとも思われもするが、その反対側が直角に切断されているため、加工途中の木片と考えたい。用材で大きな丸太の部分を使っているのもそのことを裏づける。直径5.8cm、長さ8.0cm。

以上の木器・木製品から、さらに下駄をも加えて、白井川遺跡の性格が幾らかでも考えられるのではないかと思っている。資料が絶対的に少ないことは仕方がないが、生活地であり、しかも下駄の所見からは階層差もありそうで、古い街道沿いの家内では菰編を行っているという中世の村である。また中打ち鍬は、主に畑で使われることから畑作のことも考えなければならなくなる。しかしこれだけではあまりにも独善的で、やはり類例が一つでも多く欲しいところである。

（立　平　　進）

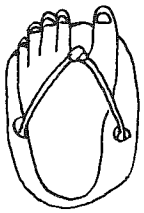


今の下駄



【本　品】

挿入図1



体重重芯の位置

挿入図2

下　駄（第65図、６～８）

（第65図６）　長さ22.5×巾11.6×高さ4.6cm

成人（昔は13才以上）用の幅広で前後の面が半円形なので女用と思われる（男用かも）。鎌倉時代には一木連歯低下駄をボクリといった。裕福な人や僧などの家で、水汲みや洗濯・排便の軽作業にはいたもので、側面で歯が先細りの逆台形、歯間が台形ということは、泥が落ちやすく、泥から下駄が抜けやすいことを意味する。後緒孔が径約1.8cmと太いことは横緒は右縄の藁緒であったと思われる。後緒孔が大きいことは、ハナオが太いことで力がかかることであるから、ぬかった雨上がりの道や井戸端ではいたと思われる。それから今の下駄に比べ、後緒孔が前寄りにあけてあるのは、鼻緒が全体に前寄りにつけられた（すげられた）ためであるから、下駄は摺り足ではくことになる。泥をはねあげないため、衣服のすそを汚さぬ工夫である。作りが全体に雑なので日常のふだんばきであろう。（挿入図１）台の前うら（アゴという）が短く、歯間が広いのは、下駄としては安定がよいのだが、用途は不安定な泥みちではいたことになる。

※挿入図は前頁

（第65図７）　長さ21.1×巾11.7×高さ5.7cm

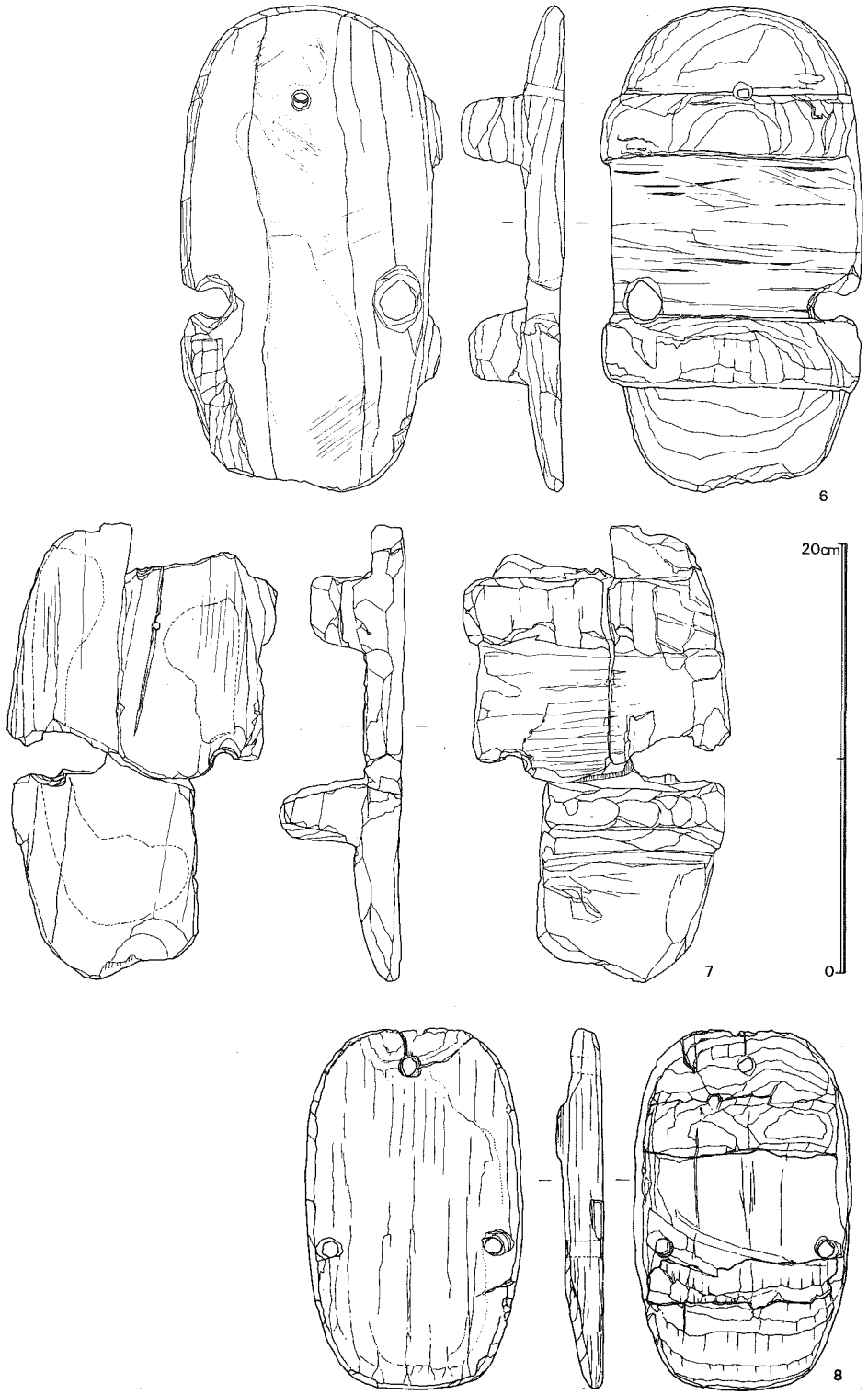
成人女性用である。仕上げ７寸は女性である。用途はＡと全く同じである。この下駄は前の台が完形とすれば、前緒孔が前寄り（前端から２cm下ったところに穿孔）であるから、図（挿入図２）のように５本（または４本、小指をのぞく）の指が下駄の台からはみだして図（同）のように各々の足指を下に曲げて下駄をつかむようにはいていた。このことは前緒がゆるいか、前緒材に布きれを用いたことになる。こうした前寄りに前緒孔をあけてはく下駄を、福岡県北部ではアシナカゲタといって昭和20年頃迄行われていた。足半ぞうりのように足指の出る下駄の意味である。下駄をゲタというようになったのは江戸時代の初め（慶長年間）からであるから、当時の名はボクリでよいと思う。（尚、アシダというのは連歯高下駄か差歯高下駄を指称したようである。）後の歯がへるのは今も同じ、体重がかかるのは下脚の下である後歯に力が加わるので減りやすいわけである。

（第65図８）　長さ16.8×巾10.0×高さ2.1cm

長さ16.8cm（5.6寸）は俗に五・五（仕上げ５寸５分）といい５～６才の子供用。巾広なので男児用かもしれない。子供はよく跳びはねて足を汚し、衣服も汚すので巾の方も広く作った。武骨な感じが男児の気がするが、板になるまで歯を上手にはき減らすのは、はき方に神経を用しているので女児かもしれない。晴天のぬかる道の歩行、近所あるきで裕福な家の子供用であろう。緒孔が三孔とも径８～10mmと小さいのは、ミツメギリで穴あけをしたものであろう。焼火ばしでは、こう上手にはあけられない。

白井川遺跡出土の下駄は街道沿いの町で裕福な人達か村でも名主層がはいたものであろう。

（潮　田　鉄　雄）



第65図　木製品実測図(2)(1／3)

V まとめ

圃場整備事業区内における白井川遺跡の調査区は、２本の排水路と、箱式石棺墓の一部分が調査の対象となり、それ以外の範囲は町単独事業として実施したため、報告書も２分冊の形をとることとなり、全体の考察については次刊にゆずりたい。

２本の排水路のうち51号支線排水路では古墳時代から縄文時代の遺物が得られた。縄文時代に関しては縄文中期の土器が数点表面採集されているが、実体はつかめていない。後期の土器は、51水８区において鐘崎式土器が１個所に集中して出土したが、関連した遺構、遺物の出土は見られなかった。大村湾東沿岸における出土例としては初例である。縄文時代の中で一番のまとまりをみるのが晩期の土器で、無文の粗製土器が主体である。遺物の出土は全域に及び、扁平打製石器が多く得られている。湾岸における標高５～10ｍの遺跡は、大村市黒丸遺跡[註1]や、本町内の宮田遺跡[註2]が知られており、出土遺物の組成の点でも類似性がある。

弥生時代については、城ノ越式土器がわずかに出土した他はほとんどが終末期である。この時期に関しては、町営事業分について３基の円形竪穴住居と、箱式石棺墓等の遺構が検出されており、関連性について今後十分な検討が必要である。

古墳時代については51水－01～05区において資料が得られたが、彼杵川の氾濫の影響を受けているため、良好とはいえない。古式土師器も若干の出土を見ており、弥生終末から７世紀頃までが、彼杵平野における人々の活動期といえよう。その結果はひさご塚や周辺部の古墳群の築造にみられよう。

古墳時代以降、遺物の一番集中するのは、52号支線排水路10・11区である。ここでは、中世の遺構・遺物が狭い範囲に見られ、昭和62年度調査した西側に接する12世紀から16世紀に至る遺構・遺物が出土した岡遺跡と同列に取り扱って考察しなければならない。

また、この地区では水田石垣中より、正平21年（1336）記年銘入り五輪塔地輪や、宝徳３年（1455）銘入宝篋印塔地輪など、青温石製の石塔が存在したことでも知られている。

遺跡の北側には標高213.5ｍを計る番神岳が聳え、松岳城が置かれている。頂部には今でも石垣などの遺構が名残りをとどめ、山麓部には構平、千寿寺、明時平などの当時を偲ばせる地名が残っている。

ここで彼杵地方における中世の動静について整理してみる。この地において在地の武士団の動向が明確になってくるのは鎌倉時代の末頃からで、江串浦の江串三郎入道や、千綿の千綿九郎入道純西が、杵彼には彼杵二郎入道行蓮がおり地頭方と考えられている。九条家の領家方には彼杵弥次郎、同弥三郎、同弥六、同七郎がいる。

彼杵氏の出自について、満井氏によれば、鹿児島県日置郡吹上町の「伊作氏」に求め、彼杵三郎久澄の同族が彼杵地方を支配したことは間違いないとされている[註3]。

正平17・18年（1362・63）の彼杵一揆連判状に「彼杵弥土丸代兵衛三郎、同清水彦三郎紀清

久、同岡五郎紀清種、同島田弥三郎紀清俊」が名を連ねている。清水氏を除いては、現在の地名として残っている。以後、文明年間に大村は有馬貴澄の侵攻を受け、彼杵氏の支配は消滅している。

中世の出土遺物を見てみると、特に集中したのは52号支線排水路の10・11区である。なかでも中国輸入陶磁器の出土は、国内産の土器を浚ぐものがあり注目される。前回の調査では国内産の土器が81％を占め、輸入陶磁器は19％弱で今回の対比と逆の現象が見られる。

地形的には岡遺跡の場合、傾斜し突出した部分に柱穴などが多く認められ、中世の集落遺構の存在が考えられたのに対し、今回は標高４ｍ台の低湿地から多くの物が得られ、木製品をはじめ、人為的な配石と考えられる遺構の出土がある。さらにこの地区は、西から南東へ地山層が傾斜しており、泥炭層が見られる。鉄道に沿って低平地を塞ぐように伸びた砂堆が帯状に伸び、現在の集落がのっている地形は、遺跡の前面にラグーン状の低湿地が開けている状況を示している。このことは、大村湾を舞台にした交易が考えられ、主要な港からさらに小河川を利用した小舟による運搬が想定される。

海東諸国記に、彼杵遠江守清原清男は文明元年（1469）宗氏を介して朝鮮と交易したことが記されている。満井氏によれば、「この貿易は、東彼杵地方というより、藤津郡から有明海方面の経済圏を考えねばならぬだろう。」とされているが、博多を介しての貿易、あるいは海外貿易にしろ、12・13世紀に活発に行われた交流は、この頃に基礎を固めたものと言える。

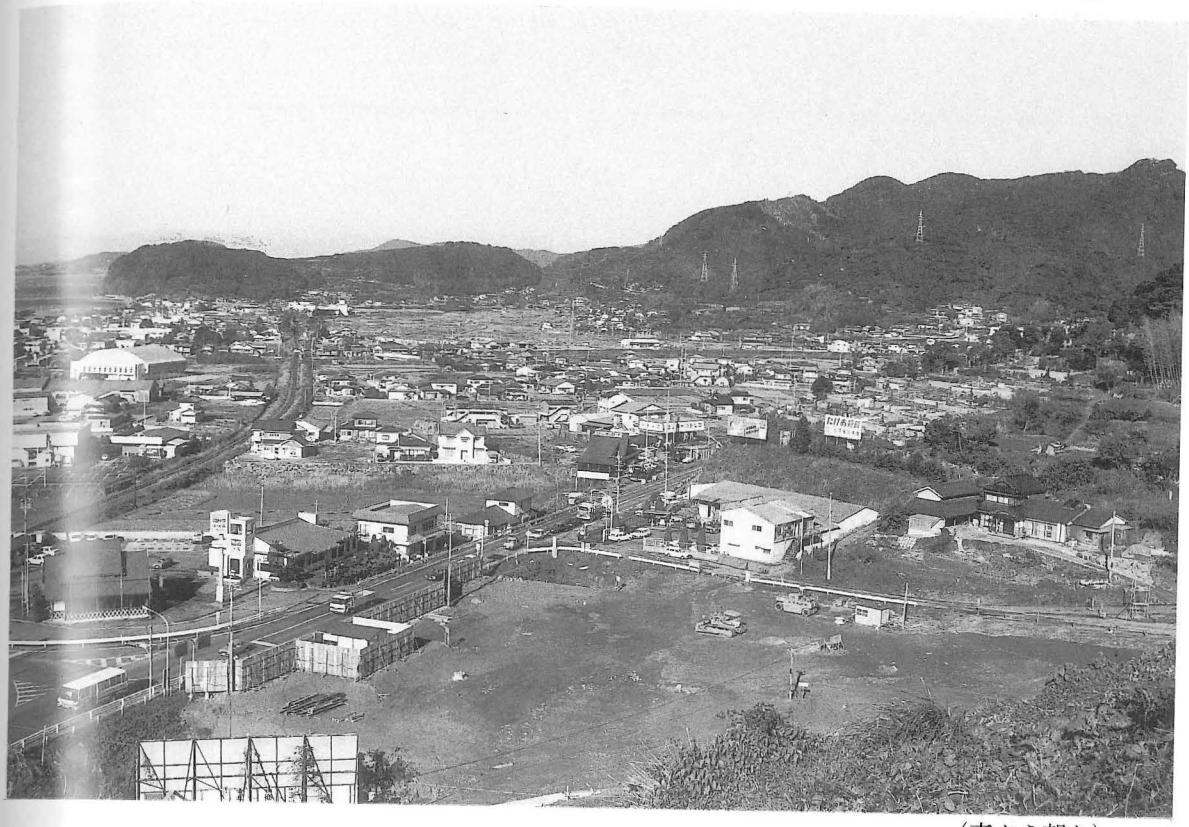
参考文献

註１　大村市・黒丸遺跡調査会　『黒丸遺跡』　1980

２　高野晋司他　「宮田遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書　第94集　1989

３　満井録郎　「旧彼杵村の中世について」『大村史談』　第三十二号　大村史談会　1988

図　　版

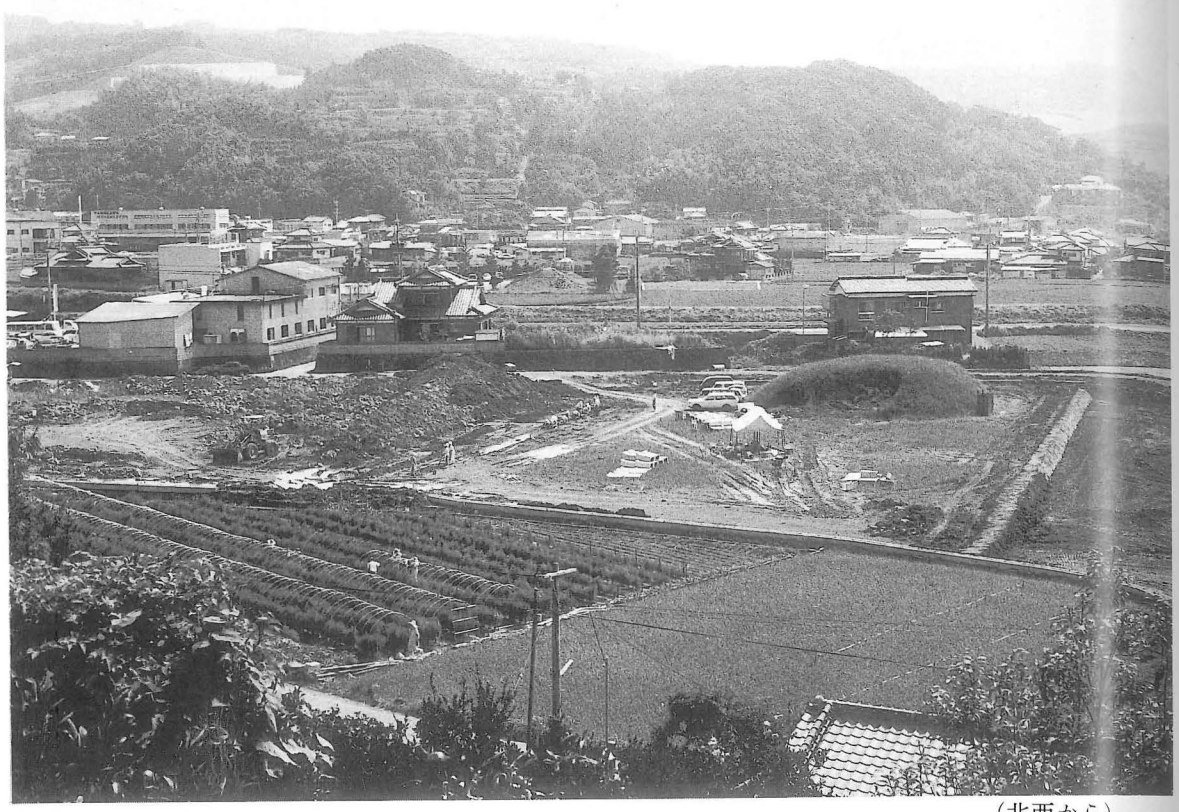


（東から望む）

（北から望む）

遺　跡　遠　景

図版 2



（北西から）

（南から）

調 査 区 近 景

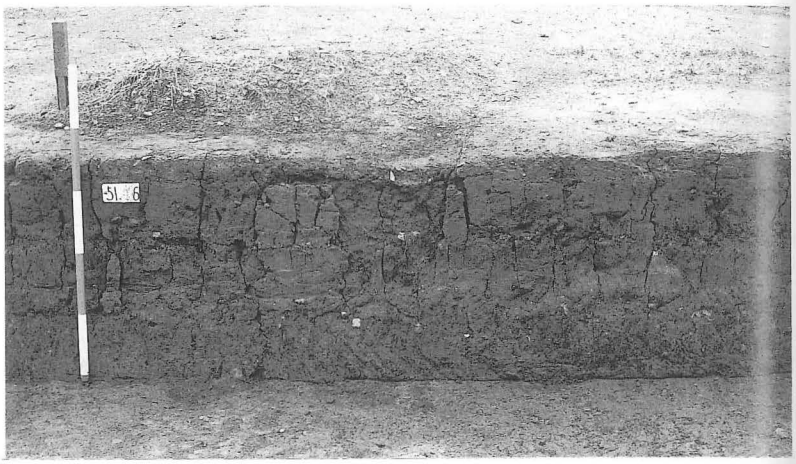
調査風景

小学生の発掘調査見学

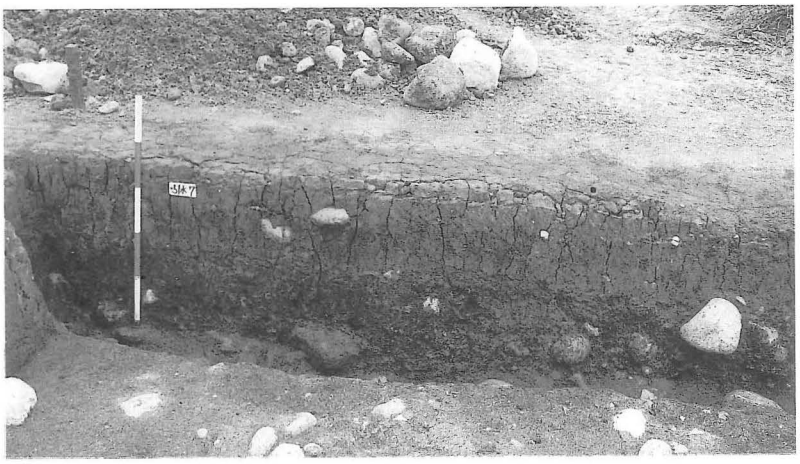
調 査 風 景

図版 4

51水1～3区西側土層



51水6区東側土層

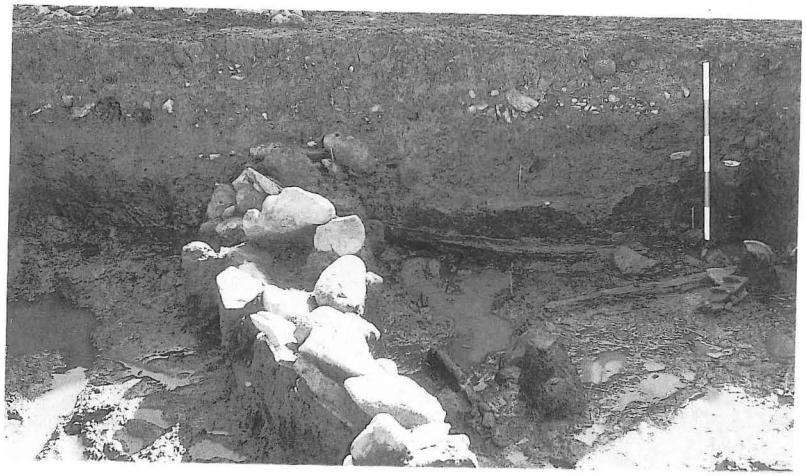


51水7区東側土層

調査区の土層①

51水01区北側土層

51水02区西側土層

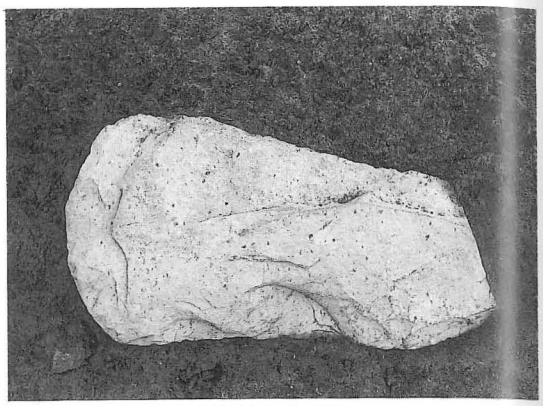


52水11区東側土層

調査区の土層②

図版 6

縄文後期土器



扁平打製石斧

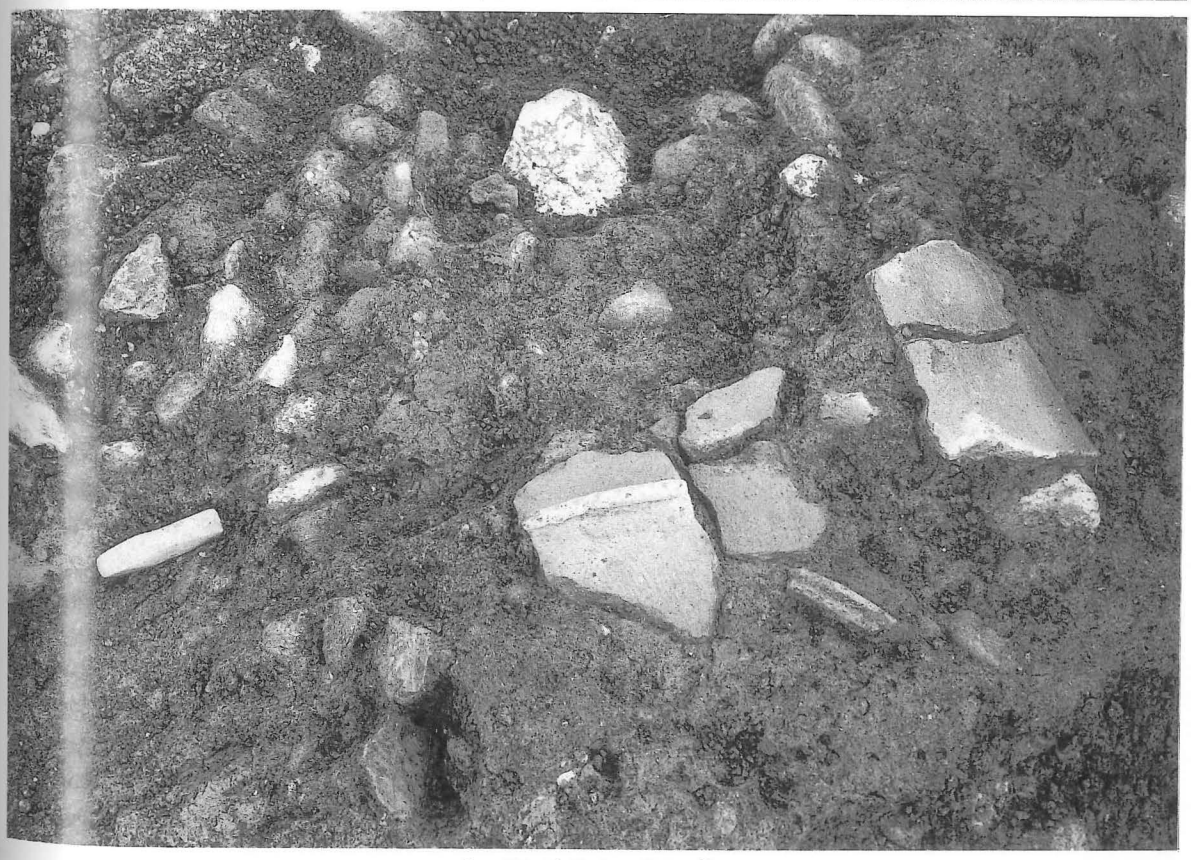
中世下駄

中世下駄

弥生土器

土師質土器

遺物出土状況①

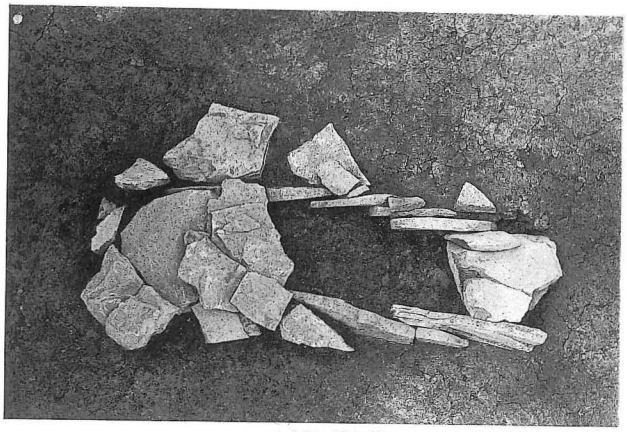


51水01区 遺物出土状況②

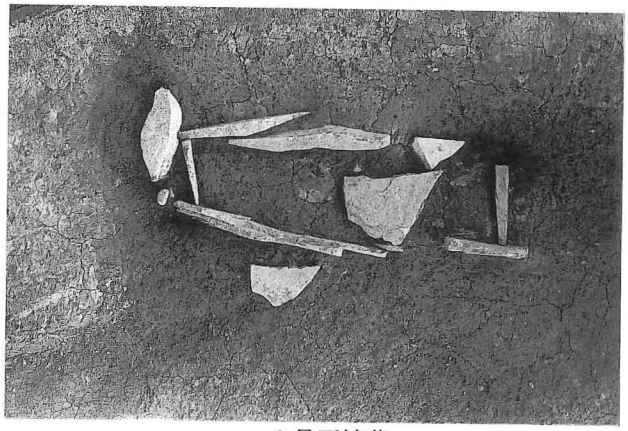
図版 8

52水-11区 遺物出土状況③

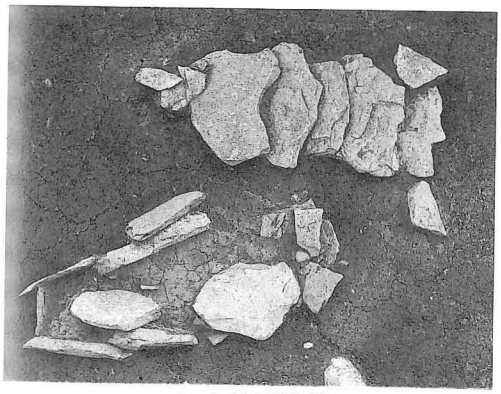
1・2 号石棺墓



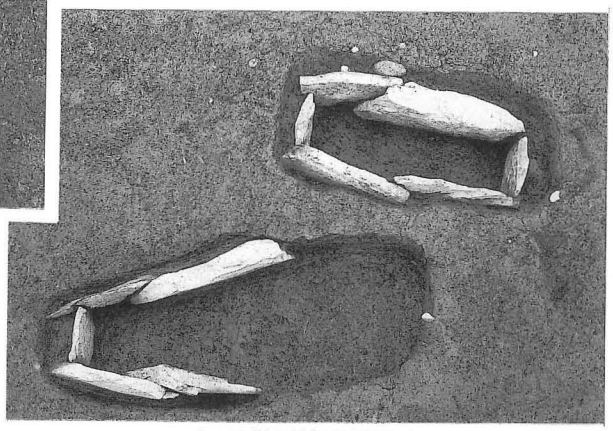
1 号石棺墓



2 号石棺墓



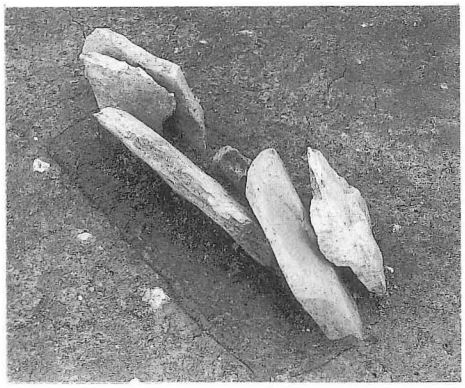
4・5 号石棺墓



4・5 号石棺下部構造

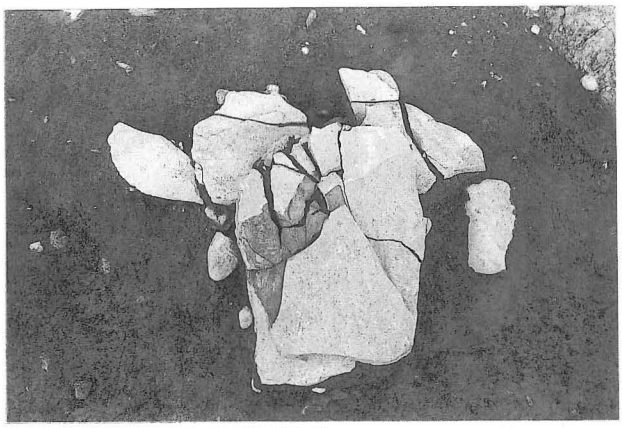
箱式石棺墓検出状況①

図版10



3号石棺墓

6号石棺墓



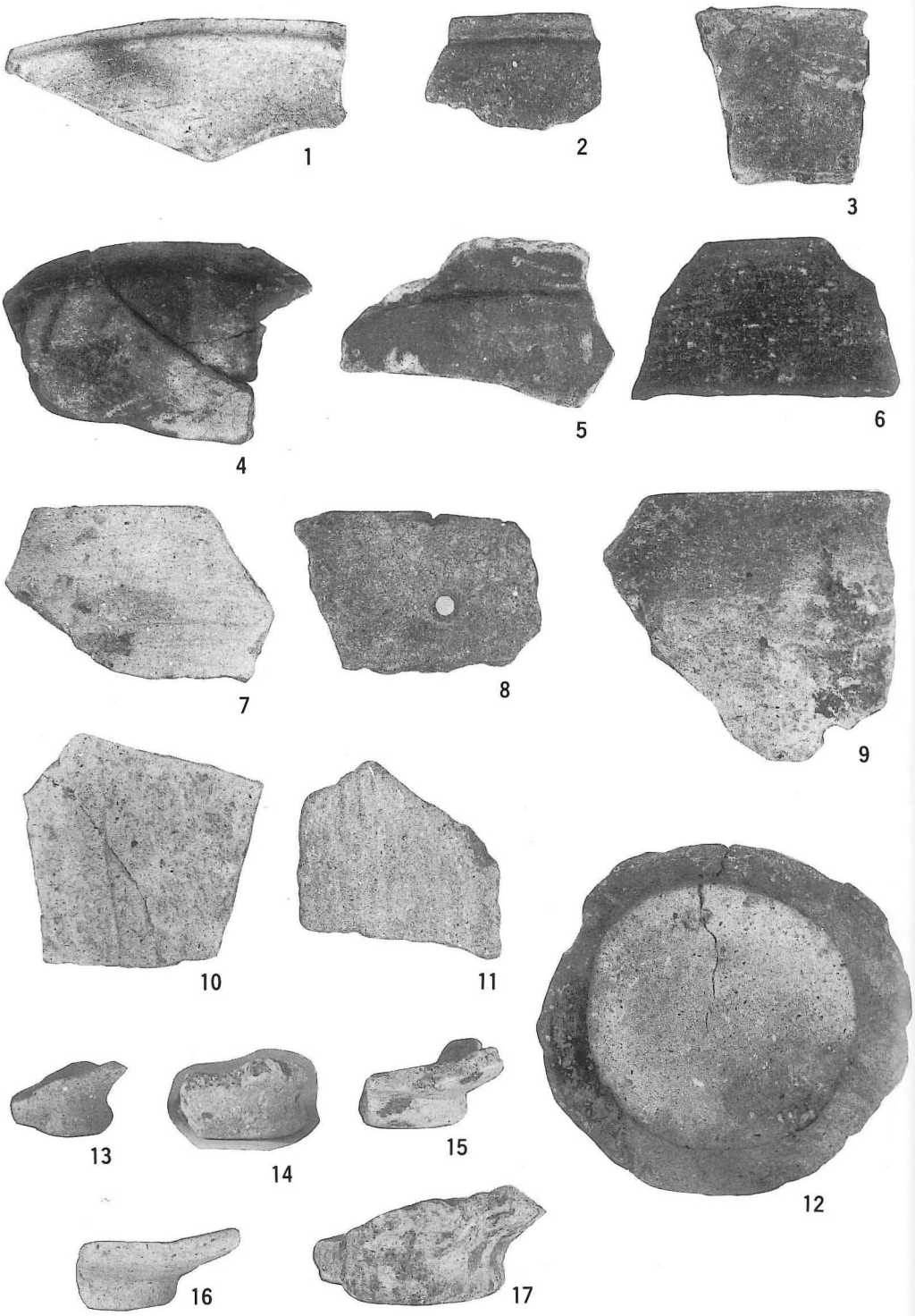
8号石棺墓

20・21号石棺墓

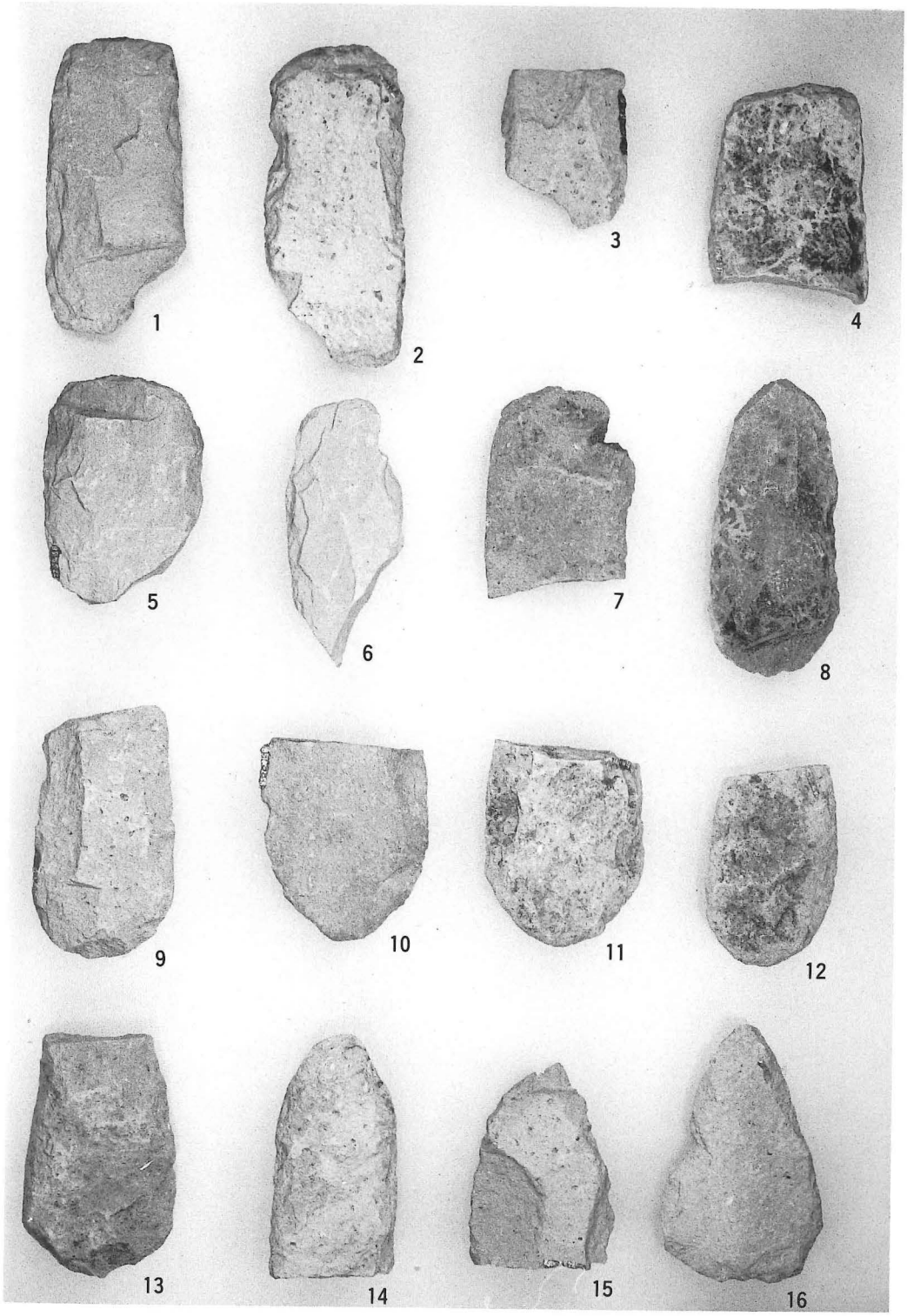
箱式石棺墓検出状況②

縄文後期の土器

図版12

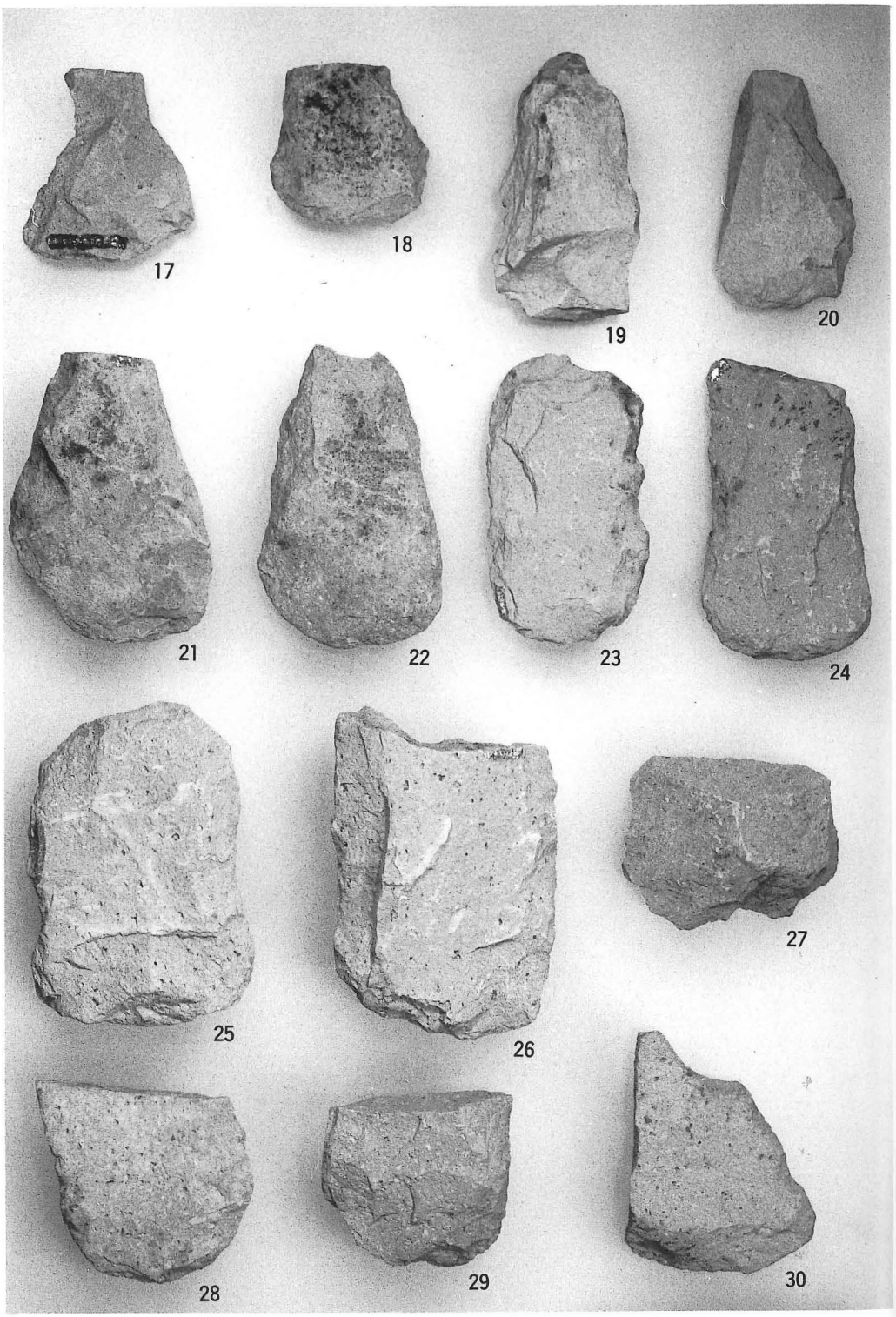


縄文晩期の土器



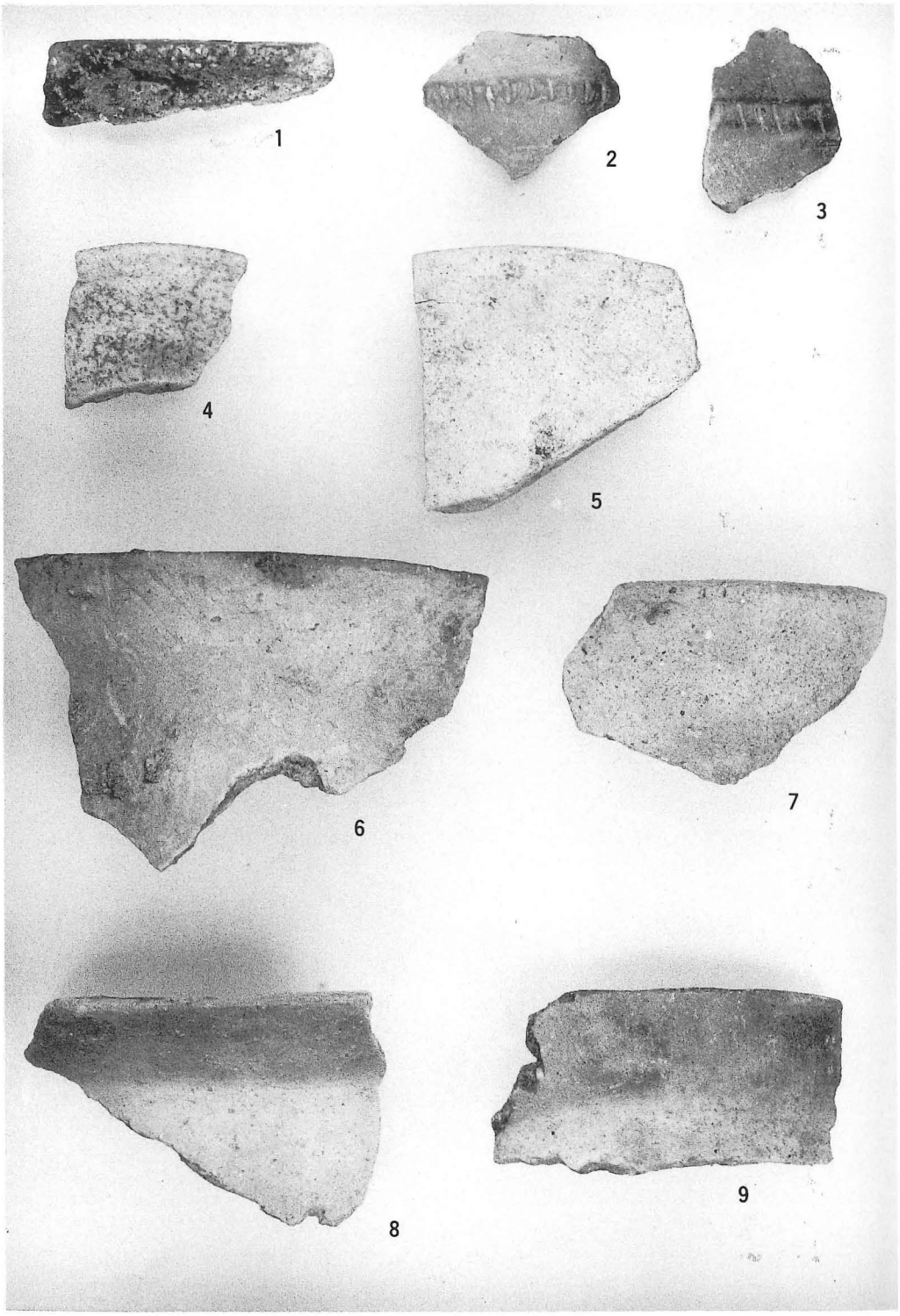
縄文晩期の石器①

図版14

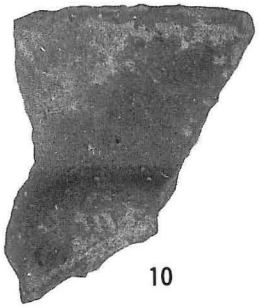


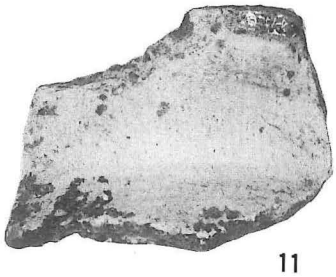
縄文晩期の石器②

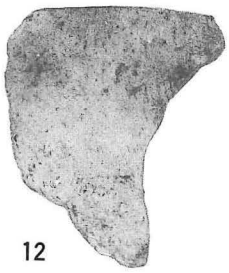
図版16

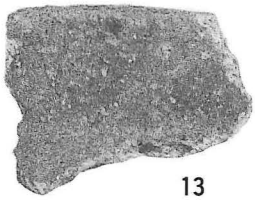


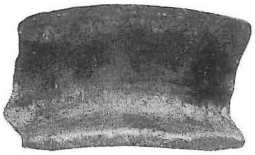
弥生土器①

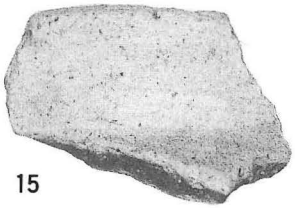

10

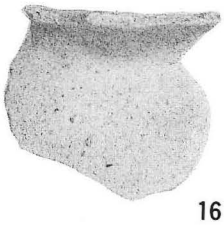

11


12

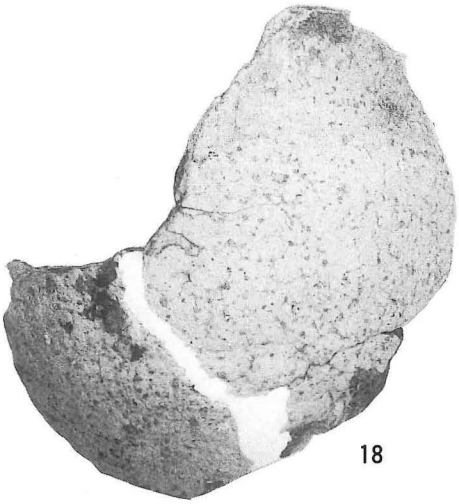

13

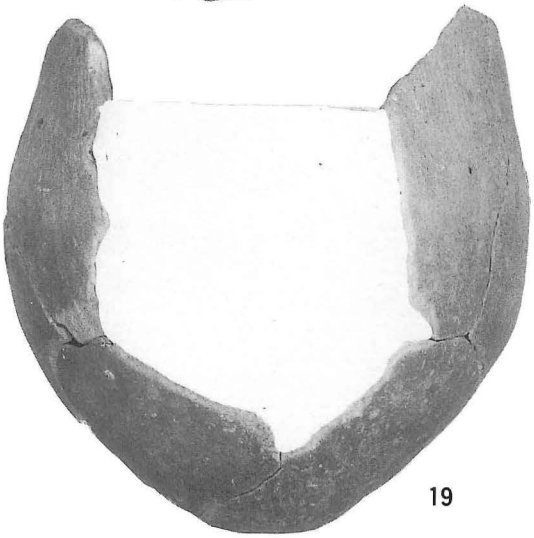

14


15


16

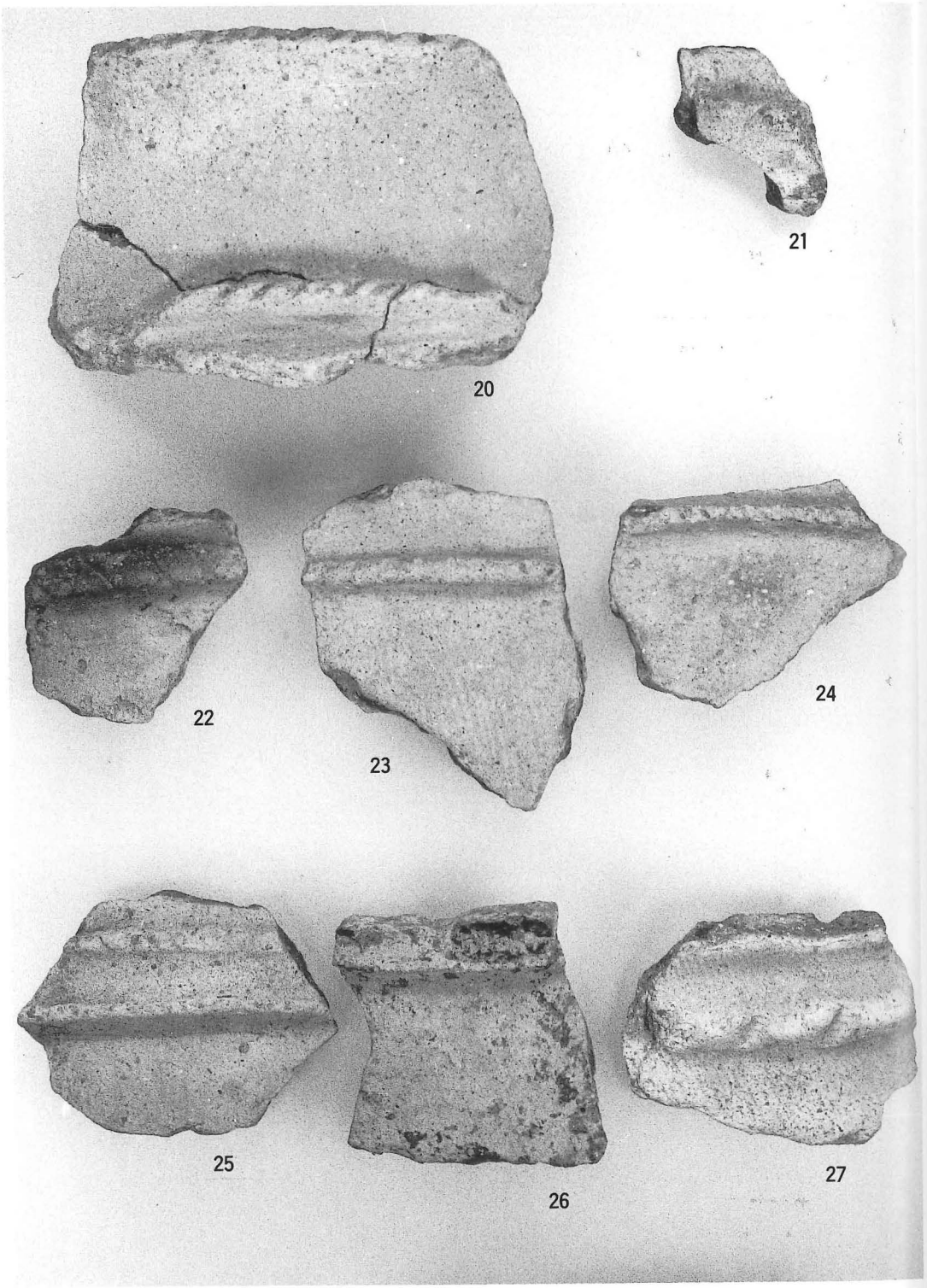
17


18

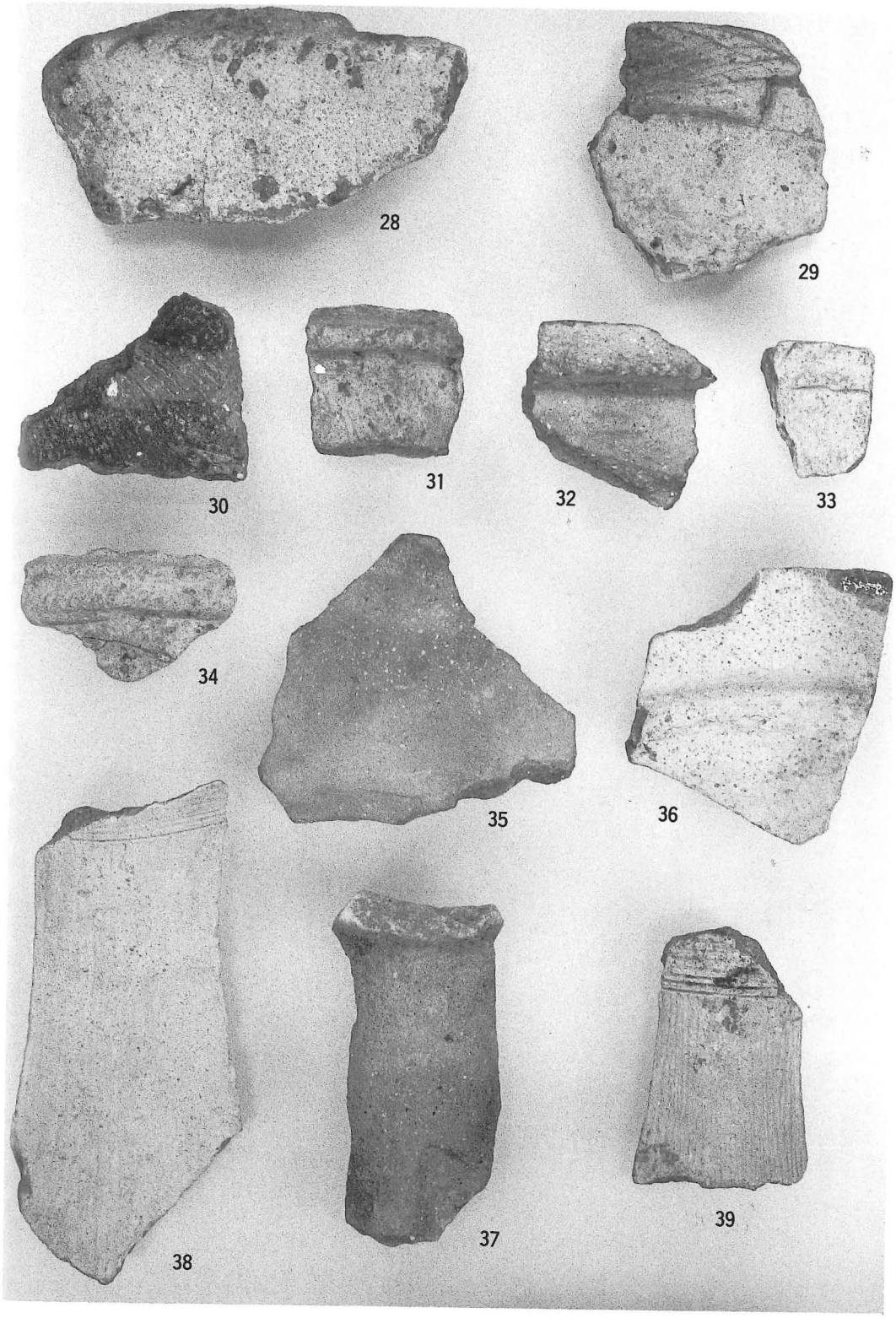

19

弥生土器②

図版18

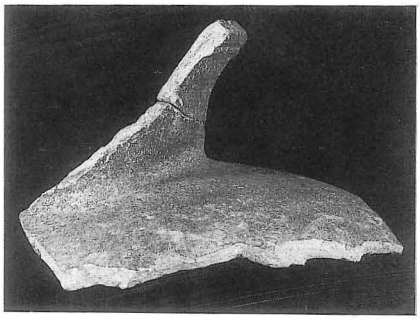


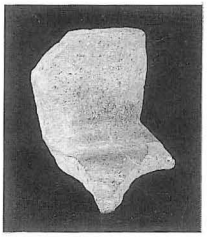
弥 生 土 器 ③

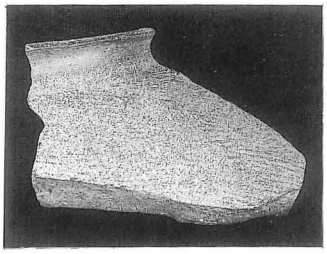


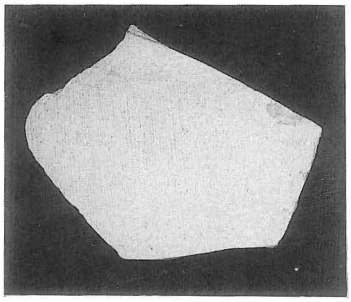
弥生土器④

図版20

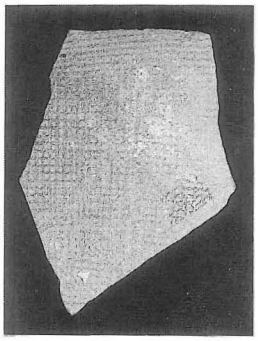

1

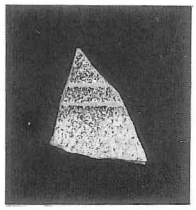

2

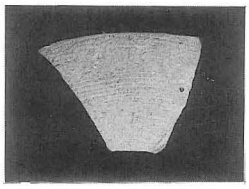

3

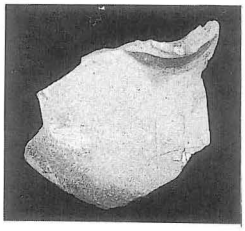

4

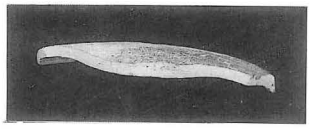
5


6


7

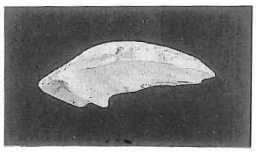

8


9

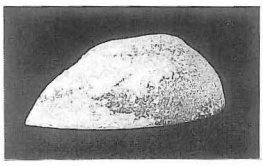

12

13

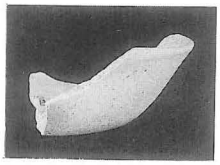
14

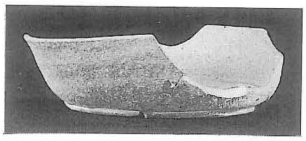

15

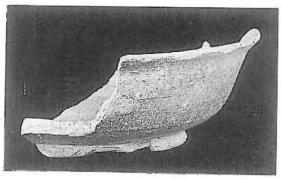
16

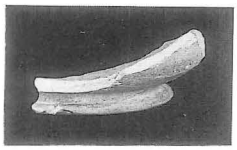

17

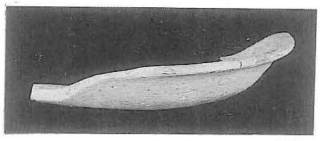
古墳時代の土器

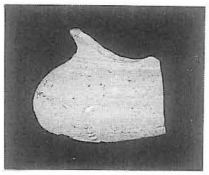

19

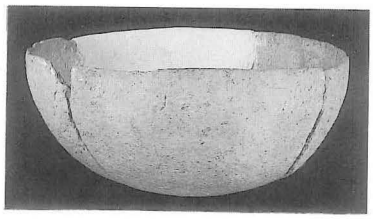

21


22

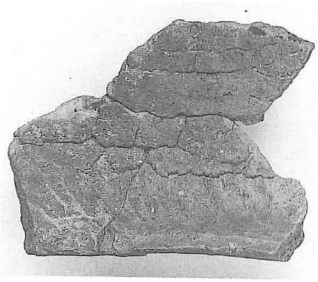

25

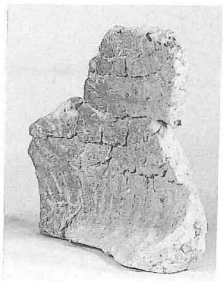

26

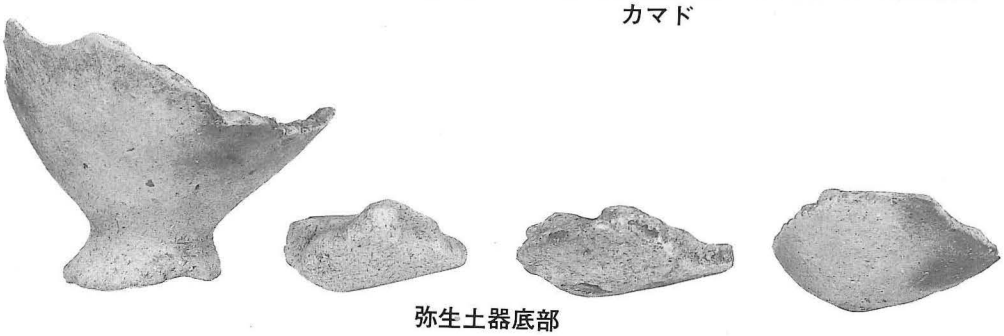

27


29

扁平磨製石器

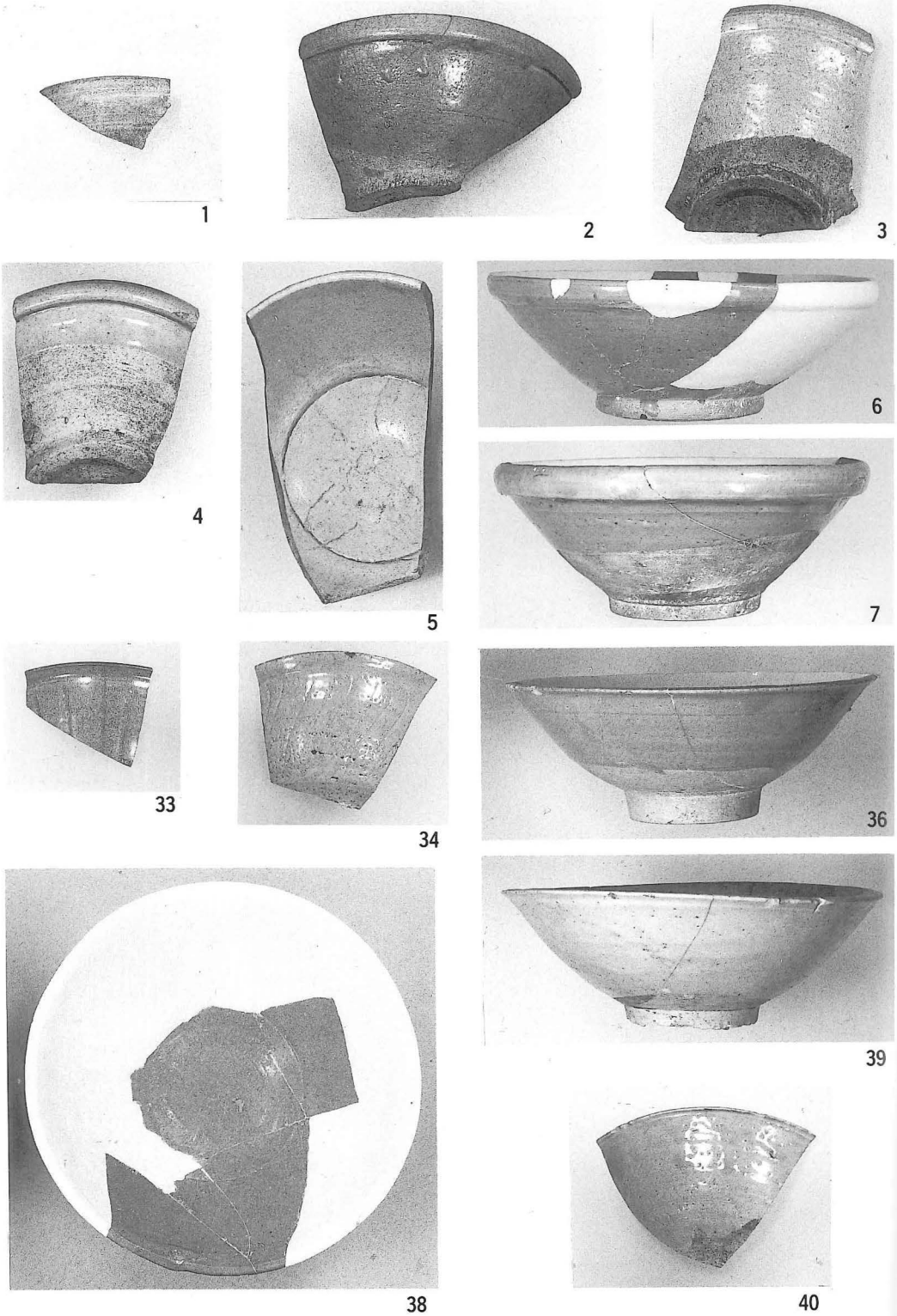



カマド

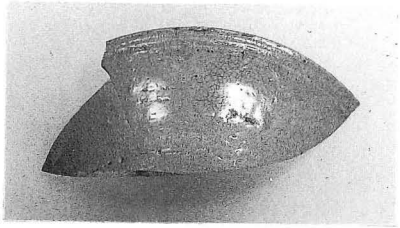

弥生土器底部

古墳時代およびその他の遺物

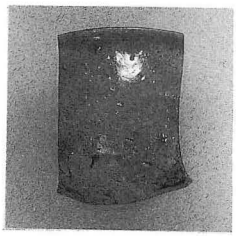
図版22



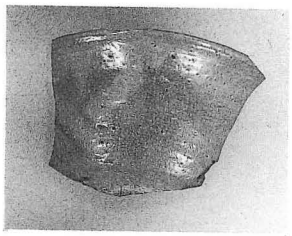
中国輸入陶磁器（白磁）①



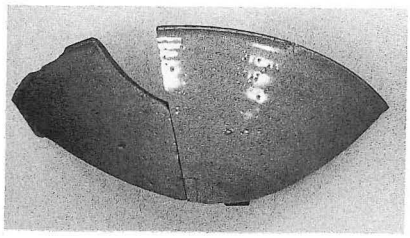
42



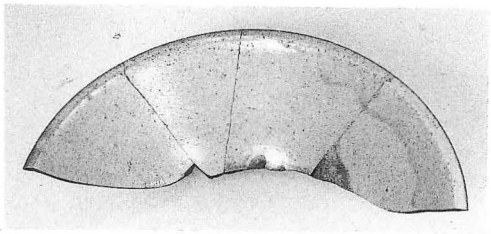
48



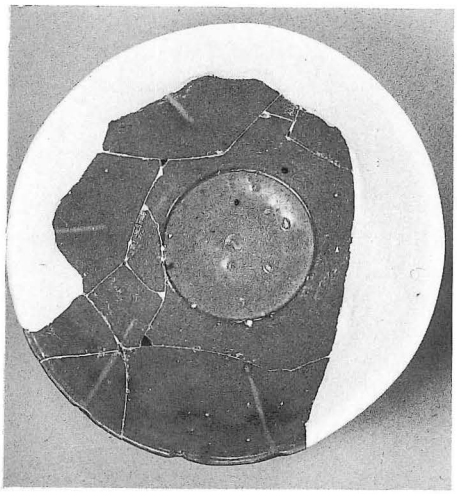
49



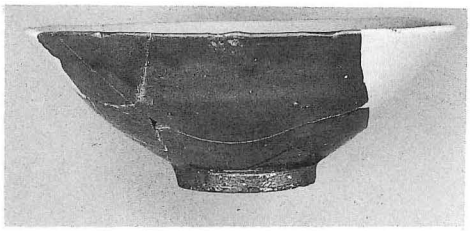
51



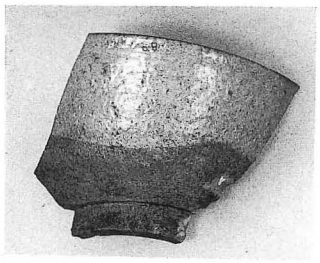
51



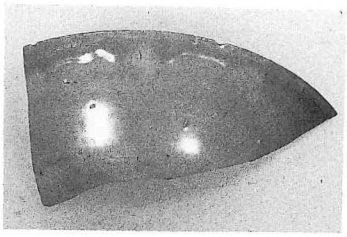
58



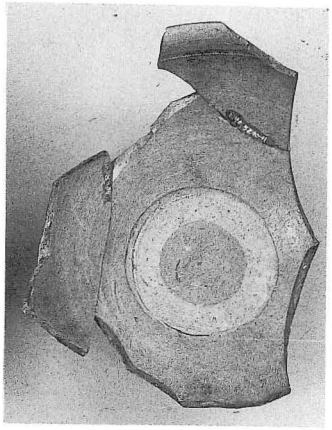
58



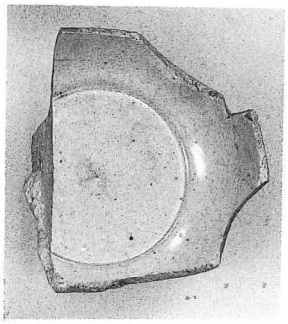
59



62



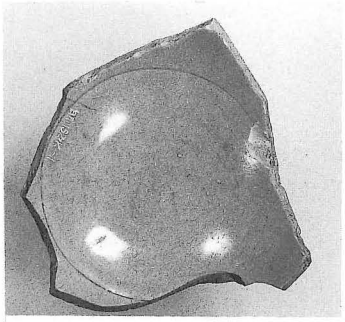
64

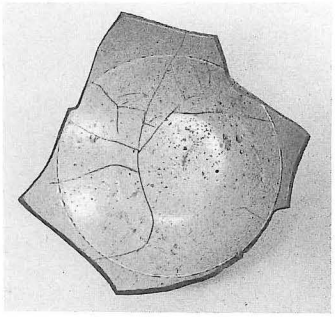


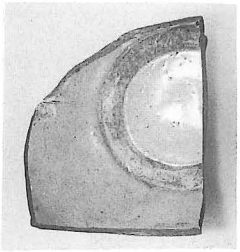
64

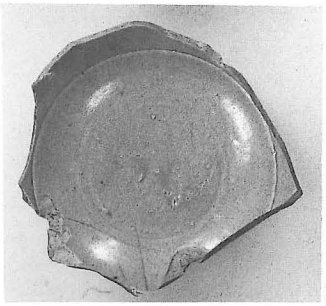
中国輸入陶磁器(白磁)②

図版24

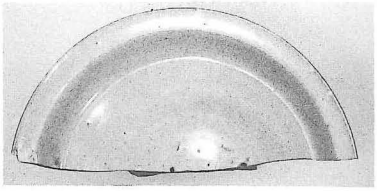

65

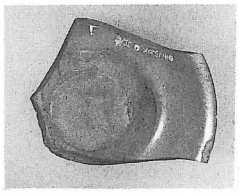

66

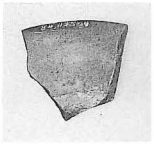

67

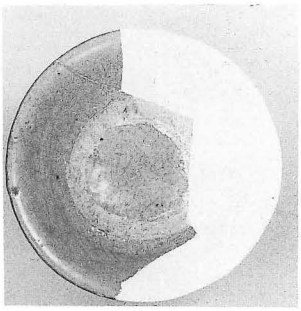

68

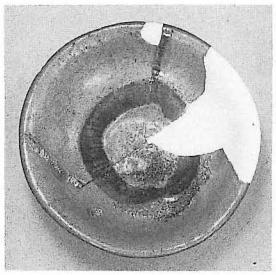
69

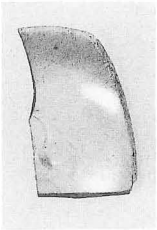

70

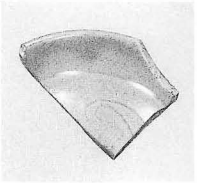

73

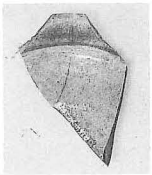

74

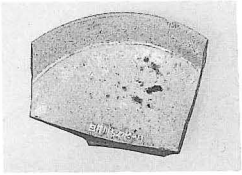

71

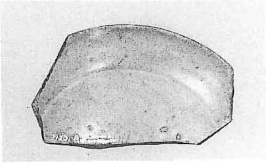

72


76

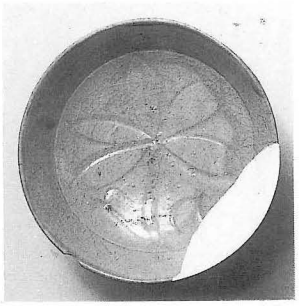

77


78


79


82

83


84

85

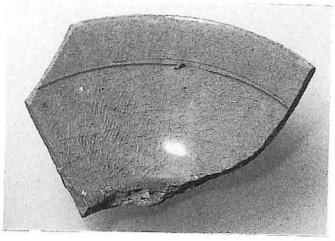
86

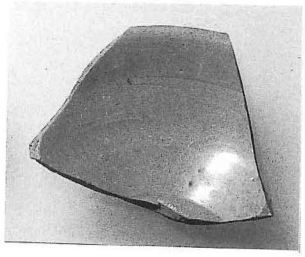
87

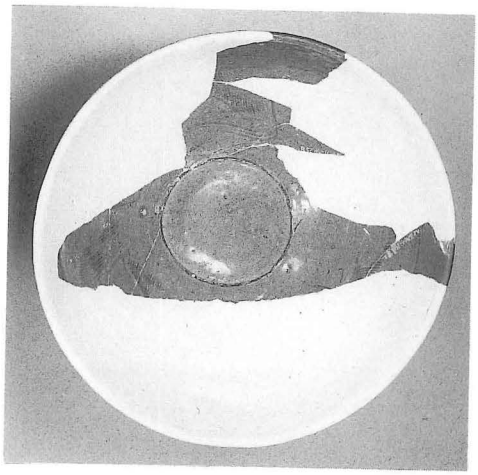
88

中国輸入陶磁器（白磁）③

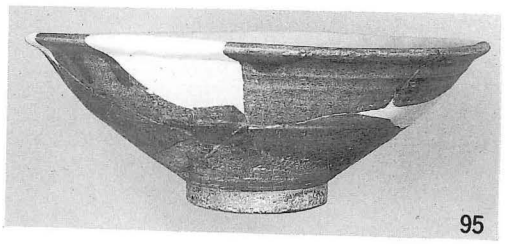
89

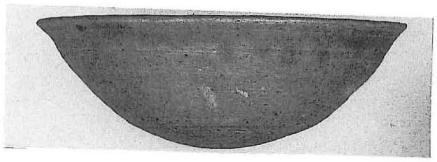

90

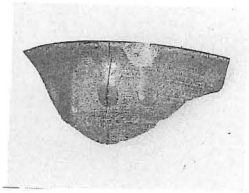

91

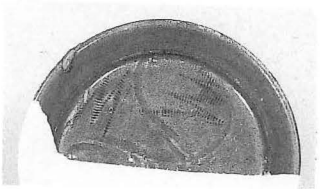

92

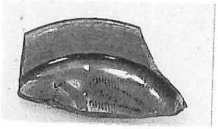
94

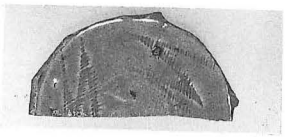

95


96

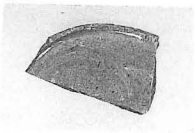

97


98


99

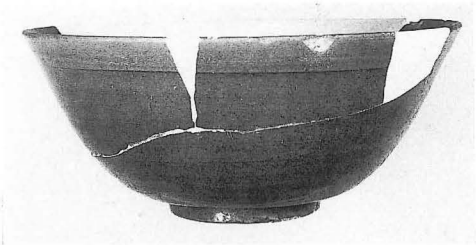

100

101

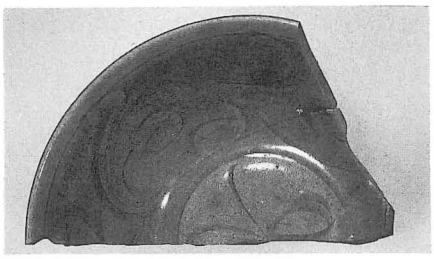

102

中国輸入陶磁器(同安窯系)④

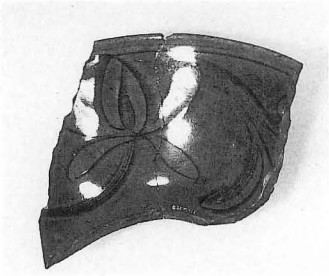
図版26



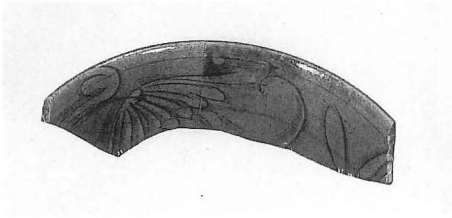
104



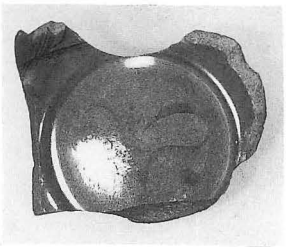
105



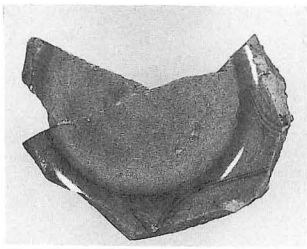
106



108

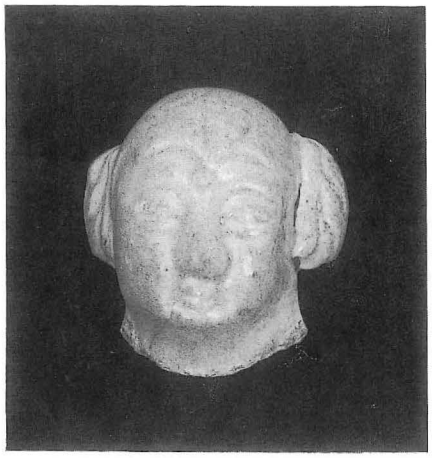


109



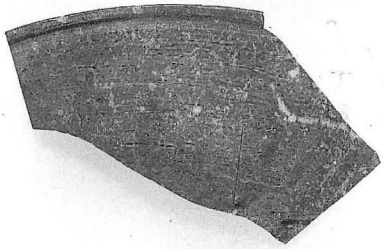
113

111

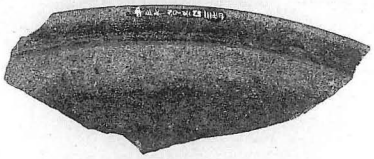


中国輸入陶磁器（龍泉窯系）および人形頭部⑤

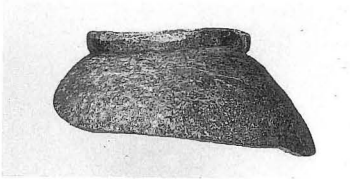
118



119

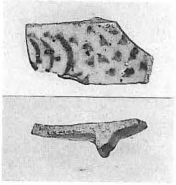


120



123

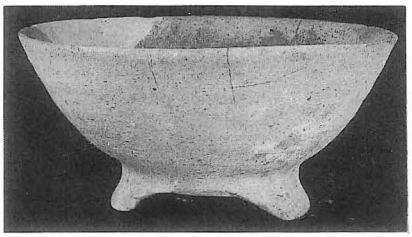
121

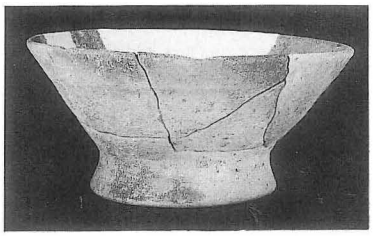


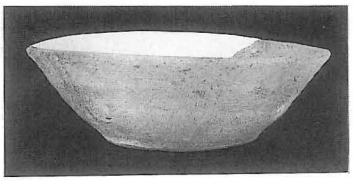
122

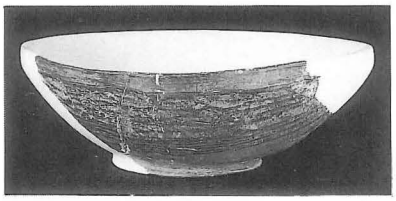
その他の輸入陶磁器

図版28

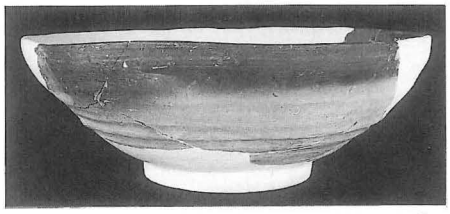




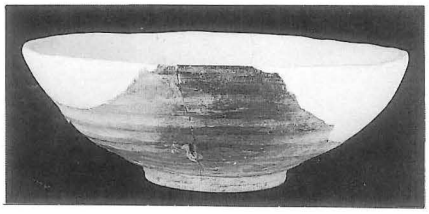




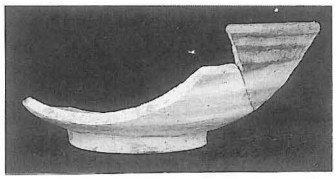
1



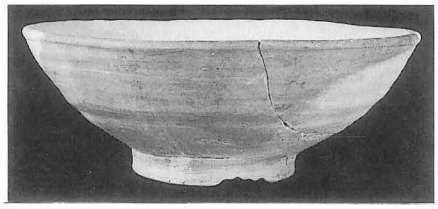
2



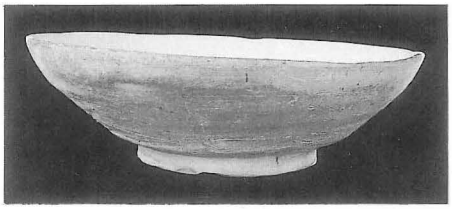
3



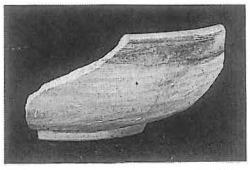
4



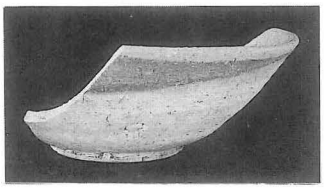
5



7



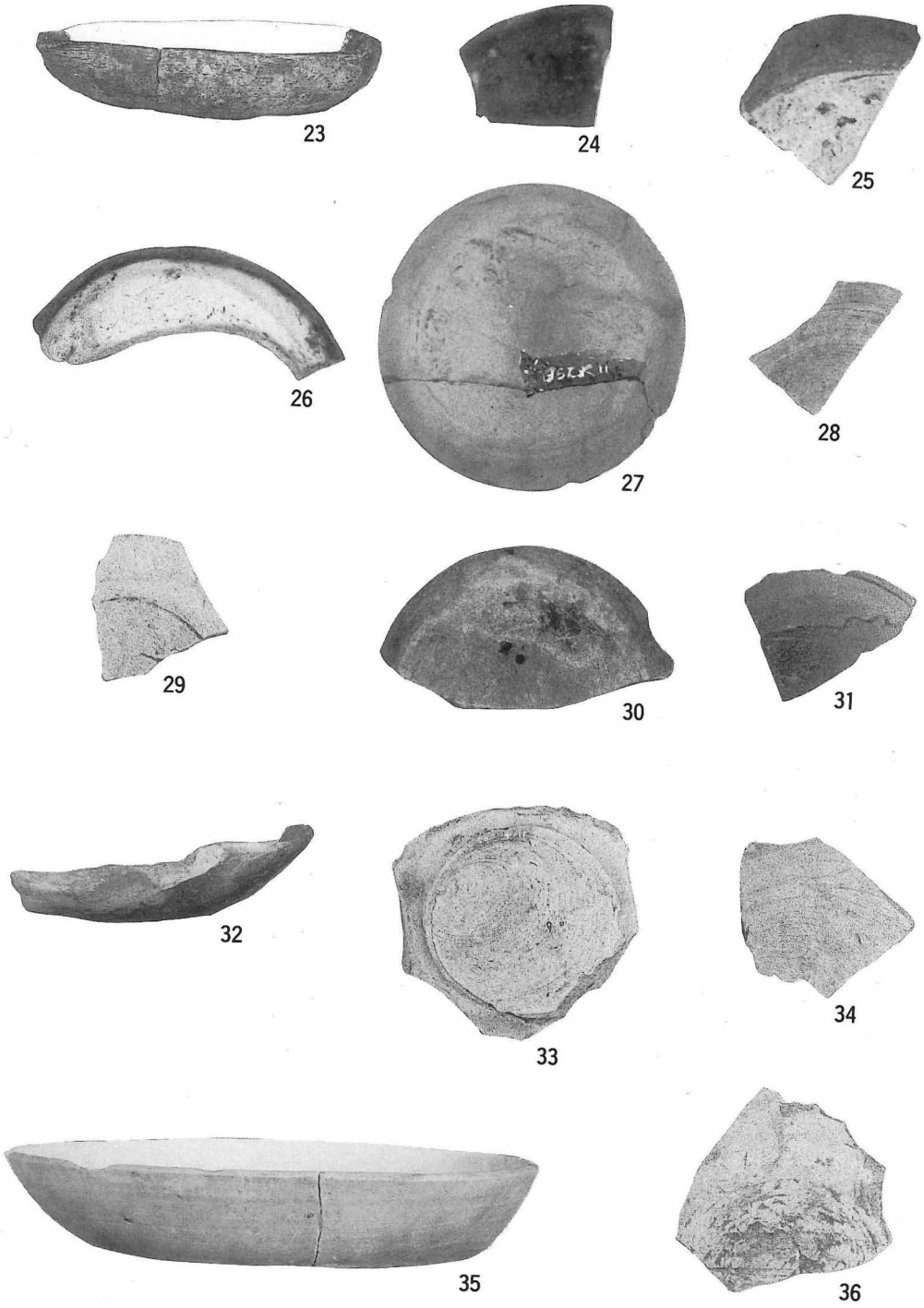
11



13

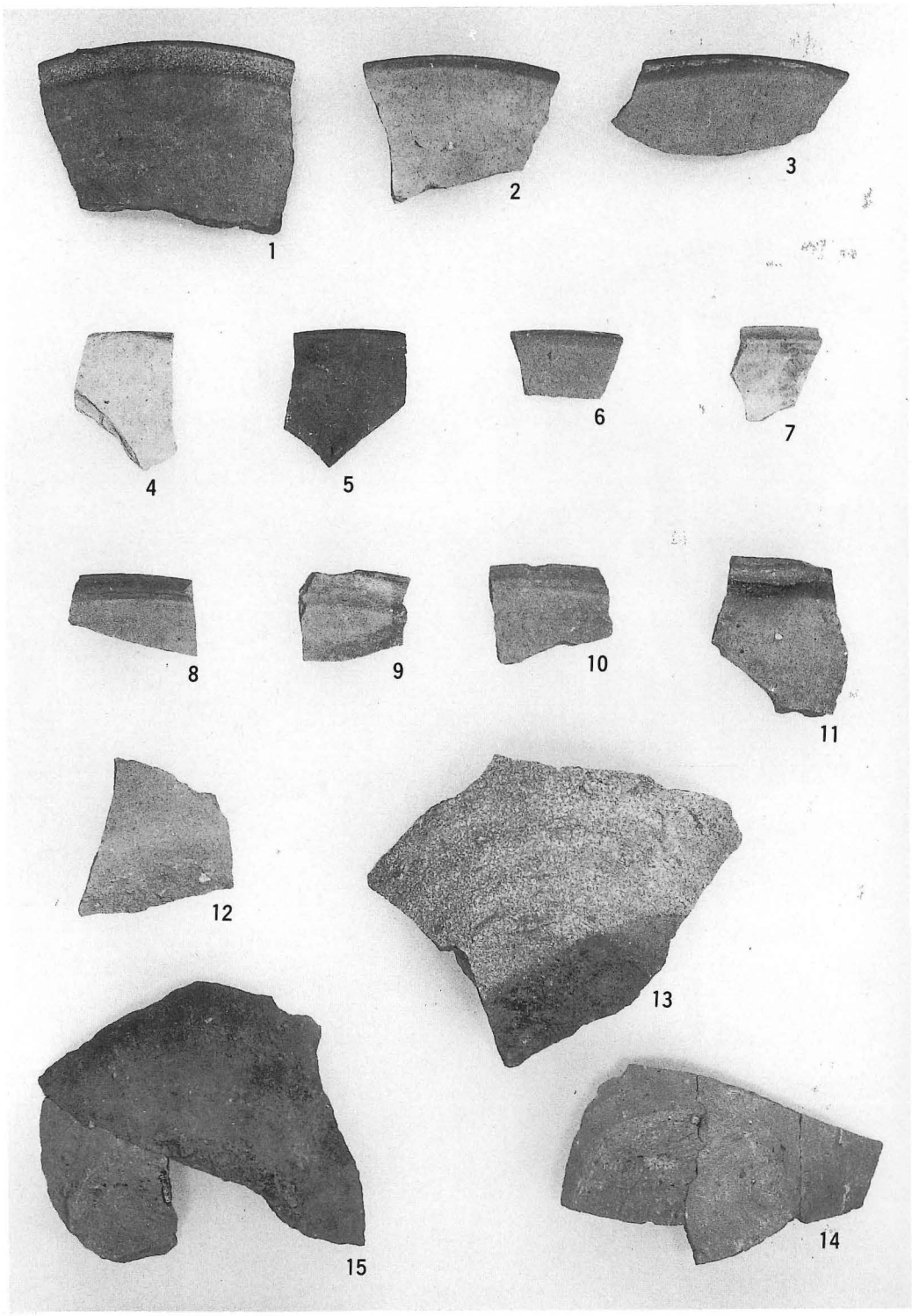
15

中世瓦質および土師質椀

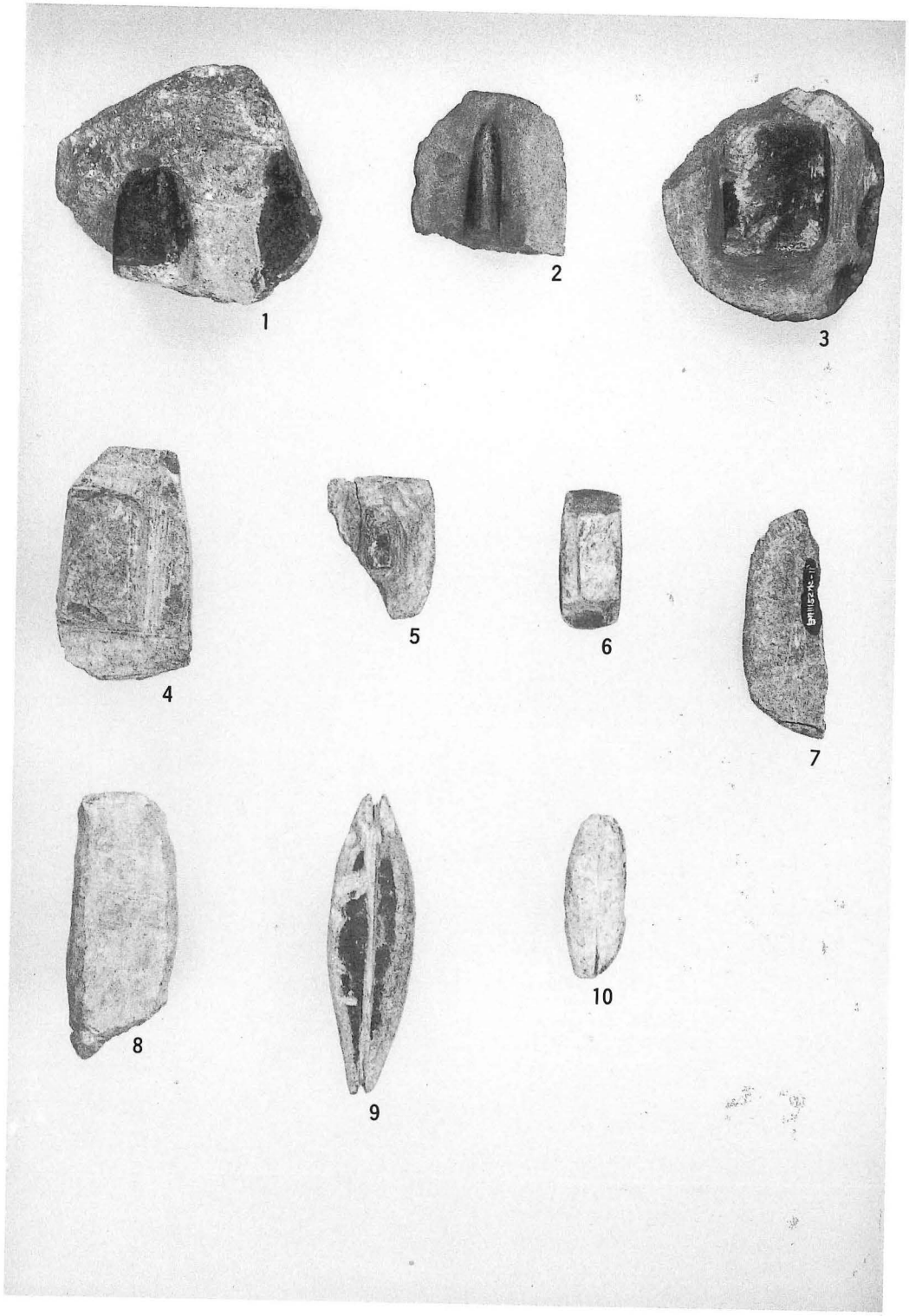


中世瓦質および土師質皿

図版30

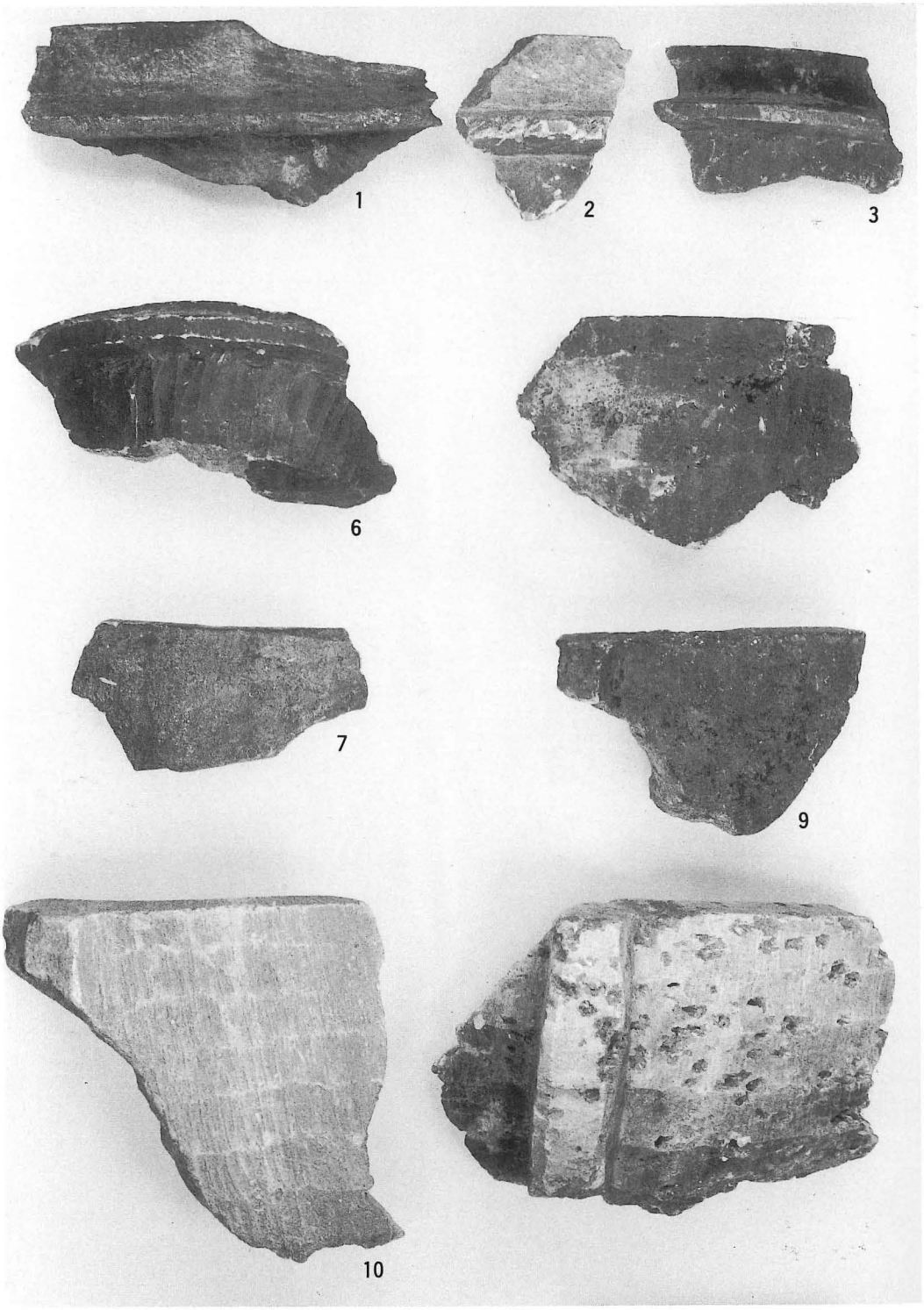


中世須恵質土器



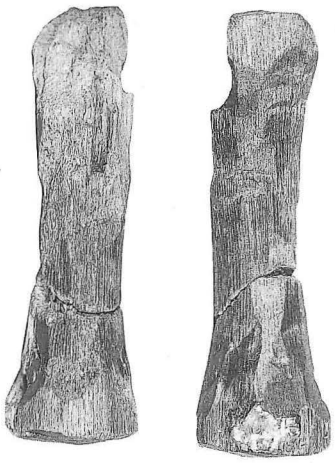
滑石製品

図版32

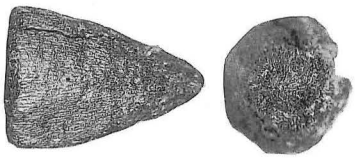


滑石製鍋

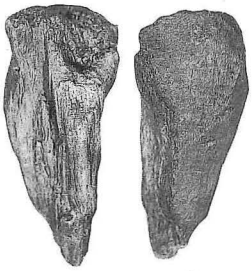
1



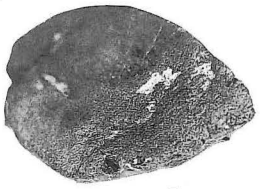
2



3



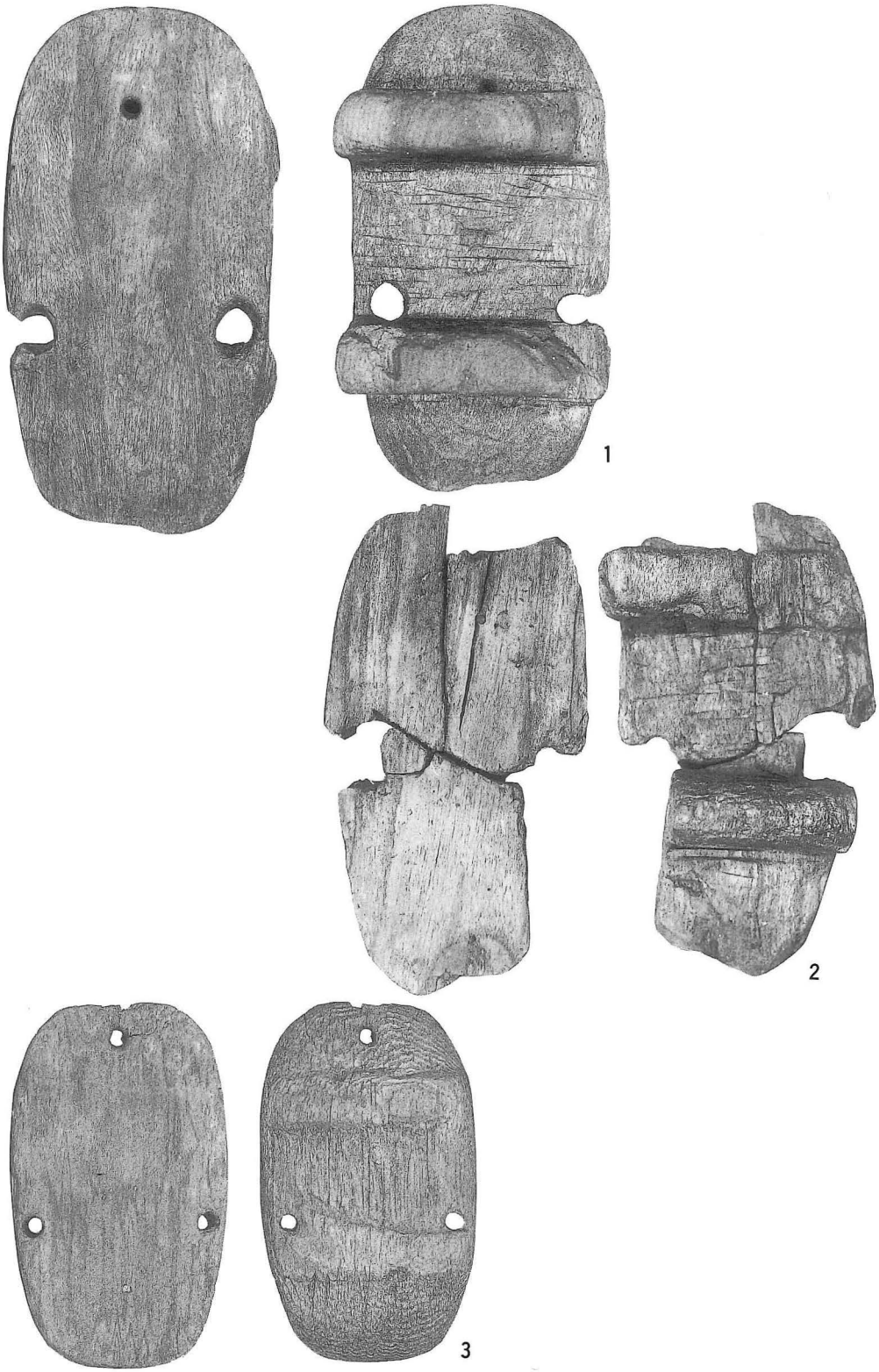
4



5

木器・木製品

図版34



木製品（下駄）

東彼杵町文化財調査報告書第３集

白　井　川　遺　跡

平成元年３月31日

発行　東彼杵町教育委員会
〒859-38　長崎県東彼杵町彼杵宿郷483番地

印刷　川口印刷株式会社
〒851-01　長崎市田中町1020-7